
幻想と転生の使者 ~ limited world crisis ~

上海ニート

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

幻想と転生の使者\limited world crisis\

【Nコード】

N0434N

【作者名】

上海二一ト

【あらすじ】

幻想郷で生き、幻想の中で死んでいった彼は原作をブレイクする為に別の世界へと転生する。基本、キャラ崩壊と原作ブレイカーが備わっています。自己満足のご都合主義なのでそれが無理な方にはお勧めしません。それでも楽しく読んでもくれる方は歓迎！ただ今、矛盾が無いが見直し中、後に誤字や脱字がないか報告があると嬉しいです。タイトルを変えました！第壱話に主人公の挿絵が入りました、投稿者『レイ』さんに書いていただきました！感謝感激ですね！！！！

幻想に散る、そして新世界へと生を受ける（前書き）

注意：非常に高い厨二病設定とキャラ崩壊が入っております。

文才皆無、話の進み具合微妙

幻想に散る、そして新世界へと生を受ける

ある日、神が世界を造った。

明くる日、世界に混沌が生まれた。

その次の日、世界に生命が育まれた。

四日後、世界に時が流れ法則が出来上がった。

そして終焉が訪れる日、世界は絶望し儚き命は断たれた。

それから幾らかの時が過ぎ、幾つもの命が交わり新たな世界が造り出された。

そうして、世界は幾重もの世界を造り出す。

終焉と再生は両立され己の魂尽きるまで戦い続けよう——それが選ばれた彼の役目！

そしてまた一つ新しい世界が紡がれる

「困った事になったわ」

「紫、これはどういう事なの？」

古びた神社に二人の女性が言い争いをしていた。

片方は黒い髪をポニーテールで括っている代々この世界を護つて来た巫女の血筋である はくれいれいむ 博麗霊夢

もう片方はブロンドの髪を纏めて後ろに結んでいるその名を知らぬ者が居ないというほどに有名な【賢者】の称号を持つ やくもゆかり 八雲紫

「不味いわ、このままでは彼が異世界へ転生してしまう可能性が出てきたの」

「っ！？あの人は安らかに眠れるはずじゃ！」

霊夢は紫の言葉に激怒した。この場では語られない過去の話。幾重もの平行世界で行われた異変解決。博麗の巫女が全てを解決したりはたまた普通の魔法使いが解決したりそして……最悪なバットエンドを迎えた世界だってある。

だが、その可能性の中で表の世界から来た少年は偶然なのか必然なのか出会ってしまった。

博麗の巫女に……最強の妖怪に……

彼はこの幻想の世界に愛され、世界の住民に愛された。

しかし、世界は不公平に動く。彼はある時の異変解決で命を落とす。

冥府の祈りをささげた幻想の住人は彼の安息を願った。

「そう、彼の安息は確定だった。けど、とんだイレギュラーが出てきたものね」

自嘲気味に紫は笑う。それに霊夢は怒りをぶつけるように睨む。

「どうしてよ。なんであの人がまた苦しまないといけないのよ!」

「大丈夫、転生したからといって苦しむとは限らない。むしろ、全てから解放されて日常に戻ったともいえる——けど、閻羅の外法によって彼は記憶を持ったまま転生するわ」

「くっ、私たちに何か出来る事はないの!」

苦虫を潰した様な顔になる霊夢。悲痛の叫びが神社に木霊する。

「あるわ、転生先の世界に境界を開けて潜入し彼が成長するのを待つ……そして彼を今度こそ解き放ってあげましょう」

「そうね、それが最善の行動なら——彼が救われるのなら！」

霊夢と紫は強き意思を瞳に宿した。そして——

おぎゃ おぎゃ

ある世界のとある個室で新たなる生命が誕生した。何処でもあるその光景は一種の神秘的な場面でもある。

「おお、男の子か……名前を決めよう！我が嫡男には一体どんな名前が似合うだろうか？」

「そうね……」

この赤ん坊の両親となった夫婦は同時にこの子の名前を思いついた。否、教えられたというのが妥当かもしれない。だが、嬉しさの余りに細かい事は気にしない。

「「そうだ（わ）！蒼真そつまにしよう！……！」

こうして縁授蒼真えんじゆそつまは転生を果たした。

そして、九年の時日が経った。

幻想に散る、そして新世界へと生を受ける（後書き）

これからリリカルの原作破壊を遂行する！

第壱話 幻想と呪法（前書き）

この小説は主に原作ブレイカーが加わる為にまともに進行しません。

誤字と少々改変を行いました。

第壱話 幻想と呪法

俺の名は縁授蒼真

ごく普通の家系に生まれ育ち現在九歳だ。まあ、ごく普通のとは若干言えんがな、俺としてはの話だが……まあいい。

昔から頭が良かった俺は巷では『天才』などと噂されていた。

……九歳で大学レベルの問題が解けるかというと無理だろうが俺には解ける。

これには壮大な理由がある。

一つ目、俺が異能の能力を持っているから

二つ目、俺が実年齢二十六歳だから

三つ目、俺が転生した存在だから

計三つの理由により俺は天才といえる程の立場に立っていた。

> i 3 3 6 6 0 — 3 5 4 2 <

「ふう、雑魚どもが群がるな」

海鳴市内とある空き倉庫で俺は怖そうなおじさんたちに言い放った。

「てめえ、餓鬼が一人で何しようってんだ！」

頬に十字の傷を負ったおっさんがにらみつけてくる。なんだこいつ……熱烈な剣心のファンか何か？

「ふーん、相手の力量も読めない奴が叫んだ所で俺の心には届かない」

「あんだと！人が下手に出てりゃ調子に乗りやがって！てめえら、

やっちまえ！」

「おいおい、アンタ何時下手に出たんだよ。寧ろ下手に出てるのは俺の方だぜ？」

何故こんな殺伐な状況になっているのかを完結の述べるところなる。

何か怪しい人物が小学生を誘拐していた。

←

偶然通りかかった俺は興味本位で尾行。

←

結果、突撃粉碎に出てみた。

とこんな過程が出来た訳だ。

「むうむう……」

何やら金髪のお嬢ちゃんがこちらをにらみながら何か言おうとしているが猿ぐつわがある所為で何が言いたいのか分からない。

「うりゃー！」

「おっと……子供に不意打ちとかどうよ」

やーさんの一人が人質見ている間に攻撃してくるが俺はそれを右から左へ受け流す———と思いきや打ちのめす。

「ぐふっ……こ、子供の腕力じゃねえ」

「そうですねーよく言われます（棒読み）」

何したかって？ただ単に突っ込んできたから巴投げしただけですが？
その時に首を思いつ切り絞めて置いたからそれか。

「さてと……残り三人か」

「ちつ、てめえら足止めしろ俺は人質と引き換えにたんまり身代金を頂いてくる」

「オス！その間、餓鬼を始末します」

おまつ……オスとかどうよ。あれか、お前は孫悟空か？

「オス、おら悟空！つええ奴と戦いてえ！（超棒読み）」

と俺がふざけている内に人質を連れてかれた。まあ、式を放ったから問題ない……ちーまんたい無問題。

「坊主大人しく捕まりな！」

「オス、おらやるっす!」

「はっ、帰れ! 太古よりある穢れなき海へと還れ、この屑どもが!」

さつきは人質という痛いげな少女がいた為に敵に対する態度を改めていたが世間体が無くなったから問題はない! 俺の戦い方は色々で精神面に及ぼすダメージが高いらしい……ただ、急所を前提に技を叩きこんで高らかに笑うだけなのに酷くない?

「さて……きんきんきんきんきんきん急急如律令」

俺は即座に親指の皮を歯でちぎる。そして持っていたメモ帳を一枚はぎ取りそれに血文字で術式を書いて行く。

「なんだと! ごらあ! ……餓鬼だからって容赦はしないぞ!」

そして安い挑発に乗った馬鹿が一人突っ込んでくる。だが、その前に俺の術は完成している。

「――！」

人が到底理解できない言葉で俺は呪文を呟く。

「喰らつとけよ、斬撃符」

書いた札を相手に投げつける。符は直ぐに刃になって馬鹿一名の膝小僧を切り裂く。

「うぎゃあああ……！……なんじゃこりゃあああ……！！」

「実にいい悲鳴だ。人質がいなければもつと甚振ってやりたかったが時間が惜しいんでね――急急如律令」

再び俺は符を作成しもう片方のデカ物に投げつける。

今回投げたのは【火爆符】相手の付近で爆発するという優れモノ。

「ぎゃあああああああ」

「中々の悲鳴だな。だが狂声の方がまだ美しいな」

倒れこむ二人を残して俺はさくさくとボスの後を追う。式である鬼を飛ばしているので何処にいるのかは把握済み。少し行った建物の電話で彼女の家に脅迫電話をかけている模様。

小さい奴だな。男ならもつとでかい事やれよ！

内心で悪態をつきながらも俺は奴のいる場所へと到着する。

「バニングスの社長さんよ、娘の命が惜しけりや——」

はあ、明らかにやられ役を買って出ているような奴だな。もうすぐ倒されてしまうというのに可愛そうな奴だ。

「急急如律令」

俺はさつと呪法を唱え、札を放つ。斬撃符はあっさりと十字傷の男の腿を切り裂く。男の呻く声が聞こえる。それが俺の最高のスパイスとなるのだがな、くくくつ。

「やつ、さつきぶり……返してもらっよう」

「お、お前は！仲間はどうした！」

「お決まりの台詞を吐くんだね。だったら俺もそれに習って——仲間？ああ、あの雑魚の事、俺を止めたいのなら後三百人は連れて

きな」

「さて——【縛】——」

「うっ、動けないだと！貴様何をした！」

「別に大したことじゃない」

さて、妖縛印で動けなくしたから後は——俺はおもむろに受話器を取る。

「こんにちわ、誘拐犯は排除しましたのでお宅のお譲さんは救われたでしょう」

ガチャン

電話を切る。さてと雑魚には気絶してもらおうか。

「刑務所で後悔するんだな。偶然にも俺がその場に居合わせた事を――」
「フン！」

「ぐっ」

男に当て身を喰らわせ眠らせる。これで粗方片付いた。御嬢さんは何処になった？

「うう」

「おっ、いたいた」

結構近くに倒れていたなので猿ぐつわと手首のロープを切断。これにて一件落着！

「大丈夫かい？」

「えっ、うん」

「そうか、で……この世はギブアンドテイクでことで見返りが欲しい」

「妙に直球で言うわね貴方」

少女は面食らった顔でこちらを見るが知らない。俺は直球勝負の男の子なんですよ。

「とりあえず、何も持ってなそうだから……身体で清算してくれ
今すぐに」

「え、ええええええええええ！……ば、馬鹿！！出来る訳ないでしようが！！！」

耳まで真っ赤に染めて少女は叫ぶ。ふふ、慌てっぷりが中々可愛いじゃないか。

「冗談、それよりそのポケットに入ってる物が気になる」

「はあはあ……よく分ったわね、これなんだけど道端で拾ったのよ」

それはとても綺麗な青色の石。一見、綺麗な欠片に見えるがかなりの魔力を小さな身体に隠し持っている事が分かった。

「それをくれ」

「良いけど……はい。で、でも助けてくれた事は感謝するわ——
結構カッコよかったし（ボソ）」

「何か言った？最後の方が聞こえなかったんだけど？」

「う、五月蠅いわね！！！！馬鹿！！！」

「おいおい……馬鹿呼ばわりは酷いだろ」

少女の対応に苦笑いを浮かべる俺。それよりも帰った方がいいかな。

「じゃ、俺は帰るけどもう捕まるなよ」

「えっ、一緒に居てくれないの！此処、何処だか分からない女の子を置いて行く気……！」

「はあ、分かりました……君の親御さんに連絡取ってこちらに来るまでなら一緒に居てあげるよ」

「ふん、当たり前よ！」

やれやれ絡み難いお嬢さんだ。

この後、傾向だが結局お嬢さんの意見で俺は強制的に親御さんと対面まで果たす羽目になってしまった。凄く感謝され多額の感謝料を頂けたのがメリットという事だろう。

第貳話 幻想と邂逅（前書き）

それはあたかも当然であるかの如く出会った。

第貳話 幻想と邂逅

とある日、俺は日が沈んだ後の海鳴市を満喫する為に散歩していた。

「珍しいものでもないかなと……まっ、そう簡単に見つかる——」

ドーン

画期的な破壊音が夜の街を揺らす。

ほう、中々世の中も捨てたものじゃないな。次から次へと面白そうな事が起こるんだからな。

現在は両親の下を離れ一人で暮らしている。

九歳にして一人暮らしするのは世間一般じゃ普通ないな。

私立聖祥大附属小学校という所に転入する事になった俺は親元を離れ此処に来た。

転入試験は余裕だった。まあ、小学生問題だからな。

で、週明けまで転入は待つて貰っている為にぶらぶら出来る。あの少女を助けた時も暇だったのでぶらぶらしていた。

今回も暇なので放浪していたといっても過言ではないというかそのまんま散歩していただけだが。

今の現状はというと俺は謎の影と戦う一人と一匹を遠くから観戦していた。

影としか言いようがないそれは赤い二つ目ので少女を捉えていた。

「どうすればいいの！！！」

「慌てずに僕の言う言葉を繰り返して！」

おお、何かクライマックス的な雰囲気になって来たな。面白い、俺も加勢してみるか？

「我は使命を受けし者なり」「我は使命を受けし者なり」

「契約の下その力を解き放て」「契約の下その力を解き放て」

「風は空に 星は天に」「風は空に 星は天に」

「そして不屈の心は この胸に」「そして不屈の心は この胸に」

「この手に魔法を レイジングハートセットアップ」

少女の持っていたビー玉ぐらの赤玉が光を放つ。

おっ？もしかして俺、記念すべき光景を目にしているのか？

「君を護る杖と防護服を想像して！」

「ええ！行き成り言われても！」

「早く！！！」

「じゃあこれで……」

何か頼りないな？手伝った方がいいか？

俺は少女が不憫に思えてきて少し同情した。

『standby ready』

何か機械音がした。少女の方をよく見てみるといつの間にか白い服に着替えていた。

そしてその手には魔法使いが使うような杖。しかし、根本的に違うのは機械的だとも言って置くか。

その時、俺は気がついた。影の化け物と俺の視線が合ってしまった事を——うわ、嫌な所に足を突っ込んだみたいだ。

「ちっ！こっちに突っ込んで来た！」

「えっ、民間人！危ない！」

「どうしようユーノ君！」

「どうしようもなのは！あれを止めるんだ！」

慌てふためく二人。だが、俺は静かにこう言った。

「騒ぐな、手助けは不要」

俺は隠れていた塀の角から抜けだし少女の下に駆け寄る。次の瞬間、俺がいた場所に黒い塊が降って来た。無論、角が粉々に砕け電柱が『俺が何をした！！』という感じで折れたが気にしたら負けだ。

それより優先戦事項は彼女が誰でこの化け物をどう調伏するかだ。

「やあ、夜分遅く失礼。月夜に紛れた嫌な気配がしたので来てみれば君たちがいた。これは一体どういう事なんだい？」

「え、ええと……」

なのはという少女は戸惑い肩に乗っているフェレットを見る。

「民間人を巻き込む訳にはいかない。資質が無いモノは奴らには勝てないからね。だから君は逃げるんだ！」

と叫ぶ。フェレット……貴様は幾つか勘違いをしているようだな。

「民間人ね。ふふふ、そうだな。俺は民間人だ、君たちがいう資質とはいかなるものなのかね？」

「この世には魔法というものがあるんだ。君にはその資質がない！だから——」

「確かに俺は魔法を使った事がない。が——勘違いしては困る！俺は戦えない雑魚じゃない！」

背後に接近した影の化け物に火爆符を投げつける。

爆発と同時に化け物が破裂してバラバラになる。

「きゃっ!?!」

『 protection 』

桜色のオーラがなのはの杖から発せられ飛び散る残骸を防いでいく。

「な、なんなんだそれは！魔法じゃない！全く別のもの」

「そうだな、別物だ。俺は魔法が使えないが陰陽術には長けているからね」

「……………。仕方ない、なのは！この子と少し開いた場所まで走るよ！」

「うん！分かった」

「そうこなくちゃね！これだから散歩は止められない！」

なのはside

「ふふふ、面白い事になって来たな。あの化け物再生してる」

「ジュエルシードが発動しているんだ。あれを封印しなければ何度でも奴は復活する！」

私たち三人はユーノ君の意見で一旦、あの影から距離を置く事にした。

もう一人の私と同じ一般の子はこの状況を大いに楽しんでる気がするの。

私かというと魔法とかユーノ君が喋った事とか色々大変な事が多くて頭の整理が出てきてない。

「よし、ここなら！なのは君があれを封印するんだ！」

「ふええ！！？どうすればいいのか分からないよ！」

「ははは、土壇場じゃどうにかなるのが鉄則だぜ！良いだろう、アイツが追ってくるようなら俺が止めてやる存分に考えてくれ」

そういつて彼は影が居るであろう方向に視線を向けている。

「落ちつくんだ。目を閉じて君だけの封印の呪文が浮かぶ筈」

「うん、やってみる」

私だけの呪文――

「おつ、早くもお出ましか！用意できてるか？俺はバッチリ役目をこなすぜ！」

「思ったよりも再生が速い！くっ、なのは！」

目をつぶっていてもあの影が飛んでくるのが分かる！

早く……早くしないと！

「——【縛】——」

「なっ、止まった！何よりいまだ！」

どうやら彼が何かしてくれたみたい。落ちついて私は言葉を探した。
自分の中にある可能性を——自分だけの呪文を——

「封印すべきは忌まわしき器。
ジュエルシード！」

「ジュエルシードを封印。」

「リリカルマジカルジュエルシードシリアルXXI 封印」

『sealing・receipt number XXI』

桜色の帯が影を縛っていく。そして――

「封印出来たのか？」

「そうみたいだ。なのは、あれがジュエルシードだ」

青く光る水晶の様な綺麗な石。ジュエルシードはレイジングハートに収納された。

「じゃ、終わったみたいだから…俺は帰るぜ」

「待ってくれ。君のその力は一体？」

「あん、これは俺が生まれつき持っている能力だが？」

「まさか希少技能！？」
レアスキル

「そうじゃねえの？よく分らん、俺はこの街に滞在してるからまた面白くなったら呼んでくれ」

「ふえ、これは？お守り？」

彼から渡されたのは神社でよく見かけるお守り。刺繍で安全確保第一とかいてある。

「その中に特殊な式神が入っていてな。声に出さずとも呼んでくれればすぐに駆けつけるさ」

「あ、あの……今日はありがとうなの。私の名前は高町なのは！貴

方は？」

「俺か……俺は縁授蒼真だ！」

こうして私は魔法という物と同時に蒼真君との出会いを体験した。

第貳話 幻想と邂逅（後書き）

やっちゃたぜ！

だが、後悔はしていない！

次回『幻想と再び』お楽しみにね！

第参話 幻想と再会（前書き）

蒼真はあの後ゆっくりと有用を取って私立聖祥大付属小学校へ通う事になったのだが……

第参話 幻想と再会

私立聖祥大付属小学校……三年一組

俺は今日からこの学校で色々と学ぶ事になった。

まさか二度目の小学校を体験するとは思ひもしなかった。

小学校など必要ないと親に抗議してみたが

『ぬおおおお！！父さんは悲しいぞ！こんな小さな頃から登校拒否とは！何がいけないんだ！そうか！学校の質が駄目なんだ！ならば、此処だ！』

と適当に選んだ場所が此処だった。海鳴市にある聖祥大……面白い事も色々あるしなかなかの市だと思っていたのだが

黒板には俺の名前がでかでかと書かれている。

「今日から皆のクラスメートになる縁授蒼真君よ!」

「どうも、天才です」

「そう、蒼真君はこの学校の編入試験過去最高の記録を塗り替えた天才児! だけど、ちゃんと仲良くしてあげないと駄目よ!」

「「「はーーーーい」」」

どうやらクラスメートの反応はそこそこいい。

と思っていた矢先

「「あっーーーー!!!!!!!!!!??.??.?」」

完全にシンクロさせた声で俺に向かって叫ぶ人物が二名。

高町な……んだっけ？それといつぞやの金髪の譲ちゃんだ。

偶然としては出来過ぎだと思っただが？まさかあの人の仕業じゃないだろうな？

俺は約一名の名前を前世の記憶から呼びもどす。

八雲紫……最古の妖怪賢者であり幻想郷の守り手である。

流石にないない……と信じたい。

「無視するな」

「無視しないで！」

「ああ？なんだ、誰かと思ったら高町えーと「なのはだよ！」と金髪の譲ちゃんじゃないか」

「あら？縁授君、高町さんたちと知り合いなの？だったら席は高町さんの隣でいいわね」

何故かなのはの隣に座っていた女子生徒が荷物を纏めてあいてる席へ移動した。

「……………地獄か？」

俺はHRが終わるまで左右両方からの視線で暑苦しい思いをする事になった。

待ちに待った昼食時間！

だっ たんだが……嬢ちゃんとなのはに連れられて強制的に屋上に

「アンタ！何でここに！！！」

「蒼真君！どうしてここに！」

「喧しい！同時に同じ質問をぶつけるな！」

ダブルで近づいて来る二人を押し付け俺は呼吸を整える。ちなみに紫髪の女の子もいる、誰だろうか？恐らくはなのは達の友人だと仮定出来る。

「先ずは落ちつけ。俺は登校拒否を親に願い出たら何故か頭がいい

「っただけで此処に飛ばされただけだ」

「あ、アンタね！その年で登校を拒否するなんてアホなの！」

「いや、天才だ。天才性があり過ぎた俺は周りの人間によく思われなくてな。所謂、いじめにあっていたんだ」

話を切り出すと何か三人から『やってしまった』的なオーラが出てきた。

「あ、あの……ごめんなさい」

「そんな事情知らなかったのよ」

「大変だったんですね」

ああ、そういう事か。なのはたちは俺がいじめにあって登校拒否をしたと思っているのか。だが、それはnonsenseだ！

「お前らは俺がいじめで登校を拒否したと思っているのだろうが違
うぞ」

「えっ？じゃあなんで」

「いや、いじめが余りにも鬱陶しくてな主力の男子陣を半殺しにし
たらPTAから講義が多数掛かったから転校した」

ずるっ！三人が三人でずっこけた。

んっ？俺、変な事言ったか？

「何よそれ！心配して損したわよ！」

「も、もっと平和なやり方は無かったの？」

「エキセントリックですね、縁授君は」

「まあな、面倒事は武力で鎮圧するのは昔から人間がやっている事だからな。それより高町以外は名前は知らんから自己紹介をしてくれ……てかしろ」

言い方が癪にさわったのか譲ちゃんの額に青筋を立ててつかつかて来る。

「アンタ本当に何さまよ！」

「俺様以外に何があるのだろうか？」

「むきいいい……ああ言えばこついう！」

「まあまあ、私は月村すずか よろしくね、縁授君」

「ああ、出来れば蒼真と呼んでくれ。名字は余り呼んで貰いたくない」

「うん、蒼真君」

成程な、器量よし、容姿抜群……これはやはり

「モノは相談だが月村」

「私の事はすずかでいいよ。何、蒼真君？」

「俺の嫁になってくれ」

「えっ？ え、えええええええええええええええ！ ！？ ？」

パニックに陥るすずか。ふつ、驚く所も可愛いな。

「何を言ってるの!!!」

二人に突っ込みを入れた。

「ぐわっ！？なんだ、別に変な事はいってないだろう」

「大ありだよ！何で突然、プロポーズしてるの！」

あわあわと両手を上下に上げながら慌てふためくのは。

「変よ！普通、出会って数秒で告白何処るかプロポーズってなによ！」

「ああ、えーと……なんだっけお前の名前」

「っ！……アンタはワザとやってる訳その会話の破滅ぐあい」

別にワザとやっている訳ではないのだが？

「私の名前はアリサバニングスよ！それと何で行き成りプロポーズなのか言いなさい！」

「そうなの！」

何故、そんなにめり込まんばかりの勢いで突っ込んでくるんだのはわ。

「俺には夢がある！世界一素晴らしいハーレムを作るというな！故に可愛い女の子にあつたら速攻口説くを通り越してものにする！」

「死ね外道！！！」

バーニングパンチが飛んでくる。あれ？バーニングスだっけ？

軽くそれを避けて逆に腕を取ってバーニングス嬢を拘束する。

「ふつ、俺に勝とうなんて太陽に近づくぐらい無謀だ。知っているだろう、お前を助けだしたのは俺だぞ。てか、お前は俺の嫁！！！」

「くつ、確かに助けてもらった……嫁になった覚えはないわよ！」

「ああ、その件だがバーニングスの社長にハーレム理論について語つたら『感動した！君になら内の娘を預けられる』とか言ってたが？」

「何て勝手な事してるのよあんたたち!!!」

勿論、合法です！一夫多妻制ぐらいなら議会に突っ込んで可決させてやるわ!!!

「何かずるいよ！私だけ除け者!!!」

「大丈夫だ！なのはも嫁に入れる予定だ！」

「ふえ!!!そ、それはそれで困るよ!!!」

「嫁……お嫁さん〜ふえ」

何やら初日からカオスな空間が出来上がった。

第参話 幻想と再会（後書き）

カオスだった。

それだけ言えれば結構です

第四話 幻想と多妻制指導者（ハーレム主義）（前書き）

俺は超えるのだ！誰もが見た事がないハーレムというものを作ってやる！

美少女だらけうひょお！！！！

第四話 幻想と多妻制指導者（ハーレム主義）

某ハーレム騒ぎにより俺は学校の大半の男子を敵に回したらしい。

何処の学校にもいるらしくガキ大将みたいなのがハーレム思考の考えが気に入らなかったのか、俺に突っ掛かって来た。

アリサが止めていたが全く言う事を聞かないサル山大将。

どうやら、アリサの事が好きらしいが態度と知能の差が激しすぎるんだよ！！！！

それで校舎裏で決闘となったんだがギャラリーも参加してもらった事にした。

うん、主に男子。簡単に言うて見せしめという所だ。

純粹な男子や可憐な女の子はR指定で近寄らせなかった（無論、なのは、すずか、アリサも含まれる）が血の気の多い男子や不快感を持った男子が集まりギャラリーの大半は大将を応援していた。

しかし、嬉しい事に少数の男子は俺のハーレム思考に同調したのか

反対側に負けず劣らずの応援をしてくれた。

そして決闘は始まったのだが結果は言うまでもなくガキ大将が敗退。

というか一方的な惨殺みたいな処刑タイムが始まった。

まず、足払い。マウントを取ります……ひたすら強パンチ連打。

んっ？ああ、ちゃんとボディ狙いでやったよ。顔は親とかがうるさそうだから。

「ふふふ、はははははっは！……これ悲しいけど戦争なのよね！」

バーサカーソウル発動！

まっ、結局の所大将の返り血が鬱陶しいので殴るのを止めたんだがね。ちゃんと脅したからPTAとか教師にはばれないし最初にやって来たのはあちらだ。だから、俺に損害はない！

返り血を洗っている所をなのはたちに見られた為、適当にいい訳を思いつき口にした。

「いや〜トマトジュースこぼしちゃってさ、俺ってドジだからてへ
」

とふざけてみたら何故か三人とも青ざめた表情をしていた。

はて？何か間違えてしまっただろうか？

なのは s i d e

よく分らないけど蒼真君と別のクラスの子が喧嘩する事になって校舎裏に行ってしまった。

最初は私たちが止めていたんだけど別のクラスの子が『意地があるんだよ！男の子にはな！』とか言っていて聞いてくれませんでした。

ちなみに蒼真君は『サーチ&デストロイ』と英語で喋ってたけど……あんまりいい意味じゃないのは雰囲気伝わって来たの。

数分して帰って来た蒼真君に事情を聞こうとしたら手を念入りに洗っていた所を発見したの。

「怪我しなかった？」

と聞くと

「はははは、同級生相手にこの俺が傷をつけられるとでも思っていたのか！」

て感じで高笑いを始めたの……この頃、蒼真君が壊れている気がする。気のせいかな？

アリサちゃんが『何故手をそんなに念入りに洗っているのよ、アンタ潔癖症じゃないでしょう！』と目くじら立てて聞いてみると

「いや〜トマトジュースこぼしちゃってさ、俺ってドジだからてへ
」

軽い感じで返された。けどね、蒼真君の顔のあっちこっちに飛び散ったトマトジュース？が一杯かかってたけど可笑的いよね？トマトって此処まで赤くないもん……気の所為だよな？

私たちはこの時、蒼真君が実は危険な子供なのではと警戒を強めたの。

でも、その後

「敵対する者には恐怖を与え、味方には安息を与える……これが俺んちの家訓だ。だから、なのはたちが困った事や助けて欲しい時は言ってくれ。絶対に……この命に変えてでも護って見せる」

ふえええ！！！！

蒼真君は普段絶対に見せない様な真剣な顔つきで私たちを一瞥した。

その仕草にアリサちゃんやすずかちゃんも顔を真っ赤に染めた。

「んっ？お前ら風邪でも引いたのか、顔が赤いぞ（ニヤニヤ）」

分かっててやってるんだと思いつつも私は蒼真君の見せた普段あり得ない仕草を忘れない。

一瞬だけほんの一瞬とても悲しい瞳をした蒼真君を私は見逃さなかった。

蒼真
s i d e

ある日、俺はジュエルシードを探す為適当にぶらついていた。

今日の天気は晴れ々快晴だ。ふふふ、本日は何故か恋愛運が高かったからな、新しい出会いがあるかもとテレビからお告げがあった。

だから普段行かない所を周ったりと有意義な時間の過ごし方をしたんだが――

「ギャーース!!!!（鳴き声）」

「んっ？リアル世界にクツ〇先生だと！？てか、明らかにジュエルシードだな」

平凡な待ちに突如現れる怪鳥や〇クツク。ごめん、ネタすぎた。

俺は即座にメモ帳を引っ張り出し血で文字を書き記す。

「急急如律令——火爆符！」

怪鳥に札を投げつける。うまい具合に火爆符が命中し片翼がこんがり焼ける怪鳥。

そんな時、遠方から黄色い閃光が放たれた！

三日月形のそれは怪鳥に向かって飛来する。怪鳥は俺の攻撃の所為で警戒心が高ぶっていたのかそれを回避。

「ジュエルシードは渡してもらいます」

「…………子供？」

目の前に現れたのは黒いバリアジャケット（ユーノの説明によると身体を護る鎧みたいなモノだとさ）を着た金髪ツインテールの少女。

そして何より……！！！！！！！！！！！！！！

「俺はツインテール＆金髪萌えだあああああああ！！！！！！！！」

「ひつ！」

俺は吠えた何より高らかにそして雄々しく！

やばあい！めっちゃハーレムに入ってほしい！容姿端麗かつツイン

テールで金髪！……！

素晴らしい！excellent！……！ボードもびっくりの驚き
ようだ！……！

「すまん、はしゃぎ過ぎた」

「う、うん……それよりジュエルシードは——」

「そんな事よりもお茶しない？」

軽々とナンパする俺……

「えっ、だ……駄目だよ。今はそれどころじゃ！」

「それより、付き合ってくれ！いいや、寧ろ結婚して！嫁に来て！
……！」

「え、ええええええ！！！！？？？」

慌てふためく少女。俺の好物はこういうシチュエーションだ！

「い、いきなりそんな事言われても——あつ！後ろ——！」

「ギャー――ス！！！！（しつこいようだが鳴き声）」

旋回してきた怪鳥が俺の背後から特攻をかまそうとしてやがる！

だが、俺は腕に血で呪文を描く。

「うるせえええええ……!! ナンパの途中にしゃしゃり出てくる

なああああ！！！！！！」

強烈なメガトンパンチが怪鳥の右頬に炸裂。一撃で怪鳥は敗退、そして俺はジュエルシールドが暴れているので破魔符を投げて沈静。

やっとナンパが再会出来るぜ

ジャキン

首元には死神の様な鎌が突きつけられる。少女はいつの間にか手に持っていた武器を俺の首に押し当てていた。

「……………それを渡して」

「嫌だと言ったら？」

「この状況で貴方に拒否権はない」

さいですか。だが、甘いんだよなこれが……俺は前世幻想の世界で身に付けた便利な技がある。

「よいしょつと」

「なっ！？消えた！」

「此処だ、形勢逆転」

次元を少し開けてすぐさま別の場所へ直結させる技。

どこぞの巫女に教えてもらいました。

「っ！？」

俺は少女の首に斬撃符を宛がう。勿論、ただの紙切れにしか見えな
いけどさっきの戦いを見ていたなら大体予想は着いてくれそうだ。

「このまま、死んでおくか？」

「ひっ!？」

俺は普段では放たない様な殺気を帯びる。神経を硬直させるような
とても冷たい殺気。

「というのはうつそゝ、てっ!泣きそうな顔やめて!!!」

「だって……死ぬかと思った」

いや、確かに殺す気でしたが威嚇だったよ!威嚇なんだよ!

「ああ……珍しくまともに仕事をしようと思ったのに出先からくじかれるとかどうよ……まあいいや、はい」

「えっ、ジュエルシード……二つ、いいの？」

「うんまあね。基本的に俺は必要ない。集めていたのもただ単に綺麗な石で魔力が通っていたからだ」

「デバイスを持ってない……魔導師じゃないんだね？」

少女が小首を傾ける。確かに俺は魔導師じゃない、どちらかというと陰陽師とか宮司とかその辺りね。

「俺は蒼真。闇の眷属を狩っている陰陽師だ」

「……私はフェイト・テストロッサ。とある理由でジュエルシードを集める魔導師だよ」

この機会を切っ掛けに俺はフェイトと出会い。一層自分の強さについて考える事になるとは思わなかった。

番外編 幻想と賢者

「つまんねえ授業だな」

転生者である俺は名門とはいえ所詮小学生レベルの問題など簡単に解ける。

断言しよう、A111百点を取る自信すらある。

それをアリサに言ってみたら凄く激昂していた。『何で私より頭がいいのよ!』とか凄く理不尽な怒られ方をした。

仕方がないじゃない天才なのだから!

こんな感じで答えたら右フックを貰った。幼女のくせに良い拳持ってたんじゃないの!

危うく意識がフライする所だった。

「暇……だな」

授業中に呟いても誰もが無視というか普通は拾わない。

良い事を思いついた。特定の誰かに念話を送り込めばいいじゃない！

誰かではなく既にとある少女だというのがお分かりいただけたでしょうか？

『なのはたん暇なんだけど』

『ふえ！？私今暇じゃないよ！文系苦手だから克服しとかないといけないし』

ふーん、凡人って大変なんだな。なのはですら授業中にまじめに取り組んでいる。

『気分悪い、保健室逝ってクラ』

『字が違っと思っよ?』

「先生！気分とやる気が減退しているので保健室に行ってきます！
！！！！」

「ちょ、蒼真君！それ今回で五十回目——」

先生の意見など聞いておりません！！！！

俺は何故かアリサに睨まれながら教室を脱出した。

いざ！保健室へ！！！！！！

アリサ side

もうつ！？なんなのよ、あいつわ！！！！

『縁授蒼真』

自称天才、傍若無人、唯我独尊、IQ200オーバー、謎のオカルトちっくな技を使う

これが蒼真の私が知っている限りの情報。

最初に助けられた時はとてもカッコよく見えた。だけど、ハーレム発言はするわナンパするわで著しく評価が下がった。

今回の逃亡だって記念すべき五十回目だ。先生も天才だからといって余り関与しない。

何故かそれにとっても腹が立つ。

アイツ来るまでは私が一番だった。勉強だってそうだ、あいつは手を抜いている。本気を出せば全教科百点だって手に取る様になる筈だ。

おまけにリーダーシップまで持ち合わせている。

どんどん私の立場が無くなっていく気がして同時に恐ろしかったのかもしれない。

でも、あいつは私にハ、ハーレムに入れ宣言しておきながら余り構ってくれない。

いや、あれよ！？構ってくなくても寂しくないからね！あいつがいなくても問題ないのよ！！！！

今回だって一緒に授業が受けられるかと思った———じゃなかった！！！！

まじめな生徒に構成してやろうかと思ったのに案の定逃げ出した。

何時か捕まえてやるんだから!!!

蒼真 side

むっ!?! 桃色電波を受信した!!!!!! これは乙女が放つ特有の波長でフラグが立つ兆候でもある!!!!

しかし誰が——

そんな事を考えている間に保健室前

「ちゃーす、気分悪いので倒れに来ました」

返事がない。ただの屍の様だ。

それ以前に担当の教諭がない。

何時もならいるのだが——んっ？手紙

無造作に机の上に放ってあった置き手紙を手を取った。

以下の様な文章が記されていた。

—

私は自由になるの、あの人と一緒に

なので今日かぎりでやめさせていただきます？

教師にあるまじき逃走！？まあ、いないならそれでよく眠れるからよしとするか！

俺はいそいそとベットに横たわった。薬品の臭いと空調の心地よさが俺を眠りへと誘った。

「ふぁ……んっ？周りが紅一色……だと!？」

気付けば午前中どころか午後まで授業を潰してしまったらしい。

俺とした事が失敗した。

起きて周りを見るとベットの近場に俺の鞆が置いてあった。

「てか、また手紙か…なんだ？置き手紙のブームでも起こす気かよ」

それを手に取ってみる。三人分の可愛らしい字でこう書いてあった。

余りに気持ちよく寝ていたので起こさないで帰りますBYなのは

PS / 寝顔が可愛かったよ

ふんっ！アンタなんか夜道で刺されて死んでしまえ！！BYアリサ

PS / 寝顔は天使ね

ゴメンナサイ。アリサちゃんが失礼なことをでも本当に気持ちよさ

そうに寝ていたので私には起こせませんでしたBYすずか

PS / 寝顔は保存済みです

いやいや、可笑しい可笑しい。なのはが心配してくれるのは分かる、

がアリサは明らかに死亡宣告レベルの罵倒だろ！てか、さすが！！
！俺の寝顔を記録済みって何！？それ、何の為に使うの！！！！

「はあ、大変なもんだな……」

「そうね、何時も貴方は大変ね」

懐かしく昔何度も飽きる程聞いた声が一人しかない筈の保健室に響く。

「今……気のせいかな？それとも哀愁が立ち過ぎて幻聴でも聞こえたか？」

「幻聴は無いわ。気になったから貴方の事を見に来たのよ、蒼真」

俺は声の主を知りたくて、思い出したくて、会いたくて振り向いた。

「やっぱり……紫さんだ」

「そうよ、呼ばれて飛び出て——」

「呼んでないっす。でも、有難うございます」

俺は背後にいる人物をもう一度じっと見つめる。

派手な風貌の衣装に金糸の束で出来ている量の多い髪を纏めている女性。

この世のものとは思えない色香の様で怪しげな雰囲気は忘れたくても忘れられない。

俺の目に写るのは『八雲やくもゆかり紫』その人だった。

第五話 幻想と乱戦（前書き）

前の話は日常の断片ですので番外編と思ってください。

これからストーリーを進めて行きたいと思います

第五話 幻想と乱戦

恭介 side

「はあ、ここの所ジュエルシードが発見されない理由が判明した」

なのはが魔法少女になってから早一週間、ジュエルシードは一向に気配を見せなかった。

で、その理由はというと

「はあい、これでしょう？ジュエルシードとかいう魔石」

ひい、ふう、みい、よお、いつ、むう、なな、やあ……

「八つも所持してたんだ……紫さん」

「す、凄い。完全にジュエルシードを封印してる」

感嘆の声を上げるフェレットもといユーノ。

まあ、紫さんの結界に関しての知識と実力は人間には真似は出来な
いだろうからね。

目の前にいるのは伝説の妖怪といわれる幻想の賢者 八雲紫

何やら俺が転生してから時間と平行の境界を弄ってこっちに来たらしい。

他にも来たいといっているメンバーがいたようだが人間だったら寿命が縮むだけだから俺が完全に前と同じになるまでお預けらしい。

他の妖怪も長いが出来る役所や立場が無い為に断念。

結構人気が高いんだな、俺。

「ほえ……ジュエルシードが一気に九つになったねユーノ君、蒼真君」

「そうだな、して……俺は夜の散歩でも行くか」

時間帯は午後六時半、日が落ちるのが速いのかあたりは闇に包まれつつあった。

「あつ、私も」

「なのはは駄目だろ。家族に心配かけて前に怒られたんだろ？」

「うつ、そうだけど……あつ、そうだ！翠屋に寄って行こうよ！
！！お母さんたちに蒼真君の事紹介したいし」

「ん、別に俺は良いけど」

俺はちらりと横を見る。紫さんは日傘をさしたままにこりと笑みを見せる。

同時に頭の中に声が響いた。

『別に構わないわ。たまには人間界のスイーツも食べてみたいモノ』

万々歳みたいだ。てか、何故に紫さんはなのはの家が甘いモノを扱っていると分かるんだろうか？俺ですらなのはに教えてもらうまで分からなかったのに……そう言えば、金がかかる学校に行っている時点で想定するべきだったな。

「総員一致か……じゃあ、よろしく頼むよ」

「うん！こっちだよ！！！」

「あら？そんなに早く歩くとこけるわよ？」

この頃だがなのはから俺に向けられる親密度が上がった気がする。
簡単にいうと初めて出会った時は無理して付き合っていた感じが見て取れたが今はそれが完全に消失していた。

アリサやすずかに対して向ける様な好意の視線を感じる事がたまにある。どうやら俺の事を親友とでも思ってくれているのであろうか？

乙女心は理解が不明ゆえに解読不可能なのでこれ以上は検索しないでおこう。

『それが懸命ね。乙女心は変わりやすく脆くて傷つきやすいのよ』

いや、紫さん。勝手に人の心理描写を覗くのやめてもらえますか？

『いやよ』

サイですか……まあいいか。

俺はなのはの後を追いながらに紫さんと歩いた。

「此処が私のお家でお父さんが経営する『翠屋』みどりやだよ！」

「へえ、外装及び内装も確りして更に駅に近い……絶好のポジションだな」

「そうね、じゃあ入りましょうか」

俺はなのはに続いて店に来店。

「お母さん、ただいま！お友達連れて来ちゃった」

「あら、男の子ね。可愛い子じゃない、お父さん！今夜はお赤飯よ！」

「ぶっ！？はやつ！？高町家の人間は行動が速いのか！！！」

そう返事を返したのはなのはの母親だろう。異常に若い……どう見ても二児の母親とは思えない程の美貌と若々しさを感ずる。なのはも大人になったらあれぐらいになるのか……楽しみだな！

思わず絶句。なのはをみると凄く困った様にはにかんでいる。やべえ、victoryに可愛い。

「お、お母さん！蒼真君はまだそんな関係じゃないよ！」

「まだって事はそれ以上の進行があるということね。うふふ、良いわね若いって」

「あううう」

「何やっても俺はあの人に口で勝てそうもないな」

「ふふふ、そうね。人間とは成長を遂げるモノなのよ。だから今は勝てなくても何れは…ね」

独り言にも冷静に対処してくれるあたりは紫さんクオリティといっても過言ではないな。

「「内の娘は（妹は）絶対にやらんぞおおおおおおおお！…！」」

雄たけびと共に振り下ろされる木刀かけることの四本……？

「あら危ない」

軽い口調と共に紫さんは誰にも見えない様に隙間を展開。そしてそこから鉄扇を取りだすと優雅に木刀を軽々と防いでいく。おお、流石は防御力に定評のある紫さんだ。

「むっ、これは失礼。ご婦人が居られたなら気を配るべきでした」

と若い男性がそう告げる。

「だが、父さん。なのはが嫁に！」

と男性を少しばかりタイムスリップさせた感じの青年がそう告知する。

出来れば面倒事も解消してほしかったのが本音だ。

「お父さん！お兄ちゃん！蒼真君たちはお客さんだよ！蒼真君もお父さんたちと仲良くしてあげてよ！！！」

「『だが断る！！！！』」

三者同時に同じ事をいうか……異口同音という訳か。

「ええっ！？そこだけ何で揃ってるの！」

成程な。この人たちも漢おこであり兄であり父親でもある。

娘を取られたくないという心。妹は誰にも渡さないという心が感じ取れる。

俺はこれらの障害を跳ねのけて初めてなのはハーレム入りさせる事が出来るというのだな！

「神は言った！！目の前に立ちふさがるモノは敵だと！邪魔する者は壁だと！故に俺はあんた等を倒して先に進む！！！」

「上等だ！かかって来るがいい！！！」

俺は符を取り出し呪文を紡ぐ。すると小太刀ぐらいの長さの木刀が出現する。

「如何に娘を奪う輩でも年齢層はなのと同じ故に一刀流で勝負しようじゃないか」

とお父さん。

「だったら、一体一で戦おう！俺に勝てたのならのはと手をつなぐ事を許してやる！」

とお兄さん。

こうして俺は次の朝日が昇るまで高町家で二人の猛者と戦いを繰り返したのであった。

第五話 幻想と乱戦（後書き）

あれ？ストーリーが進みませんよ？

第六話 幻想と秘密（前編）

「という訳で俺はジュエルシード集めから離脱する」

と高町家男性陣と戦闘した次の日の事、俺はなのは達に告げた。理由は簡単である。

「正直、俺は夜の散歩がとても大事なのだ。だから予定を狂わされたら困るんでな」

「そうだよね、蒼真君にも予定があるもんね。私はこれからもユーノ君とジュエルシード集めを頑張るから」

そう返すのはだが何処か元気が無い気がする。

「まあ、たまには手伝ってやるか。散歩の途中でジュエルシードを発見なんて事もあるかもしれないしな」

「うん、そうならよろしくね」

俺はあいよと返事を返し日没時刻を越した街へと歩き出す。俺の本

職は陰陽師だ。闇の眷属たる妖……あやかし……つっても人に害のある者限定で狩っている。

どれが有害なのかとかは見たら分かるし今は紫さんも一緒だからなおさら手っ取り早い。

「いいのかしら？あの子、明らかに沈んでたわよ？」

「良いも悪いも無いでしょ。今は害悪な妖を搜索して倒さない……これだけ規模が大きい街なら問題なく人を襲う馬鹿がいるんですから」

奴らは姿は人と同じでも中身はただの貪欲な塊だ。人間社会に交じって平穩に暮らす奴らもいれば山などの未開の地で一生を終える奴だっている。俺が狩るのはどちらにも属さない無差別に人を襲い妖怪と人間のバランスを破壊する奴らだけだ。

「さてと……今日は裏路地辺りを周ってみますか……あんっ、何あの宗教団体？」

「よく分らないけどサバトとかそなんじゃないの？」

前方に見える黒いローブの軍団がずらりと人気の少ない森へと入っていったのを目撃した。おいおい、宗教やるにしても滅茶苦茶目立つのは勘弁してくれよ。

「あら？小さな女の子を運んでるようよ？貴女好みの可愛い子だわ」

「何ッ！？何て奴らだ！絶対に悪に決まってるな、あんな危ない格好で薄気味悪そうな連中だ。絶対に俺が正義であいつら悪だ！」

人間兵器に大量虐殺許しても美少女さるうのだけは許しません！

俺は怪しげな宗教団体を追う事にした。可愛いは絶対に何時も正義だ。

-
-
-
-
-
-
-
-
-
-
-
-
-

「あいつら何をしようとしてるんだ？」

「どうせ、神にささげる供物がどうか……て話よ。人間って一つの事に没頭すると頭がおかしくなるのかしら？」

「どうだろうね？俺はハーレム以外望んじやいないがな」

「それもどうかと思うわ。それより何時突撃するの？」

岩陰から俺達はサバト（仮）の集団を見ていた。

「どうやら始まるみたいね」

「そつだ——てっ、すずかぁ！？」

思わず俺は声を荒げた。何やら黒い十字架に磔にされているのはな

のはの同級生にして大事な友達、そして俺のハーレム候補の一人だった。

すると俺の中で何か燃えてはならない黒い炎が火を灯した。

「だ、誰だ!？」

ロープの一員がこちらに気づいたようだが遅い。何もかも全てが遅い。

貴様らは俺を……

「ああ、久しぶりに怒っちゃたわね。まあいいわ、存分に暴れて来なさい」

紫さんの言葉があつたのも理由の一つだが何より奴らは俺の友達に手を出した！

抹殺とか生ぬるい！生きている事すらを後悔させてやるわ！！！！！！！！

赤い魔法陣が幾つも形成される。そこから一斉に炎属性の術が放たれる。

「「「ぎゃあああああああああああ！！！！！！！」」」

今ので半分は吹き飛んだわ。この辺りに強い結界でも貼ろっかしら？

当初にいた人数は確か五十人前後だったけど今じゃ既にいてもぎりぎり十数人ね。

「ふはははははっはあああ、悲しいけど、これ……戦争だから！！！！」

地獄絵図ってこの事かしら？でも、地獄の方がまだマシね。今の状況は地獄の最下層よりも酷い有り様だわ。

蒼真が術を唱え、半分の人間が大抵気絶、その他の人間は運悪く川に落ちたり木にぶつかったりと……魔法的な何かにブツ飛ばされ

る人間の末路って題名で絵でも書こうかしら？

「ふう、粗方片付いたかな？」

「恐らく全滅ね。一応は加減してたのね、生命活動は誰一人止ま
てないわ」

「まあね、人殺しは趣味じゃないから」

もしこの子がDSならこの宗教団体は血に染まってたでしょうね。
それよりも蒼真があの子に駆け寄っていく。

「おっ、あんだけ激しくやったのにまだ寝てるな……それとも薬で
も盛られたのか？」

「いいえ、それはないわ。彼女は精神疲労か何かで倒れてるみたい
……何かを必死に我慢でもしたんじゃない？」

「我慢は身体に毒だな……俺も術を思いっきり使えたからすっきりした」

溜まっていたのね色々……まあ転生の件もあるけど何か訳のわからない事にも首を突っ込んだみたいだしストレス解消に丁度よかったってことね。

「さて、すずかの家は……俺は知らない」

「大丈夫よ、記憶の境界を弄って彼女の家の場所を調べたから」

「流石、紫さん。準備万端」

「全てを見通しているからこそ賢者といえるのよ」

私は薄く笑い少女を拘束していた十字架を弾幕を放って破壊する。

「よつと……ナイスキャッチ」

「それじゃあ、送るわね。後、私は用事があるから説明は任せたわよ」

「えっ、ちょ……ああああああ」

何か言いかけた蒼真は隙間に落とし私は空を見上げた。今宵も月が人の世を照らす。

さて、この世界に平和が訪れるのは何時頃になるのかしら。

なのはって子もそうだけど運命というのは時に子供に残酷な試練を与えつる……

さて、蒼真の代わりに妖怪の取り締まりでもしましょうか。

蒼真 side

「あゝ、お嬢様とは聞いていたが結構でかいな。マヨヒガの屋敷より立派だし紅魔館クラスだな」

俺は隙間に落とされてからすずかをおんぶして屋敷の前に立ち尽くしていた。

いやはや、思ったよりも立派な建築物だな。

「それよりもインターホンは……あった」

ピンポン

てなるのかは知らないが兎に角押してみた。

『どなたでしょうか？現在、月村家は事情があり込み合っております』

「えー、単刀直入にいうとすずかを拾いました」

がちゃん

何か切れた。流石に怪しく思われるか？まあ、正直にいっただけだがね。

「お待たせしました。私は月村家に属しているノエルと申します」

前置きなく現れるメイドさん。何だ？メイドさんは極めたら瞬間移動とか時間停止とか覚えるのか？

「どうもご丁寧に…俺は縁授蒼真といいます。すずかの同級生です」

「ああ、貴方が蒼真様でしたか。噂はすずかお嬢様から聞いております。立ち話も何なのでお屋敷にどうぞ」

「夜分遅くすみません」

お言葉に甘えて俺はノエルさんに着いて行くことにした。

-
-
-
-
-
-
-
-
-
-

「有難う、妹を救ってくれた事を感謝するわ」

「いえいえ、クラスメート兼お友達を助けるのは当たり前ですから」

とりあえず、すずかの姉である月村忍さんに事情を聞かれたので説明を簡略化した。

すずかが変な宗教にさらわれていた。

保護者同伴で俺は散歩していた。

怪しいと思って追跡した。

案の定サバトぽかったので撃退。

大部分は紫さんがやった事にした。

とまあこんな具合である。

「小さいのに勇敢ね。これからもすずかの友達でいてあげてね」

「もちろんですよ。でも、何故に宗教団体にすずかはさらわれたんですか？」

すると忍さんが黙る。よく見ると他のノエルさんやその横にいるメイドさんも気不味い表情をしてらっしゃる。

「そうね……貴方なら話してもいいかもしれないわね」

「忍お嬢様!？」

クールな印象を受けたノエルさんが驚きの声を上げた。

「月村家は代々特殊な血筋なのよ」

「特異体質ですか？確かに珍しいですが驚くほどの物ですか？」

もつともな疑問だろう。特異体質程度で驚く俺じゃないし別に世界は広い為に探せば幾らでも特異体質な人物は出てくるさ。

「そうね、それがただのならね……ハッキリ言うは私たちの家系は吸血鬼なの」

「へえ、凄いですね？でも、すずかは日中にでも大丈夫だったみたいだけどそこんどこどうなんですか？」

「……………余り驚かないのね」

「ええ、まあ……………自分も似たり寄つたりの存在なんで」

転生者とか最早俺ぐらいだろ。吸血鬼ならリアルで見た事あるしハ
ーレムに入って貰ってるしな。

「似た存在？」

「あー、どっちかというと対立した因果関係ですね……………急急如律令」

俺はポケットの札を取り出し式神を出現させた。鳥型の式神は宙を
舞い旋回を続ける。

「陰陽師なんですよ、俺」

「魔を祓う術者……… 本当に面倒な因果関係ね」

何故か警戒された。ああ、もしかして俺がアンタらを殺すとか思われているんだろうか？

「大丈夫ですよ。俺は害をなすものしか消滅させません、むしろ陰陽道を斜め上に走ってます」

「斜め上というと？」

忍さんは小首を抱えてきょとんとしている。勿論、斜め上とは妖怪と共存している事実の事だがこの世界に妖怪という存在はほぼ少ないので簡潔に述べるか。

「簡単にいうと魔を祓う側ですがどちらかというと祓われる側と共存してますね、俺は」

「共存を望む陰陽師ね。確かに陰陽道から言えば異端なのかもしれないわ」

「寧ろ、そこが面白いんですよ。異端だからこそ分かる立場や気持ちというのが理解できる」

ふと俺は幻想郷に運ばれた時の事を思い出した。

第六話 幻想と秘密（中編）

「此処は……何処だ？」

生い茂った森の中に少年は横たわっていた。

彼は蒼真。名字を剥奪され行き場をなくした者。

十七歳で屋敷から追い出され途中まであった路銀は既に底をついていた。

死を覚悟した蒼真は地面に横たわり目を閉じたのである。

だが、それから少し可笑しい現象が起こった。半場、寝かけていた蒼真を浮遊感が襲い目を覚ませば自分が知らない様な森の中に放置されていたという訳である。

「はあ、親切心が多忙の人が俺を森にでも運んでくれたのか？いいや、変な感覚があつたから妖怪の仕業か？まあ、どちらでもいい、今は腹が減って仕方がない。何処か民家はないか」

重い体に鞭打ち立ち上がる。死を覚悟していた蒼真は辛うじて気力を取り戻し家屋を探し始めた。

-
-
-
-
-
-
-
-
-
-

数分後

「すげえ長い階段を見つけたぜ。此处、上がったら人がいてくれる事を祈るか」

そびえ立つ石段を一つずつ上がっていく。

ある程度歩くと真つ赤な鳥居が見えた。巨大な鳥居であるが風格がある様子で人の手入れが行き届いている訳か汚れが少ない。

「はあはあ…… よっしゃ！人がいそうな気配がする。とりあえず水でも貰わないと」

必死に足を動かし蒼真は鳥居の中に入り込む、周りを見渡せば古風な神社がぽつんと建っていた。そして神社に必要な不可欠（けいたい）だと蒼真は思う）な赤と白を基調とした巫女が境内で御茶を啜（すす）っていた。

「よかった、人が——やべ、意識が遠のく……ぜ……くそお……
……こ……此処まで来て……これかよ」

ぱったりと蒼真は倒れ意識を失った。

「あら？神社の前で……人が倒れてる！？」

お茶を啜っていた巫女は蒼真が倒れている事に気付きすぐさま駆け寄る。蒼真の意識が無い事を確認すると首に指を宛がい脈を測る。

「一応は生きてるみたいね。でも、酷く衰弱してるわ。このままだと死ぬわね……これも私の仕事なのかしら？全く、お賽銭は無いし人が倒れてるし面倒事はどうして私の所にやってくるのかしら」

悪態をつきながらも少女は蒼真を背に乘せ物理法則を無視して空へと飛びあがった。

「これだけ衰退してるならあの宇宙人の所がいいわね。はあ、治療費はこの人が負担するでしょうけど労力は私が負担するのね」

やはり、文句をいいながらも彼女は目的地である永遠亭を目指し速度を上げた。

竹林を抜けた先、貫禄がある屋敷に少女は蒼真を運び込んだ。現在、少女と会話をしているのは黒と赤を対称に縫い付けた様な服を着ている美女。

「これは栄養失調ね。彼、余程酷い生活を送っていたのかやせ細ってたわ。でも、点滴を打ったから時期に回復するし栄養も送ったから無事よ」

「そう、まあ神社の前で行き倒れが時すでに遅しなんて事になったら後味悪いものね」

「ふう、貴女は不器用ね……心配なら心配といえいいのに」

「何の事よ」

じろりと不機嫌そうな目を美女に向ける少女。赤いリボンが目立つ黒髪の巫女の名は博麗^{はくれいれいむ}霊夢。れっきとした巫女で幻想郷の結界を支える重要人物である。彼女は血筋だけに妖怪を退治する能力に長けていた。それだけではなく空を飛ぶ程度の能力も開花済みである。

「やれやれだわ。まあ、それはさて置き彼は一体――」

「うつ……此処は何処だ？」

唐突に蒼真は目を覚ました。栄養失調で動けなくなつた蒼真だが彼は異常に意識の回復レベルが高い為に少しの物音で目を覚ますことがある。

「これは驚きね。此処まで早く意識が戻るなんて」

「へえ、外の人間にしては珍しいじゃない」

「んっ？アンタらは？」

「私は博麗霊夢。楽園の巫女と呼ばれているわ」

霊夢は起きた蒼真を観察しながら自己紹介をした。ついでにという感じで隣の美女も自己紹介を始める。

「私は薬師の八意 永琳よ。貴方は栄養失調で倒れていたのをこの巫女が助けてくれたのよ、一応は命の恩人だから感謝しておきなさい」

「一応って何よ！まあいいわ、貴方何処から来たの？」

蒼真はそれより二人に言いたい事があつた。

「腹減つた………何か食べ物ありませんか？」

「まあ当然の意見ね。分かつたわこちらが用意するから貴方は巫女と話でもしときなさい」

そして蒼真は此処が幻想郷で自分がその結界の外から来た事が判明しこの先霊夢と色々な異変を解決する事になるのだつた。

第六話 幻想と秘密（後編）（前書き）

ふう、キャンプから帰還しました。

故に小説を更新します

すずかファンの人には土下座で謝ります。

今回はそんな話です。

第六話 幻想と秘密（後編）

- - - - -

「色々諸事情がありまして妖怪とか人以外の者と共同生活する事が多くなりましてね。多少の事じゃ驚きませんし嫌悪の念も持ちません」

懐かしい情景を思い出し俺はほっこりとした気持ちがわき出てくるのを感じて表情を引き締めた。危ない危ない……もう少しでやける所だった。

「そう、狩る筈の者が狩られる筈の者と手を繋いで歩く……貴方はとても聡明な人間なのね」

と忍さんがおっしゃられる。聡明？俺が……「冗談はよし子さん！？」

「あり得ませんね。聡明という言葉は俺には似合いませんよ、寧ろ貴女の方が似合うと思いますか？」

「あらどうして？」

「それは簡単な事です。俺の話を聞いてくれたからですよ、見ず知らずのクラスメートの話を聞いてくれた……それだけでも頭の切れが飛びぬけていると思えますがね」

ただのクラスメートから告知されたきわどい話を理解してそれに順応する。それが直ぐにできるのは物事の理解がとても速く賢いと思う。

「ふふふ、中々貴方も賢いわ。そうね、すずかを助けてくれたお礼に今日は泊っていかない？多分、すずかも喜ぶと思うし」

「うーん、俺はほぼ一人暮らしに近いんで別にいいんですが……」（紫さん、今日この子の家に泊って来て良い？）

頭の中で紫さんに向かって念話を送^{テレパシー}ってみる。すると即座に返信が返ってきた。

（あら、もうそこまで取り行っただの？手が速いわねえ、いいわ…がつつりやって来なさい）

字が違う！？てか、取り行っていないし！普通に少々の身の上話と警戒を解いただけでこうなっただから仕方なくね！

（ふう、貴方鋭いようで鈍いわね。この際言うけど貴方の人の心をつかむ技術はD○○並みよ）

すげえ、俺の話術と仁徳って此処まで強力だったのか！仮にもラスボス級という事は…まだ、改良価値があるという事か。

（まあ、それも追々考えてなさい。今日は私も一度、幻想郷に戻るから好きにきなさい）

ぷっん

何かが切れるような音がした。どうやら念話が切れたようだ、紫さんは明日以降からは不在か……面倒な敵が出ると困るな。まあ、それはいいとしてお泊りの許可が出ただけでも吉となるか。

「どうしたの？突然、押し黙って」

忍さんが心配そうに顔を覗き込んでいた。うーむ、すずかも成長すれば此処まで来るのか……なのはに続いて逸材だな。それより適当にごまかそう、紫さんの存在を大まかにする訳にはいかないしな。

「大丈夫です。ちょっと、冷蔵庫の食材が痛まないか考えていただけです、ですがお言葉に甘えさせていただく事にしました」

「そう、じゃあ決まりね」

忍さんは言質とった！とばかりにガッツポーズを取る……非常に嫌な予感がするんですが？

「就寝する時はずすかの部屋で添い寝をしてあげてね」

「はい……………へい？」

何故か素晴らしい単語が俺の耳に届いたぞ！？確かに俺は聞いたんだ！添い寝というラストブリッドのキーワードおおおおおお

おおお
!!!

内心はこんな感じで大乱闘中だが表情に出さないのがハーレム王となる為の資質だ。とりあえず、ヤホッオオオオオオオッオオオオオオオオオオ

「貴方、確かすずかに嫁になってくれてプロポーズしたでしょ。だから同室でいいかなあって」

「喜んで（キリッ）」

俺は今までに無いぐらいに真面目な顔をしているだろう。女子と同室というのは男のロマンで何か間違いがあっても仕方がないといわれるグッドフラグ！

—
—
—
—
—
—
—
—
—
—
—
—
—
—

という訳で俺事、縁授蒼真はすずかの部屋にいます。小学生女子で感じの部屋です、ちなみに部屋に来る前に多数の猫を発見したことからすずかは無類の猫好きだと想定できます。

すずかは紫さんが言った通り精神的な疲労らしく一定の呼吸を繰り返している。

寝顔がとても可愛いです。ベリーベリープリティですよ！

「しかし、本当に添い寝して良いものか……別に尻込みしている訳ではないのだが、って俺は誰に言い訳しているんだ？俺も疲れたかな？」

「うーん、あれ？此処は……」

ベットに腰かけてあたふたしていると背後から聞き覚えのある声が聞こえた。どうやら、すずかが起きた様だ。よし、此処はユーモアを狙う視点で……

「男の子？……かぶ」

「がっ！？か、噛みつかれた！ああ、確か吸血鬼って言うてたな」

首筋に痛みが走る。気付けばさすがが無造作に噛みついてきた。何かチューチュー聞こえる！めっちゃくちゃ血を吸われとる！

ばさ

不意打ちに驚いていた俺のポケットから紙が一つ落ちた。すずかを噛みつかせたままにして紙を開く、夜目は利く方なので記されていた文字が読めた。

補足を忘れていましたが月村家は容姿端麗、明晰な頭脳、運動能力を持つます。

しかし、それを補う為の栄養素が不足するのです。その中でも鉄分が最も少なくバランスが悪いので月村家の人間は血を求める習性（異性が限定）があります。

故にすずかお嬢様は血を飲まないといけないのですがこの頃は血を飲んでいけませんので噛みつかれるかもしれません。が気にしないでください。

by メイド長 ノエル「K」エアリヒカイト

そういう事か！すずかはこの頃、血を飲む事に戸惑っていたのか。だから、丁度良く俺がすずかを助けたのでお礼という名の策略ではめやがった！

「くっ、貧血になりそうだが……俺はハーレム王になるんだ！！」

「んっ……………あれ？」

寝惚けていたすずかが目を覚ます。自分が血を吸っていた相手が俺だと分かったのか顔を青くしていた。忍さんから色々聞いたがその時にはすずかはおねんねしていたから俺が月村家の事情を知っていると知らないからだろうな、この反応わ。

「そ、蒼真君！？な、何でここに私何てこと……」

「はいはい、静かに別に怒ってないぞ。ちなみに月村家の事情は忍さんから聞いたから問題ない」

自己嫌悪でおろおろし出す前に先手を打っておく。正直な話なかれ
ても困るからな。

「えっ、お姉ちゃんから？」

「おう、さすが吸血鬼であるとか血を飲まないと体調崩すとか」

「で、でも私、普通の人じゃないんだよ！」

「ふーん、で？何か、俺はお前が吸血鬼だからって嫌悪する男だと
？ふっ、そう思っているなら断じて否！」

「ふえ？どうして、そう言い切れるの？私は人と違う。今日だって
殺されかけて」

うつむくすずか。……………嗚呼、こついつ暗い雰囲気は嫌いだな、俺。

ぎゅ

「ふえ、いちゃいよ、しょうま君！」

「H A H A H A H A、何を言っているか分かりません。そして俺はすずかが好きだから別に正体が何であれ恐怖しません」

俺はすずかの頬をつねってやった。だってさ、害の無い吸血鬼とかどこぞの500歳児から見たら五十倍マシだぜ。やり過ぎると泣かれそうだから手を離す。

「痛いよ、でも何でそんなに断言できるの？」

「簡単さ、俺がすずかより恐ろしい化け物だからさ」

「えっ？」

きよとんとするすずか。間違った事は言っていない、俺はこの世界において魔を祓う陰陽師であると同時に妖怪とも手を組んでいる。陰陽術を駆使すれば鬼だって出せるしやろうと思えば人だって躊躇なしで殺す事もある。

「俺は闇の眷属を祓う存在。人に害をなす化け物を殺す術者だ」

「術者？蒼真君は何か使えるの？」

好奇心半分と恐怖心半分といったところだろう。怖いもの見たさという言葉ある様に現状ではそう取れる。俺が使える術の中でも比較的に中級の技で驚かせてやるか。

俺は術式を展開した。

邪と生を分け隔てる境界よ——急急如律令

「うう、身体が重い」

決して小さいくない部屋を薄紅の半球が覆う。

「これは俺の結界だ。人以外の者が入ればたちまち力を制限され身体能力が減退し衰退していく。他にも一瞬で命を奪う術や人の心を惑わす術だってある……俺は何時でも人を殺すことが出来る。すずかはまだ可愛い方だ……だから、そんなに自分を悲観するな」

瞬時に結界を消しすかに一息つかせる。

「………………。蒼真君」

「なんだ？」

ぽつりとすずかは呟くように喋り出す。

「なのはちゃんやアリサちゃんには言わないで……………」

何処か声音が辛そうだ。震えている、自分の正体がばれたら友達に軽蔑されるかもしれないという恐怖心がこの子の小さな心を揺さぶるのだろっな。決してなのは達はそんな子じゃない、吸血鬼だからという理由で友達を見捨てる様な事はしない。

無論、すずかもそれは承知の上だろうが怖いのだろっな。

「ああ、心の整理が着くまで待ってやるよ。だが、条件が一つある」

「条件？」

「簡単さ、俺のハーレムに入ってくれ！……！」

今までの暗さを吹き飛ばす勢いで俺は宣言する。一瞬面喰らってい

たすずかはすぐに我に返った。

「うふふ、蒼真君はそればかりだね。うん、私はその条件を飲む事にしたよ」

「じゃあ、契約成立な。てか、眠いから寝ようぜ」

身体が子供だから夜になると眠くなるのは仕方ないので俺はすずかの天蓋付きベットに転がる。

「えっと、やっぱり一緒に寝るの」

「なんだ、嫌なら俺はソファに——」「違っよ！いやじゃないけど」
「おう……」

おお、此処まで無機反応されるとは思わなかった。すずかは少し恥じらいながら手を伸ばしてきた。

「男の子と寝るのは初めてだから……手を握ってもらえると嬉しいかな」

「まかせろ！！！！」

俺は小さなその手を握り締めた。若いだけあって凄くすべすべだなあ、マシユマロの様に柔らかい。すずかの手の感触を確かめていると横になった彼女から寝息が聞こえ始めた。

「早いな、それとも疲れたから倒れたのか……まあ、どちらでもいいか。すずか、お休み」

俺は彼女の頭を軽く撫でてやると疲れた体を癒す意味で目を閉じた。

てか、さっきのすずかに噛まれた所……傷がふさがっている。吸血鬼の便利機能だろうか？

そんな事を考えている内に俺はまどろみに落ちて行った。

O u t s i d e

蒼真が寝静まった後、隣に眠っていた筈の少女が目を開けた。

「蒼真君、ありがとう」

そつと彼女は彼の頬に唇を宛がった。

第六話 幻想と秘密（後編）（後書き）

蒼真「これですずかはハーレム入り決定だな」

上海二ート（以下上海）

「だろう、今回は月村家の原作ネタを蔓延させて更に蒼真の過去編を少しだけ紹介しました」

蒼真「ま、こんな感じでチヨクチヨク俺の過去がでてくるからよろしくな」

次回 第七話【幻想と金色】

どうぞお楽しみに

第七話 幻想と金色（前書き）

今回はフェイトの回です。この頃、スランプで文章が適当になってきてましたのでそろそろ抜けだしたいと思います

第七話 幻想と金色

フエイトside

変な男の子に出会ってから数週間が経った。

何故か私は使い魔であるアルフとその男の子とでお茶をしていた。

「むう、どうやら神は我に味方した……て、所か。まさか、また讓ちゃんに会えるとはな」

「フエイトこいつが例のジュエルシードをくれた変わり者かい？まあ、ハーレムなんてモノをその時歳で結成させようとしている時点で既に変だね」

今は海鳴市のとあるオープンカフェにいる。何故、こんな感じになったかというと少しだけ時を遡る必要がある。

-
-
-
-
-
-
-
-

「アルフ、今日はスーパーの特売だよ。普段は余り買えないお肉が購入できる」

「やったね、フェイト！」

私たちはあまりお金が無い為に普段はカップメンという簡易食料で賄っているけどたまにこうやって食品店の安売りで手に入る高級食材（肉）を奪取しているんだ。

私は周りの主婦よりも小柄だから列の中に紛れて速攻で獲物を確保できるから有利。

でも、今日は少しばかり違った。

『現時刻からタイムサービスを開催します。最大四割引きとなっておりますのでお早めどうぞ』

殺到する店内。アルフはカートを持って待機してもらっている。私の目的は経ったひとつの標的を入手するだけ。数量限定の牛肉、アルフは主にお肉が好きだから今回は本気で行かせてもらいます。

私は得意のスピードを維持したまま主婦の群れを突っ切る。小柄で小回りがしやすいこの身体ですいと熱気を放つ女性たちを抜いて行く。

目標は目の前、おひとり様二パックの文字が書かれているテンプレートの下に牛肉が配置されていた。

「いける」

私は呟いた。普通だったなら此処で決めれた筈だけど――

「せまく動きにくい。だが、俺はこの壁を越えて行く！」

彼がいた。この間、あった瞬間からプ、プロポーズを申し込んできた変な男の子。彼は凄まじい速度で主婦の群れに突入してくる。

サイドステップや身体を開店させ走ってくる。ほぼ、二秒弱で私の横に彼が現れた。

だけど、彼は私には気付いておらずまっすぐ私と同じ目標を補足する。

「うおおおおおっおおおおおおおおおお……！」

猪突猛进 この言葉が彼に似合っていた。

私は呆氣にとられていたがすぐに目標を目掛けて走る。

「小回りが封じられた!？」

呆氣にとられていた隙に主婦たちの速さに吞まれていた。

しまった、もう間に合わない！

「取ったどおおおおっおおおッおおおおお!!!!」

牛肉を二パック所持しながら彼は叫んでいた。恐らく今からでは牛肉を買う事は出来ないだろう、アルフごめんね。

「ふい、今日は肉だな……基本一人暮らしにはとても助かるお肉である。あれ？君はいつかの金髪少女じゃないか。買い物か？奇遇だな、俺も特売を買いに来たんだ」

屈託のない笑みを見せる彼はこの世界で多い黒髪でそこそこルックスもいいかも、そして何処か不思議な雰囲気を出していた。危険を感じる事もないし優しさも感じないそんな不思議な感覚。

でも、一つだけ分かるのは彼に敵意はなく簡単に人の心に入ってくるタイプだと。

「うん、でも特売品取れなかった。アルフには仕方ないけど今回は諦めるしかないかな」

「ふーん、譲ろうかこれ」

彼は牛肉が入っているパックを一つ私に手渡す。

とても有り難い申し出だけど……悪い気がする。

「悪いよ。私の事は気にしないで」

「そうだな……………それじゃあ、お茶に着きあってくれたらやるよ」

そう彼は満面の笑みを私に向けた。

蒼真視点

案外簡単に承諾してくれた。なんだか困っていた金髪の彼女を助ける代わりにお茶に誘うと少し悩んだ様だがあっさり受けてくれた。

で、現在適当に近くにあったオープンカフェにいる訳だ。

「そつだ、俺は蒼真、縁授蒼真ていうんだ、あんたらは？」

俺の前に金髪の少女、その横に耳？をはやしたお姉さんがいる。どうやら少女は余り喋らないが代わりにお姉さんがたくさん喋るらしい。

「私はフェイト、フェイトⅡテストロッサ」

「私はアルフてんだ。フェイトの使い魔さ」

使い魔という言葉に俺は反応した。つまり式と同じ存在であると認知した。

すぐに俺はお姉さんを探知し始めた。

片目を閉じ解析眼を発動させる。的確にアルフお姉さんの情報が流れ込んでくる。

確かにフェイトの使い魔で近距離においての格闘スキルが高い。何より獣型と人型に変身することが出来るという便利な機能を持ち合わせている。

「どうしたんだい？」

「いや、ちよつと使い魔てのが本当か調べただけ……獣型にもなるんならかなり便利だね」

「へえ、情報を取得できるのかい。それでフェイトを追って来たとかなら容赦はしないよ」

アルフお姉さんの瞳に危ない色の光が灯る。気の所為か……いや、気の所為であつて欲しいが拳を握りしめている。

「いやいや、それは無いって……先ず俺は魔導師でもないし、自由気ままに生きたいだけさ」

「アルフ、駄目だよ。彼はジュエルシードの搜索に協力してくれた、それにそんな人じゃない、でしょ？」

フェイトがこちらを見てはにかむ、OK…君の笑顔に俺の理性がぶつ飛んだ。

「くっ、そうさ。俺はそんなストーカーみたいな事はしない。てか、何だよその笑顔素敵度高い過ぎ俺もう死んでもいいわ」

「えっ！？そ、そんな事言われたの初めて……」

「ああ、確かにそんなたまじゃないねアンタ。悪かったよ、この頃白い魔導師とか邪魔が増えたからね。ちよいと警戒してたんだよ」

アルフお姉さんが険しい顔つきでそう告げる。白い魔導師？まさかと思うが――

「その魔導師……フェレットを連れてませんでした？」

「んっ、そういえば連れていたね。てか、アンタあいつらの事知ってんのかい！」

やっぱりなのは達の事だった。しまったな、ヤバいな、なのはとフ
エイトは若干関係が険悪かあ。

ちよつとばかりハーレムについてはルートを迂回させてなのはと鉢
合わせイベントを回避しなければ――

「あれ？蒼真君と……ええ！！？」

「あつ、ジュエルシード集めを邪魔している二人組！」

何だ？今日は吉日だった筈だろ？フェレットを連れた少女の声なん
て皆無な日に決まってるさ。

「そつちこそ！邪魔をしているのは同じだよ！蒼真、アンタこれが
目的かい！」

「そうなの？」

ぎゃあああああ、二人の目線が超痛い！

「ち、違う……俺はこんなイベントを起こす気はなかった寧ろ避けて通りたいくらいだ」

大量の冷や汗をかきながら俺は声を絞って返答する。

神がいるなら一言言いたい、空気ぐらい読んでくれ。

てか、神とか諏訪子とか神奈子だったら絶対に空気読んでくれないな。基本、面白い方向に持って行くからなあ二人。

「人払いの結界を貼るよ！なのは、今度は逃がさないで！」

「うん！分かった、蒼真君も何処かに退避して」

再び、いやあああああああ……！お前ら二人とも空気呼んで

よ！後ろに控えている二人組の視線が零下まで下がったわ！！！！

そんなこと考えている内に人払いの結界が貼られた。一瞬にして人が消えうせる。不気味な空間に俺たちは取り残された。

「レイジングハート、お願い」

「バルディッシュ、おきて」

『stand by ready・set up』

『yes , sir .』

それと同時に二人がバリアジャケットに変身。嗚呼、今日は吉日改めまして厄日だよ！雛、助けて！！！！めっちゃ厄い！！！！

「どうしてこうなったああ！！！！」

「おわっ！？どうしてんだい、泣きながら吠えたりして」

号泣し始めた俺にアルフお姉さんドン引き。逆に傷つきます、その反応。

「何故、こうなった！神はあれか争い事が好きですか！某少佐のよ
うに私は戦争が好きだとかいい出すんじゃないかな！……いい
ぜ、てめえがなんでも思い通りに出来るっていうならまずはそのふ
ざけた幻想を——ぶち殺す！！！」

俺は高々に宣言、それと同時に素粒子が集まる様に俺の右腕に光が
絡みつく。

そして俺は禁呪を解放する。このBADEND一直線のシナリオを
消し飛ばす為に！

「おおおおおお！……！禁忌術十二神融合、一神装着！彼のモノ
の名は【天狼】」

するとすぐに俺の右腕に白銀のガンレットが装着された。腕の先には
オオカミの牙を模す様に爪が二本伸びていた。

今すぐふざけた幻想をぶち壊す！……！行くぜ、俺とお前のルール

ブレイカーあああああ！！！！

第七話 幻想と金色（後書き）

次回、完全なる原作破壊ルールブレイカーが起動する。

二人を止める為に蒼真どのような決断をするのか

乞うご期待。

次回【幻想と規則殺し（ルールブレイカー）】

また見てね

第八話 幻想と規則殺し（ルールブレイカー）

なのはside

「おおおおおお！！！！禁忌術十二神融合、一神装着！彼のモノの名は【天狼】」

悲しい目をした子と私は対峙しようとした瞬間、蒼真君の雄たけびが結界内に響き渡ったの。

異様な気力を纏った蒼真君が右手を覆う籠手の様なものを装着していた。

「あれは一体……それにこの異質なオーラは、彼にはリンカーコアの反応は無い筈……いや、反応はあるけど微弱なモノだけどこの異様な気迫は何処から？」

目の前にいる子も訳が分らずぶつぶつと蒼真君を観察していた。

「ふんっ！フェイトの邪魔をするってんならあたしが相手だ！」

「アルフお姉さん、俺は戦いたい訳じゃない。温いといわれようが甘すぎると卑下されようが俺は護りたい物を守護する！！故に手加減は初手だけだ！」

異質な右腕を高々に上げて蒼真君は前に見たこの子の使い魔さんを目掛けて突進して行く。

決して遅くないスピードで使い魔さんも蒼真君を狙って拳を突き付ける。

「っ！？スピードはアンタの方が上みたいだね！だけどデバイスもないアンタが何処まで私とやれるか見ものだね！」

「はっ！スピードは……だと？スピードもの勘違いだろうが！！！」

蒼真君が彼女の初手を素早く回避し右手を構える。一撃が決まると確認した使い魔さんは腕で身体を護るような姿勢となる。

「ふんっ！ 甘ったれたガキの一撃なんて——がはっ！？」

ズガガガガガ

高速で撃たれた蒼真君の一撃は彼女を向かいのビルまで吹き飛ばす
威力が——てっ、ええええええええええ！！！！

可笑しいよ！物理的に可笑しいよ！？蒼真君ぐらいの身体なら成人女性を百メートル近く向かいにあるビルの最上階まで飛ばすなんて出来ないよ！

「えっ？ア、アルフが……」

「手加減はちゃんと加えてやったぞ。ビルを突き抜けてないだろ？」

蒼真君、それは手加減とは言わないと思うなの。

フエイトside

ズガガガガガ

コンクリートを砕く音とともに向かい側にあるビルへとアルフがめり込んでいた。

一瞬、何が起こったのか分からなかった。気付いたら蒼真にアルフが吹き飛ばされていた。

「えっ？ア、アルフが……」

「手加減はちゃんと加えてやったぞ。ビルを突き抜けてないだろ？」

蒼真、それは手加減とは言わないよ。遠くで見えにくいけどアルフはビルにめり込んでいるだけで大した外傷はないみたい。これも蒼真の考慮なのかもしれない。

「えっと、貴方の名前は？私は高町なのは」

ふと、白魔導師が自己紹介を始めた。なのは……戦いたくはないけど私にはお母さんを助けるという大きな理由がある。だからこそ引けない。

「私はフェイト、フェイトⅡテストロッサ」

でも、名乗られたからには名乗らないといけない。それが最低限の礼儀という物だとお母さんにならった。

「フェイトちゃん！話し合うだけじゃ、言葉だけじゃ何も変わらないって言うていたけど、話さないと、言葉にしないと伝わらない事もきつとあるよ！ぶつかり合ったり、競い合う事になるのは仕方がない事かもしれないけど…だけど！何もわからないままぶつかり合うのは…私、嫌だ！」

なのはと名乗る少女がそう豪語する。確かにそうだ、彼女の思考はこの間まで小学生だった女の子としてはとても理想的だと思える。

だけど、それは甘さだ。戦いにおいてそれは油断に繋がりが敗北に繋がる。

「私がジュエルシードを集めるのは、それがユーノ君の探し物だから…ジュエルシードを見つけたのはユーノ君で、ユーノ君はそれを元通りに集め直さないといけないから。お手伝いをするようになっ

たのは偶然だったけど、今は自分の意思でジュエルシードを集めるの！自分の暮らしている町や、自分の周りの人たちに危険が降りかかったら嫌だから！…これが、私の理由！」

「私は——」「フェイト！答えなくていい！」

そこでアルフが復活。私の言葉を遮った。

「優しくしてくれる人たちのところでぬくぬく暮らしている様な奴になんか何も教えなくていい！あたし達の最優先事項は、ジュエルシードの捕獲だよ！」

そうだ、私たちの最優先はジュエルシードを集める事、そこまで考えて私は思考がストップした。

理由は簡単だ。アルフの背後に鬼如き覇気を帯びた蒼真がいたからだ。

「しゃああああああ！！！！大魔法『オマエ・モウ・ツツコンデ

「口《お願いだから黙れ！！！！》」

「あぐう！！！！」

そのまま、アルフは先ほどのビルを貫通し更に奥へと突っ込んでいった。

ガクガクガクガク

なのはと私は盛大に震えた。夜叉ともいえる蒼真がとても怖かったからだ。

「あ、あの蒼真君？じゃなくて、蒼真さん？あ、あの人大丈夫なの？」

脅えに脅えたなのはが丁寧口調でアルフの体調を気遣う。それもそうだ、私も無事でいたらと願うけどそれ以上に自分の生死が気にな

る……助けてお母さん！

「H A H A H A H A 何を言っているんだいなのか？ 僕が美人を傷つける訳ないじゃ無いか！！！！とりあえず、フェイトおおおおお！！」

「ひゃい！！！！？」

唐突なフリに噛んでしまった。だって心底驚いたんだ。

「お前の理由を効かせて貰おう。理由次第ではジュエルシードを集めるのを手伝ってやるから」

「えっ！？ 本当！」

私は驚いた。確かに蒼真は以前に私にジュエルシードを二つくれた。それは彼の気分であったしそれ以外は今日に至るまで会う事はなかったし驚愕の発言だった。

「なのはもいいたろう？お互いの理念が一致すれば戦う理由が無くなるし俺はお前らが傷つけあわなければそれでよし」

「そんな、勝手に許されると——」「大魔法『オ・マ・エ・モ・ダマーレ』《続・貴様もめりこめ！》」アツーーーーー」

なのはが連れていたユーノとかいうフェレットが蒼真に飛ばされてアルフの後を追う様に飛んだ。

「……私の理由はお母さんの手伝い」

「ふーん、娘に頼んで母親の方は何やってるんだ？」

「お母さんは色々忙しいから何時も家で研究している。それにジュエルシードがいるみたい」

「危ない事をしない筈……でも、お母さんは一体何をしようとしているのだろうか？」

私はその時、お母さんに着いて初めて疑問を覚えた。

蒼真 side

「成程、母親が何をしているかなんて興味はないが世界征服とかそんな大それたものじゃないなら共同戦線といこうや」

「そうだね、私もそれがいい。ぶつかり合ってばかりじゃお互いを知れないの!」

「私も……お母さんを早く喜ばせたいしそれでいい」

よっしゃあ！これでBADENDは回避できたぜ。危ないかった、下手打てば激突！みたいな展開になっていたしな。でも最終的にはジュエルシードをどちらかが全て所持しなければいけないしな。

それは追々考えるという事で……んっ？何か忘れている様な？

その頃、遠く離れた場所で

「きゅ～なのは」

「フエイト」

二匹の動物が倒れていたのを誰もが忘れていた。

第九話 幻想と邂逅（第二弾）

「さて、本題に入ろうか」

和解をしてから翌日。

俺達は海鳴臨海公園で今後の行動を整理する事にした。

ただでさえジュエルシードは見つけにくくなのはとフェイト、それとアルフとユーノを総動員させても駄目らしい。

故に大賢者じゃたる紫さんの出番なのだが……居ないしな。

「残り六つのジュエルシードを集めるにはどうすればいいのかって事だよな」

「そういつこった。流石ユーノ話が速くて助かるわ」

「でも、どうすればいいんだい？あれは発動前だと気配も場所も分かりやしない物なんだよ」

「うん、やっぱり強制発動しか」

フェイトが危なかつしい事を口走っているが俄然却下だ。
強制発動なんぞして俺のハーレムメンバーに傷でも付いたらどうするんだって話だ。

うーん、やっぱり紫さんに知恵を借りるしかないか。
式神では探せる所は限られるしな、精々俺を中心とした一キロ圏内ぐらいが限界だ。

昔の様に術が使えないのは口惜しいな。

せめて、この身体が九歳ではなく十七歳ぐらいならもっと調べられる距離を拡張できるしいざとなったら破壊系統の術式を刻み込んだ札を使えば軽く撃退出来るのだな。

「はあい、呼んだかしら？」

「「「「うわぁー！！」「」「」

「あつ、紫さんだ。どうしてここに？」

突如、会話をしている俺たちの背後に紫さんが登場。

どうやら持ち前の能力でぎりぎりまで隠密行動をしていたらしい。

あつ、スキマは使ってないみたいだ、ばれると厄介だしな……主に説明が！

「アンタ誰だい！突然出てきて、全くというほどに気配を感じなかったよ！」

「アルフお姉さん、大丈夫彼女は八雲紫……遠く離れた親の代わりに付き添ってくれるおば——ぎゅああああ……！」

「お姉さんよ、口のきき方を調教した方がいいのかしら？」

「そ、蒼真君大丈夫？人体からして出てはいけない様な赤い液体が後頭部から漏れてるよ！」

おがががが、やべえ……後頭部にチューリップが咲く所だった。

冗談抜きで妖怪の腕力と鉄扇のコンボは九歳の耐久率じゃ耐える事なんて出来る訳がない！

「そ、それより紫さんが来たなら話が速い。ジュエルシードなら紫さんが探知できる」

「ええ、出来るわ。但し、今回はただ働きはしないわよ」

「前はただでくれたもんね。今回は感謝の気持ちを込めて翠屋のケーキをプレゼントするなの！」

「確かに美味しい条件だけど却下。今回のジュエルシードは六個は固まっている場所にあるから骨が折れるのよ」

「ガーン！」

紫さんが苦笑いをしながらカルチャーショックを受けたなのは慰めている。

どれだけ翠屋のケーキに自信を持ってるんだ、なのはよ。

軽いコントにフェイト達が呆気にとられているので本末転倒する前に脱線した話を元に戻すか。

「つまり紫さんはジュエルシードの場所を既に把握済みで事ですね。場所だけでも教えてくれればこちらで回収する」

「ん〜そうね。そこよ」

「そこって……海しかないじゃない」

扇子で公園の向こうに見える海を指す紫さん。

まさかと思いますが今回のジュエルシードは……

「ええ、だから『底』にあるのよ」

「もしかして海ですか？」

「ええ、海の底よ。蒼真、貴方の式神なら搜索出来るかもしれないけれど年齢に合わない術を使えばリバーズが激しいわ……でも、少しの間なら元の身体に戻るわ」

そう紫さんが耳打ちしてくる。

元の身体に戻る？という事だ……まあ、紫さんのチート能力を使えば確かに存在しえるモノなら全てに干渉できるから何でもありだし。

「しょうがないな……お願いできますか」

「蒼真、どうしたの？」

「今から大人モードになりますので少し下がってくれ」

「えっ？大人モード？？？？」

「どういう事だい？」

「よく分らないけど下がってればいいの？」

なのは達が少し退避したのを確認した俺は紫さんに合図を送った。

「じゃ、始めるわ……それ！」

「それだけ！？……うつ！何か光り出した俺！！！」

——大丈夫、痛く話ない筈よ

そりゃどうも

——ただ全身が発行して爆発するだけだから

ちよ、それはかなり痛いんじゃないか！

——痛覚ほど嗅覚に劣らず神経が麻痺する物はないわ

ええ！？それは痛いを通り越した衝撃になるって事か！！！！

――頑張ってね♪

いやあああああ！！！！！

ユノside

蒼真が皆と距離を離れてから異変が起こった。

彼の身体が発光し出した、それと共に蒼真の悲鳴が

「いやあああああ！！！！」

何が起こっているか分からないが死んでしまったら成仏してほしい。

「陰陽弾を喰らえ！うわつまぶし！！！」

何か聞こえたけどスルーする事にした。

なのはも目を閉じながら成り行きを見守っている。

ドカーン

次の瞬間、爆発音と共に光が弱まった。

辺りは煙に包まれている為にまだ肉眼じゃ見えない。

「っああああ！！！！一瞬だけめっちゃ痛かった！死ぬかと思ったわ
！」

そんな叫び声とともに煙の中から何処かで見た事のある青年が飛び出した。

あれ？黒髪で……………まさかと思うけど！

「えっ！？もしかして蒼真君！！！」

「もしかしてじゃなく俺だ」

その青年は蒼真だった。

蒼真 side

「っああああ！！！！一瞬だけめっちゃ痛かった！死ぬかと思ったわ！！」

一瞬でダイナマイトでも連続投下された気分になったわ！激痛とかそんなの通り越して痛みが変な感じで残ってやがる。

んっ？おお！戻ってるぜ！死んだ時と同じ背丈になってる為かなのは達が低く見える。

てか、実際小さいなアルフと同じぐらいの目線になったぜ。

「えっ！？もしかして蒼真君！！！」

なのはが凄く驚いた表情でこちらを凝視してくる。何だよ、そんなに見られると照れるぜ！

「もしかしてじゃなく俺だ」

そう答えてやると四人は茫然とつつ立っている。

大げさに驚きすぎだと思うけどな、アルフなんて思考停止してやがるみたいで動きが止まってるぜ。

「ほ、本当に蒼真？」

「フェイト、俺以外に誰に見える？」

「カッコいいお兄さん——はっ、じゃなくてそっだね！」

「うわい！言質とったぜ！あれですかね、フェイト様はお兄様属性が弱点ですか？」

「なら、俺このままで過してもいい気が……それだと学校に行けなくなるから無理か、それ以前に子の身体は仮の姿だから長く耐えられないんだっとな。」

「紫さん、これ何時まで持つんですか？」

「そうね、約十分で所かしら。余力を酷使しない様にね」

「分かりましたよ、じゃあ式神を放つか」

俺は懷から出した札を複数放ち呪をかける。

するとただの紙は魚に代わる。主に中型の魚ならジュエルシードを確保して帰って来るから詮索が楽だからな。

「さて、式神を三十体ぐらい放ったから俺らは雑談でもしとくか」

「はい！質問！！」

そう言っただけ俺がベンチに腰掛けるとアルフが手を上げた。どうしたんだこの人……異様に元気になったし気の所為か鼻息が荒いんだが？

「じゃ、じゃあアルフ」

「その姿は変身魔法なのかい！それとも未来とか！」

「どちらかというと未来かな。これは変身魔法というか成長促進魔

法みたいなものかもしれない」

「へえ……（じー）」

「わぁ……（じー）」

「ほぉ……（じー）」

えっ？何このなのは達からの視線！凄く俺をガン見してるけど、そんなにこの現象が珍しかったか……すると少しまずったかもしれないな。

「ふふふ、貴方のハーレム作りに更なる追いうちがかけられたわね。それじゃあ、私は用事があるから帰るわ。次は誰か他の連れも持ってくるからよろしくね」

そついうと紫さんは消えた。多分、この様子だからスキマを使ってもいいと思ったんだろう。

にしてもなのは達から受ける熱い視線が凄く気になる。

ちなみにこの現象は式神がジュエルシードを集めてくるまで続いた。

番外編 幻想と赤い月（前書き）

PV40 / 000アクセス突破！ありがとうございます！

主に番外編は幻想郷の住民が出没します。今回はプレシアとレミリアでもコラボさせてみようかなと思いました。

番外編 幻想と赤い月

時の楽園

次元の狭間を行き来できるように作られている移動庭園。

この楽園はかつてミッドチルダの辺境に存在していたがフェイトの修行が終えるとともに旅だったのである。

これはフェイトが蒼真に再会する前の話だ。

そんな辺境の楽園に一人の少女が苦悶の声を上げていた。

「あぐっ！」

「貴女は大魔導師の娘なのよ、それなのに貴女は回収してきたジュエルシードはたったの四つ。この程度の成果しか上げられなかったから賤^{しづ}をしてあげてるのよ」

黒髪の女性によりフェイトは光の輪『バインド』により宙に拘束されており身体は傷だらけだ。

「ごめんなさい、母さん。次はもっと多く手に入れてくるから」

「ふう、そうね。次は母さんを失望させないでくれる」

虚ろにフェイトは立ちあがりよるとデバイスバルディッシュを手握り歩いて行く。フェイトに興味をなくしたのかプレシア・テスタロッサは自分のデバイスを元に戻し王座へ座りこむ。

その顔には疲労と苦痛に満ちた表情をしており今にも倒れそうだ。

「私にはもう時間が無い。この身体を蝕む病魔に残り少ない命を捧げるぐらいなら私は……アリシアを蘇らせて見せる」

プレシアはそう呟くと重々しく立ち上がり何の変哲もない壁に近づ

く。

そつとその壁に手を置くと、壁がドアの様に開閉した。

中には精密な機械などが敷き詰められており誰かの研究施設とでもいえる。

その中でもカプセルの様な入れ物にプレシアは近づき寄り添うように目を閉じた。

「アリシア……後、もう少しだからね。貴女を私は蘇らせてあげから」

そう切なげにプレシアは呟く。親子の愛情とも言える場面だが彼女の方法は一般からしてみれば著しく異端である。

ロストロギア『ジュエルシード』を使い、約束の地【アルハザード】へと行き愛娘であるアリシアを蘇生しようとしているのだ。

「ふふふ、人間って本当に愚かね。死んだ者を蘇らせようなんて考える時点で無理だと思わないのかしら？」

「っ！？……人の屋敷に土足で入り込んでそれは無いんじゃないのかしら、お譲さん」

プレシアは我に帰り招かれざる客を見据えた。

薄紅色の衣服をまとった幼い少女。彼女の背後には蝙蝠の羽の様なものが生えており小さな少女の身体を浮かせていた。

普段のプレシアなら問答無用に魔法を叩きつけるだろうが今回ばかりは違った。現在は愛する娘の遺体がある大切な部屋である事、そして何より少女とその取り巻きのメイドが異様なほどプレッシャーを放っていたからである。

「咲夜、此処では話も出来ないわね。貴女、少し話を聞いていかない？その娘を蘇らせたいんですよ、もっと手っ取り早い方法があるわ」

「なっ！？アルハザードに行く以外にアリシアを蘇生させる方法な

んて無かったわ！そんなデタラメ信じる訳が――」

「黙れ、人間。私は質問しているのではない話し合いをしに来た……此処では対等に話し合いなど出来そうもないわね」

一瞬にして殺意をあらわにした少女 レミリア「スカーレットはメイド長である十六夜咲夜とともに研究室から出て行った。

「な、何……あの殺気、尋常じゃないわよ。アリシアを手早く蘇生できる方法……本当にそんな物が存在するのかしら」

半信半疑でプレシアは二人が出て行ったドアを見つめていた。

「それでアリシアを蘇生する方法とは一体何なのかしら？」

「あら？結構簡単に食いついたわね。まあ、必然ね。これは私が見た未来のままだもの」

大広間に設置された巨大なテーブルの端に敵対するようにレミリアとブレシアは座っていた。

レミリアの左後ろにはメイド長の咲夜が待機している。無論、何があっても大丈夫なように警戒は怠わらない。

「未来……まるで預言者の様な口ぶりね」

「ええ、私は予言なんて甘っちょろいモノより根本的な運命を操れるの」

「運命を操る？そんな事できる訳が——」

「そんなことできる訳がない……でしょ、だから人間は浅はかなのよ。現実では有り得ない状況を見れば科学的に解決させ様として出

来なければ迷宮入り……根本的な理由から貴方達人間は私たちより劣るのよ」

プレシアの疑問とともにレミリアは会話を切断する。

「そこまでいうのであれば、運命とやらを操ってみせてくれない？出来るんでしょう？」

「ええ、いいわ。このレミリア＝スカーレットに操れない運命などない」

するとレミリアは何かを確認するように宙に目線を向けた。その後すぐに目線をプレシアに戻しこいつた。

「貴女たちと対峙している白魔導師はこれから八つのジュエルシードを手に入れるわ。しかも一気に」

「なっ！？そんな馬鹿な事が！」

レミリアの発言にプレシアは監視モニターを表示する。

するとそこに写っていたのは――

『はあ、ここの所ジュエルシードが発見されない理由が判明した』

気だるそうに少年が白い魔導師に話しかけている。

『はあい、これでしょう？ジュエルシードとかいう魔石』

何処からか現れた妖艶な女性がジュエルシードを八つほど少年に手渡す。

「ほえ……ジュエルシードが一気に九つになったねユーノ君、蒼真君」

と白の魔導師はジュエルシードをデバイスに取り込んだ。

――レミリアの言った事が事実になった。

「……………本当に貴女は運命を操れるの？」

「ええ、勿論……これから本題よ。条件付きで貴女の娘を蘇らせる方法を教えてあげる」

レミリアが薄い微笑を浮かべる。何かを企むようににやりと口元を歪ませた。

「条件……その条件とは何！私で出来る事なら何でもするわ！」

「ふふふ、凄い貪欲さね。それでこそ人間、さて条件を言うわ。私はあの白い魔導師の横にいる黒髪の子がいるでしょ……あれが欲しいのよ」

どんな無理難題な要求をされるのかと思っていたプレシアにとっては軽過ぎて拍子抜けだった。

「あの子を捕まえて渡せば方法を教えてくれるのね」

「ええ、それと前払いに少しだけネタばらしをするわ……あの子は転生者、一度死んで蘇った子なのよ」

その言葉を聞いた瞬間、プレシアの身体に電流の様なものが走った。

ああ、成程……あの子が転生したという事は何らかの方法を知っている。つまり、あの子を捕まえて方法を聞き出せば後はこの謎の少女に引き渡す。それだけでアリシアが蘇るということね。

「分かったわ、お互い契約を結びましょう」

「ええ、手を組みましょう。貴女が彼を捕まえれば愛娘は蘇り私も貴女も幸せ……ふふふ」

会談を終えたレミリアはすっと退席すると従者である咲夜とともに踵を返した。

「良い報告を期待しているわ。不定期にこちらに来る事になるけど
それまで彼を傷つけずに待っててちょうだい」

「ええ、必ず捕まえて見せるわ。その代わり……」

「分かってるわ。では、また会いましょう…咲夜」

「はい、お嬢様」

次の瞬間、レミリアと咲夜はプレシアの眼下から完全消滅した。

「不思議な主従ね。私たちとは違う魔法……興味深いけどそれより
あの子を捕まえる手段を考えないと……そうだわ、あの人形にやら
せましょう」

薄くプレシアは笑うと先ほどより上機嫌に研究施設へと歩いて行っ
た。

そして蒼真の知らない所で陰謀の影が蠢いた。

第十話 幻想と温泉（前書き）

現在、ジュエルシードはプレシアに四つなのはに九つ、蒼真に三つ、フェイトに三つという具合に配当されてます。

なのは

「うーん、この中じゃ私が一番多いね」

蒼真

「そりゃあ、紫さんからもらったからな。てか、お前はどんだけ翠屋の甘露に自信持ってたんだよ」

なのは

「だって、評判だったんだもん！家のシュークリームは美味しいって！」

蒼真

「やれやれ、フェイトもアルフ姉さんもジュエルシード集めが終わったら食ってみたらいいんじゃないか？」

フェイト

「いいの？」

アルフ

「私は甘いモノより肉がいいな」

蒼真

「流石、狼……肉食だ」

なのは

「あはは……フェイトちゃん達なら大歓迎だよ！」

蒼真

「という訳で今回は温泉先の話らしい」

フェイト

「えっ？今の話からどうして温泉に？」

蒼真

「こまけえ事はいんだよ！とりあえず

『魔法少女リリカルなのは×東方project×オリジナル
幻想と転生の使者』」

蒼真・なのは・フェイト・アルフ

「始まります！……！」

第十話 幻想と温泉

ふふふ、俺は現在高町家の車に乗せられております。

何か、温泉に行くらしいので俺も着いて行く事になった。

後ろの席で右になのは左にアリサ……………そして膝にすずかという素晴らしい状態にあります。

そう、両手に花というか全身に桜満開という感じである。

どうやら、すずかはこの間の一件から親密度が著しく向上した為此の頃、すつごく甘えてきます。何というか嬉しいのだけど……………サイドからの圧力に俺の胃腸が耐えられないんだ。

「あの、すずかさん？そろそろ降りてもらえますか？膝と胃腸が限界なんです」

「却下」

凄い笑顔で返された！これ程輝く笑顔は見た事があるのか！いや、ある筈がない（反語）

「お疲れでしたらこれでどうかな？」

むぎゅ

何をされたかというと頭部をすずかにホールドされた。前が見えへんのに再度からの圧力と両腕に何かが抱き着く感触だけはよく分る。

ええ、なのはとアリサだな。二人ともぎゅっと俺の腕を抱いているがなのはの方は少し力を入れすぎぐらいだから良いモノを……アリサは間接技掛けてるだろ……！！

「ちょ、アリサ！痛い！人間の関節はそっちに曲がらないって！」

「五月蠅い！無性に腹が立つのよ！てか、鼻の下伸ばしてないです
ずかに席譲りなさいよ！」

「このホールド状態で顔色なんて分かる訳ないだろうが！この、ア
サリバーニングが！」

「アサリっていうな！しかもバニングスだって何度言えば分かるの
よ！」

そんな口論をしていると右の方から俺の心を凍てつかせるような一
言が

「蒼真君、あっちに着いたたらおはなししよう」

何故だか知らないがとてつもなく俺の心をかき乱す発言だった。

「あらあら、楽しそうね。若いっていいわね」

「そうだな、家のなのはをよろしく頼むぞ蒼真君」

「はいっといいたいところだが恐妻制はあまり好きじゃないんで現在進行形で考え直してます」

「ええっ!？」

驚くのは。そりゃそうだ、俺はハーレム王になるのだから女の尻に敷かれてたまるか。ちなみなのはの父親 高町士郎さんはこないだの一日耐久剣術合戦において認められなのはと仲良くする事のできた。了承を得た。

兄の恭也さんは……………まあ、妹命^{シスコン}全開なのでまだ認めてもらえない。推測だが二刀流の恭也さんを倒さねば交際何処るか手さえ繋がらないだろう。

「ははは、大丈夫さ。なのはは桃子と私の子だから優しいのだよ」

「優しい子は腕を組みながら爪を立てたりしません」

「ばつと手を離すのは……地味に嫌がらせか、それとも嫉妬故の行動なのか気になる所だがまあ可愛げがある分ましか。」

「まあ、基本可愛いですからねなのはわ。確かに優しいんですがたまに甘いとも言えますね」

「おや、手厳しい評価じゃないか」

「性格と内面も見ないといけませんから。俺は昔からそういうタイプですから」

「ふふふ、口ぶりからすると女性関係に鋭いみたいね、蒼真君わ」

「ええまあ、周りに年上から同級、妹風味がたくさんいましたからね……基本美人ばかりだったし紫さんも昔から俺を見守ってくれている家族ですね」

そういえば、他の皆どうしているのか………今更だが心配になって来た。

「ふーん、中々良い御身分ね」

いだだだだっ！！！少女とは思えないぐらいの腕力で俺の肘を百八十度回転させようとするな！

「わ、私だつて負けないなの！」

だから！思いっきり爪を立てるのは良子さん！

「むう、蒼真君の過去に少し興味があるから後で聞かせてね」

ちよ、締まる！首がヤバいつて！後、呼吸がおろそかにされてますよ！

こんな感じの地獄が旅館に着くまで続いた。

「だから、俺は男湯に入るての」

「何でよ、十歳までなら大丈夫って書いてあるじゃない」

「そうなの！すずかちゃんだけずるいの！」

「うふ、私だけ一歩リードだね」

俺は現在、風呂場の前で悪戦苦闘している。何故こうなったかというと少しだけ時を遡る必要がある。

「着いたな、此処が旅館か……俺んちより狭いな」

「えっ、蒼真君一人暮らしなのに旅館に住んでるの！」

隣のなのはが驚いく。神経が繋がっているのかツインテールも跳ね上がる……面白いな。

「ちげえよ、一人暮らしをする前の本家だ。俺んちは昔から大企業とか天皇家を裏から護る家系でな剣闘士の一族って奴だ」

「ふえええ……蒼真君、そんな凄い家系の出身だったの！」

「何よそれ、初耳よ！何で今の今まで隠してたのよ！」

オーバーリアクションのなのはとキレるアリサ。あれか、近頃の子供はカルシウムが多大に不足してるな。ビタミンが不足がちな魔女もいるがどちらかというとカルシウムが足りないよりはましだな。

「ええい、五月蠅いな。別に聞かれなかったから言わなかったただだ」

「っ！……確かに聞かなかったけど、少しは話してくれてもいいじゃない」

「ア、アリサちゃん、落ちついて！蒼真君が凄いのは分かったから抑えて」

すずかに羽交い締めにされるアリサ。やれやれ、怒ると可愛い顔が台無しだな、と言ってやりたいが何となく悔しいので言わない。

「ほう、成程：だからあそこまで強かったのか。一刀流とはいえ恭也をあそこまで追い詰めたのは君が初めてだ」

「褒めても過去話しかでませんぜ」

「出てるなの！」

一タツツコミが可愛いな、なのはわ。アリサが酷くめんどくさくなるので軽く説明する事にした。

「俺の家系はな、昔から秘密裏に天皇家やお偉いさんを護っていたらしい。簡単にいえばボディガードかな。その長男に生まれた俺は早くから剣術の修行を叩きこまれて……『天地開闢流』を習得した訳なんだが……」

そこで一旦説明を止める。

「そ、それでどうなったのよ」

「興味深いな、私と同業者の家系か」

へえ、士郎さんはボディガードをしていたのか。だけど、今は翠屋

のマスターなんだっけ。引退でもしたのか。

「で、続きだが。俺が六歳の頃に少し厄介な事件が起きたんだ。天地開闢流の流派には二つの勢力があつてな、片方が俺が使っている真・天地開闢流なんだ。開祖の剣術を今風にアレンジしたらしい。で、もう一つが開祖の剣術を更に凶悪にした天地開闢流・極なんだ。どちらが本物の流派なのかって事で抗争が起きましてね、両親が前は平和に過ごせって言われて送り出されました」

これが俺の現世の家系だ。転生前の家系はもつと黒い歴史があるから別にどうってことない。てか、どんだけ俺は困難な家系ばかりに生まれてるんだ？あれかな、運命の神に嫌われてるのか？

で、話を聞いていた四人だが……見事に沈黙。土郎さんは難しい顔で何か思考している、すずかは心配しているのか悲しそうな表情をしていた。アリサとなのはだが……あれだな、やつちまつたぜ part 2 みたいな顔してる。

「はわわ、凄い所から来たんだね蒼真君。困った事があつたなら相談に乗るのなの！」

『僕も協力するよ。君も辛い過去があるんだね』

なのはの肩にいるユーノも念話で通信してくる。あつ、何故か俺にはリンカーコアの微弱反応があり初歩的な念話は使えるらしいのでユーノにならった。

「……………」
「ごめん」

「んっ、何で謝るんだアリサ」

凄く沈んでいるアリサ。おう、何時もの突っ掛かって来る元気は何処へ！

「正直、アンタの事誤解してた……優柔不断で何時も適当で馬鹿だと思ってた」

「うわ、さりげなく罵倒されている！なにこれ！新手のいじめ！」

「でも、違った。アンタにはアンタなりの想いがあるんだって分か

「ったから」

「アリサちゃん……」

「おう、どう反応していいのかわからない。てか、何時もの元気は何処に行った！」

「いやいや！ちよいと待って！こんなシリアスなシーンは要らないから、今から楽しい温泉旅行だった筈なのにこれかよ！とりあえず、アリサの元気を取り戻すには……馬鹿やるしかないか。」

「アリサ、分かってくれたのか、俺の事」

「うん、少しだけどね」

「そうか……だったら！俺の嫁に来いや！！！」

「そ、蒼真君！？」

「ええっ！？私を差し置いてそれはないよね、蒼真君」

「ば、馬鹿！こんな所でプロポーズするな！」

ドガ！

アリサの正拳突きが俺の鳩尾にヒット。俺、戦闘不能。士郎さんも苦笑いでこちらを見ている。なのはたちに関しては涙目だ。

「げふ、ふっ…元気出たじゃない」

「あつ、もしかして私を元気づける為にワザと」

「さあね、俺は温泉に速い入りたいだけだし折角の旅行をブルー気分でこなしたくなかったただけだ」

「蒼真君の言うとおりだ。なのはもすずかちゃんもアリサちゃんも折角の旅行だ楽しんでいこうじゃないか」

士郎さん？ナイスアシスト！

「わ、分かったわよ！アンタがどうしてもていうなら一緒に楽しんであげるわ」

「やれやれ、アリサはツンデレだな……てか、桃子さん達待ってる
し行こうか」

「「うん……！」」

で、こうなったという訳だ。

どういう訳かアリサに向かっての嫁発言に對抗したすずかがこない
だ一緒に就寝した事をばらしたために厄介な状態になった。

『ユーノは……言うまでもなく強制連行だな』

『そう思うなら助けてよ!』

だが断る!—といってやりたいが……流石に可愛いそうだ。

「へいへい、分かりやした。入ればいんだろ……俺の根負けだ」

「やったの!」

「絶対になのはやすすかには負けない……ブツブツ」

アリスの奴が何かぶつくさ言っているがこの際どうでもいいか。

『ユーノ、俺も付き合っぜ』

『ありがとう！蒼真』

『へ、俺達友達だろ。当然じゃないか』

『うん！』

こうして一匹のフェレットが俺に対しての好感度を上げた…と、ユーノは男だが動物だしBL展開にはならないだろう…その時の俺はそう確信していた…とある日に現実を知るまでは

浴場内

「うお……思ったより広いな。んっ？てか、桃子さんと美由紀さんはもうすでに入ってるし」

「あら、蒼真君…遂に折れちゃったのね」

軽く笑う桃子さん。この人知ってたな。

「ふーん、蒼真君って見かけによらず身体が引き締まってるのね」

「ええ、まあ色々と鍛えてますから」

面倒なので先ほどの過去話を手短に話す。

「大変だったね、ホームシックになったら言ってね。気軽に義母さんて呼んでいいからね」

「可笑しいな、聴きとりではいい感じに聞こえるのに凄く裏があるように聞こえるんだが」

「確かに蒼真君が義弟になるのもいいかも」

おう、俺が知らない間に話が進む進む。

「蒼真君、先に行くなんて酷いな！」

「あー、はいはい」

なのはがやって来た。その下には微妙に頬を紅潮させたユーノ。あれですね、一応オスだから反応しますか。

「ちょっと、速いわよ。少しは考慮してものがないの？」

「アリサちゃん、お風呂場で大声はやめた方がいいよ」

続いてアリサ、すずかの登場。三人ともタオルで体を巻いている。

「あら、お楽しみはこれからだしお邪魔かしら」

「そうね、母さん。私達が出るから後は頑張つて」

そういつて桃子さんと美由紀さんは風呂場から颯爽と消えて行った。

「は、はは……余計な事を」

そう小さく呟いた。

「とりあえず、身体でも洗うかな」

「ち、ちよつと！蒼真！」

アリサが声を荒げる。心なしか頬が紅潮しており緊張している。

俺の中の危険を察知する何かが警報を鳴らす。

「な、何だ。凄い権幕だな」

「あ、アンタの背中を洗わせなさいよ！」

「なんで命令形！別にいいけどさ」

何だ、勘違いだったか俺の警報もエラーでも出たのかと心配していた所…

「じゃあ、私前を洗うね」

「えー！？そ、それじゃあ私も洗うなの！」

それから先は戦場だった。

第十話 幻想と温泉（後書き）

何やらピンク色の気配を漂わし始めた蒼真一向。

風呂場編もとい温泉編はまだまだ続くよ！

次回【第十一話 幻想と閃光】

蒼真

「絶対見てくれよな！見ないとなのはからディバインバスターだ」

なのは

「えっ！？」

第十一話 幻想と閃光（前書き）

蒼真

「なんだかピンク色な展開になってきたぞ！」

なのは

「大丈夫なの！蒼真君を全身くまなく洗ってあげるの」

すずか

「はい……上手く行けば後々ご褒美が貰えそうかな」

アリサ

「べ、別にアンタが好きだからって訳じゃないんだからね！あ、あれよ！温泉やお風呂に入る時は流しっこていうのがマナーだって聞いたわ」

蒼真

「おい、誰からそんなマナーを聞いた」

アリサ

「なのはよ、でも何から知ったのかしら？」

蒼真

「だそうですが……情報源ブリーズ」

なのは

「ふえ！教えてくれたのは紫さんだよ？」

蒼真

「ば、馬鹿な！全てあの人の陰謀だったのか！何て人だ！いや、人じゃないか……まあこの際よしとする。予め俺達が此処に来る事を予想して余計な知識を与える………やばい、貞操の危機だ」

すずか

「蒼真君、何をぶつぶつ言ってるの？」

アリサ

「独り言は余所でやってよ」

なのは

「まあまあ、アリサちゃん。誰にでも癖みたいな事はあるの」

蒼真

「ふつ、戦場を駆け抜けた俺に敗走の文字は一度もない！」

蒼真・なのは・すずか・アリサ

「魔法少女リリカルなのは×東方project×オリジナル」
【幻想と転生の使者始まりす!!!】

第十一話 幻想と閃光

「待つんだ、落ちつけお前ら。クールになれ、温泉の湯けむりで頭をやられたか！」

「違うもん！私は正常なの！」

「そ、そつよ！わ、わわわ私だって何時も通りよ！」

「そつだね」

ちよつと待つて！アリサに関しては明らかに不自然だろうが！どんだけ噛んでんだよ。それより現在の体制がヤバイ。俺は設置してあった椅子に座っている訳だが背後にアリサ、前方にすずか、なのはと前後を完全にガードされて逃げ出せない。

えっ？左右はつて？H A H A H A、逃げ出そうと思つたら全員に抱き着かれてたわ！あんな密着^{タオル}状態で俺の理性がブレイカーしかねん。まあ、身体が九歳だからそれは無いと思うが。

『ユーノヘルプ！ヘルスミー！！ヘルペスミー！！！！』

『それいうならヘルプミーね。どう考えても君を三人から離脱させるには交渉ぐらいしかないと思うけど僕じゃ無理だし……君の言葉は絶対に聞きそうもないよね三人とも』

おおう、なんてこつたい！既に始まる前から勝敗は決まっていたのか、そういえば某はわわ軍師も戦いは始まる前から終わっている時もあると言っていたな。

「はあ、仕方ない。頼むぜ」

「そ、それでいいのよ！私が自ら洗ってあげるんだから這いつくばって感謝しなさい！」

「へいへい……じゃあ頼むぜ」

アリサは持つて来ていたスポンジで俺の背中を洗ってくれる……そう思っている時期が自分にもありました。

フエイトside

「蒼真が言つてたのは此処の旅館だね。場所は分かってるんだから温泉に入るうよ、フエイト」

「……たまには良いのかな？」

私達は蒼真の母親代わりの紫という人からこの旅館の場所を知らされジュエルシードが眠っているという情報を聞いたので直行してみた。

「何言ってるんだい。何時もあの性悪女の言う事聞いてるんだからたまには息抜きも必要さ」

「うん、分かった。午前中は温泉に入って午後からジュエルシードを探すよ」

「分かったよ。さて、大浴場は……」

『ユーノヘルプ！ヘルスミー！！ヘルペスミー！！！！』

念話で大音量の蒼真の声が聞こえた！一体何が！

「アルフ！今の」

「ああ、蒼真の物だね。念話でことは魔導師に襲われているのかもしれない」

私達は蒼真の悲鳴が聞こえた方角へと急いで駆け着けることにした。

念の為にバルディッシュを待機モードで腕の中に忍び込ませる。

なのはside

「ちょ、待て！待て！何でタオル外すのさ、普通背中とか洗うならスポンジとか使うだろ！」

アリサちゃんとすずかちゃんは突然巻いていたタオルを外し身体を蒼真君に密着させる…………

て、可笑しいよね！？蒼真君が言っている方が正しんだよね！

「アリサちゃん、すずかちゃん。蒼真君が困ってるしスポンジで洗った方がいいよ」

「なのは、紫さんが言うには男って生き物はこうされると喜ぶらしいのよ。べ、別に蒼真の為とかじゃなくてこいつを骨抜きにして私の魅力に気付かせてやるのが目的だけど」

「ふふ、アリサちゃんは素直じゃないね。お姉ちゃんから私も習ったの、殿方はこうされると喜ぶって」

「何してくれてんだ！保護者ーズ！！！」

「ふえ、そうなの？だつたら私も」

恥ずかしいけど蒼真君の為だもんね。大丈夫大丈夫！！！！

「うおっ！？なのはも保護者側の毒牙にかかったというのか！助けてゲッター！！！！」

逃げようとする蒼真君をアリサちゃんとすずかちゃん、私で抑える。無理やりだけど仕方ないよね。身体を洗わないとお風呂に入れないなの！

「ボディーソープです」

「うおっ！肌とぬるぬるが丁度いい塩梅で……はっ！？一瞬、目覚めてはいけない何かに目覚めそうになった！」

「ふん！それより、感謝しなさい！」

ぬるぬる

「ちょ！背中何か当たってますが！ささやかに柔らかい山がががががが」

アリスちゃんが蒼真君の背中を洗い始めた途端、蒼真君が壊れ始めました。

「じゃあ、私も……えい！」

「ふんもつふ！……じゃねえ、前は危険だ！えまじえしいいいいいい！……！」

「私も負けていけないの！」

私も頑張つて空いている場所を直に肌で擦つてみる。蒼真君つて結構筋肉多いの？見た感じじゃ分からなかったけどお兄ちゃんぐらいありそうなの。

「アッーーーーー！！！！」ユーノがががががが、マジでヘルプ！！！！あがががががが、理性が保てる保証がありまへんわわががが！！！！」

ユーノ君に助けを求める蒼真君。ユーノ君はお風呂場の端っこで頭を垂れて何か祈っているの。

『ごめん、蒼真。僕にはにもできない』

ん、この状況で何で逃げようと思うのか分らないの。

その時、乱暴に脱衣所のドアが開く音がしたの。

「大丈夫かい、蒼真！助けに来た——て、あれ？」

「アルフ、どうし——ぼっ（真っ赤）」

フェイトちゃんとアルフさんが登場。アルフさんは呆気にとられていたけどフェイトちゃんは顔から真っ赤に染まっていた。

「し、失礼しまシユタ！」

ボタン

勢いよくフェイトちゃんがドアを閉めて脱衣所に戻っていく。

「ちょっと待てや！！！！今、絶対に誤解して出て行ったる！」

蒼真君が強引に私達を払いの脱衣所に――あれ？これって蒼真君の腰のタオルじゃ？

「きゃあああああああ！……！！！」

ドカーン

蒼真 side

やべえって明らかに可笑しな誤解を深めたままだよ！

あのまま、事態が進行でもして見る。後々、顔合わせづらいだろうが！

勢いよく、脱衣所のドアをオープン。よかった、フェイトは………あれえ？顔を真っ赤にして俺の下半身を見ながらデバイスとやらを構えてるんだが？

「蒼真、下がお留守だよ！」

驚きと呆れ半分で構成された声が飛ぶ。ちらっと視線を下に………
H A H A H A H A、やっちまっただぜ

「やっちやっただぜ」

「きゃあああああああ……！！！！！！」

フェイトのデバイス『バルディッシュ』が黄色の魔砲弾を吐きだしたのはすぐの事だった。

「ふう、落ち着いたか？」

「う、うん……ごめんね」

「別にいいが……大丈夫か？」

あれから一時間ほど経った。アリサとすずかは魔法とフェイト達
いた記憶を削除させて貰った。どちらかを覚えていたら何かが切っ
掛けになって思い出されると厄介だからさ。

現在は旅館の外庭にいる。アリサ達は爆発で気絶中、親方には逆上

せたと言ったらニヤニヤした笑みを向けられた……不快だ。

「蒼真君、身体が丈夫なんだね。フェイトちゃんの魔法を生身で受けて無傷だなんて凄い！」

「確かにそうさね。蒼真、アンタ実は魔導師の資質でもあるんじゃないのかい？」

「あ、そう言えば蒼真から微弱なリンカーコアの気配がするんだけど」

「あつ、それなら僕も気付いてた。最初に出会った時にかすかだけど魔力を感知したから気の所為かと思ってたんだけど」

確かに俺には魔力は無い。が、完全にはない訳じゃない。閻羅の外法を使った事により昔の魔力と霊力をこちらの血に持って来たんだが隠すという技術は俺にはないから封印状態になってるんだなこれが。

「ああ、その事ね。俺の魔力は封印されているんだ。剣闘士をやりながら魔道にも手を出す事は出来なかったからね」

「剣闘士？蒼真って剣士か何かなの？」

フェイトの質問ももつともだ。とりあえず……説明を

キングクリムゾン！

「という訳で封印の理由と同時に俺の家系分かってくれたか？」

「うん、蒼真は苦しい家系で育ったんだね」

「まあな、基本家の事は記憶からないけどね」

ズキン

「ぐっ！これは、式神が一体いや三体やられた！」

俺が放っていた五体の内三体が破壊された。式神と意識などを共通している所為か式が破壊されると痛みが返ってくる。逆にいえばそれで敵がどんな風に攻撃するのか解るがな。

今のはなのはディバインバスターみたな光線で破壊されたな。

「どついう事なの！」

「簡単にいえばジュエルシードの隠し場所に異変が起きた！皆、向かうぞ！」

その一言でなのは、ユーノ、フェイト、アルフの面々は緊張した表情になり立ち上がる。

俺達は式神が破壊された現場へと走り出した。

「おっ、たくさん来たな……てっ、見ないうちにかなり小さくなっ
たな蒼真」

目の前にいたのはエプロンドレスと黒魔女帽子をかぶった少女。フ
ェイトと同じ金髪だが彼女はどこも結んでおらずロング状態だ。

「……………おいおい、厄介なのが来たよ」

「それは酷いぜ。私は酷く傷付いたぜ」

これっぽっちもそう思っていない笑みを俺に向ける少女の手にはジエルシードが握られていた。

「はあ、やれやれだ。それ、返してもらっぜ……霧雨魔理沙！」

第十一話 幻想と閃光（後書き）

お風呂場事件をいったん保留にした蒼真たちはジュエルシードの危険を感知し現場にたどりつく。

そこにいたのは幻想郷の住人、霧雨魔理沙だった。

次回【第十二話 幻想と魔法使い】

蒼真

「次回も見てくださいな！」

魔理沙

「じゃないとマスタースパークだZE」

第十二話 幻想と魔法使い（前書き）

魔理沙

「くくくつ、これは面白そうな事になって来たぜ」

蒼真

「明らかな悪役ぶりですね、分かります」

ユーノ

「蒼真、彼女は一体？」

蒼真

「ああ、ユーノは此処初登場だな。てか、こないだ始めたばかりだからな。あいつは魔理沙……自称普通の魔法使いらしい」

ユーノ

「魔法使い？魔導師じゃなくて」

蒼真

「ああ、魔理沙はリンカーコアとか関係なしに魔法が使えるんだ。正直、媒体があれば大抵使えるらしいがな」

ユーノ

「それって凄い事じゃー！」

蒼真

「俺がもといた所では平然と媒体なしで魔法をかましてくる奴もいたな」

ユーノ

「非常識すぎる……………」

魔理沙

「そうか？普通だと思うが」

蒼真・魔理沙・ユーノ

「『『そういう訳で【魔法少女リリカルなのは×東方project×オリジナル】幻想と転生の使者始まるよ！』』」

紫

「どついつ訳なのか気になるけど突っ込んじゃ駄目よ」

第十二話 幻想と魔法使い

「くくくつ、これを返して欲しかったら私と戦うんだな」

「あれ？お前、そんなキャラだっけ？」

箒に跨り宙に浮いている魔理沙は薄気味悪い笑みを浮かべこちらを吟味していた。何故か凄く違和感を感じる喋り方だな。

「蒼真君、あの子は何者なの？」

「ああ、あいつは霧雨魔理沙……普「闇の帝王だぜ！」……おう」

なのは達に説明を促そうとすると魔理沙が台詞を遮ってとんでもない事を口走った。闇の帝王？何その厨二病患者が夢に出そうな歯の浮くようなポジション。

「いや……どうよそれ」

不満と呆れを同時に吐きだすと俺は魔理沙に視線を向ける。魔理沙と目がある。

「私は闇の帝王だぜ！」

めっちゃウインクされた。つまり、話を会わせろという事だろう、仕方がないな。

「えーこほん、彼女は闇の支配者だ。主に集束魔法を溜め短縮で放ってくるぞ」

「ふえ、私と同じ遠距離放題タイプなの！」

「大丈夫、遠距離ならフェイトとあたしで叩けば簡単さ」

「うん、行こう…バルディッシュ、起きて」

『yes, sir・cythe form Setup』

あつ、フェイトがバリアジャケットを装着してバルディッシュを構えた。

「レイジングハート、お願い」

『stand by ready・set up』

なのはも負けじとセットアップした。何時見ても聖祥の制服に類似した感じがするバリアジャケットだな。

「おっと、お前らと遊びに来たんじゃないぜ。蒼真、お前と弾幕ごっこを申し込む！ちなみに拒否するとこの魔石が実験材料になるぜ」

彼女なりのあくどい意味を浮かべる。

「おいおい、俺はあっちからスペルカードを持ってきてないぞ」

「それを考慮してこれを持って来てやったんだ。ほい、お前のスペルだ」

「お、おっと！……マジで三枚とも俺のじゃないか」

「蒼真、一体それは何？魔力をかすかに感じるけど」

「カードみたいだね、それで何ができるの？」

興味津津な皆さま。説明も面倒なので弾幕ごっこで魔理沙に勝つか……出来るか？俺は現状で言えば子供だけに俺が不利だ。だが、紫さんがこの前やった成長速度を上げるあれをやってみるか、魔力や霊力は血中だからな……嗚呼、ダルイ。

「これは俺がいた地元（あながち嘘じゃない）で使える魔法戦に使用するカードだ。これに自分の必殺技を登録して魔法を使うんだ」

「えっ！そんな小さなカードで！」

「成程、それがデバイスの待機状態」

「いや、フェイト…俺のいた地元じゃデバイスという存在はない。強いて言うなら技の媒体だ」

「デバイスなしで魔法を使うなんて出来るのかい？ユーノ」

「使い魔なら使えるけど……うーん、難しくはないけど微妙な所かな」

やっぱり面倒だ。 実戦で分かせてやった方が速いよな。

「くっ……いてて」

親指を犬歯で引きちぎる。そこから俺の血液が流れ出す、それを懷に常備していた白紙の札に式を形成して行く。

「さて、これで成長できるはず…… 急急如律令」

ドカーン

ぎゃああああ、痛い！非常に痛かった！毎度成長するにはこの痛みを受けないといけないと思うと冷や汗が出るぜ。

「わっ！成長蒼真だ！………何時見てもカッコいい（ボソッ）」

「はわっ！？凄いの」

「おや、男前じゃないか」

言いたい放題の女性陣。まあ、悪い事は言われてないのでよし！

「まっ、そんな訳だ！この身体には制限時間があるからな、十分以内にお前を倒す！」

「よし！私は【恋符 マスタースパーク】【星符 メテオニックシヤワー】【魔砲 ファイナルスパーク】を使用するぜ」

高々に三枚のスペルカードを掲げる。なるほど、三枚の耐久戦か、なら俺も。

「なら、俺は【陰符 陰陽呪縛】【陽符 式神召喚】【陰陽 十二神融合】を選ぶ……てか、これしかないな」

ふわりと俺の身体が宙に浮く。勿論、霊力を使って浮遊しているだけだな。

「なのは、フェイト……任せろ、こいつを倒してジュエルシードは返してもらっからな」

「う、うん……期待してるよ」

「にははは、凄く頼りになるね蒼真君」

期待されまくりでプレッシャーが増した気がするが魔理沙には負ける訳にはいかない！どうせ、アイツが使うのは砲撃と分散する星だろつな、残念賞見切っているんだよ。

「よし、勝負だ！」

「おう！ふふ、リターンマッチと行こうじゃないか！私から行くぜ！【星符 メテオニックシャワー】」

スペルを宣言すると同時に魔理沙の手にある八角形の八卦炉から多数の星型弾幕が放出される。

「ふんっ！それは前回の弾幕ごっこ見切った！」

星と星の間を優雅に回避する。中々の密度だがグレイズするなどで軽々避けれる！見える、見えるぞおおおお！！！！

「なっ！？確か、前も少して見切られたか……じゃあ、これならどうだ！【恋符 マスター】だが、俺のターンだ！」何ッ！！！」

第二宣言をしようとしていた魔理沙を止めて俺はスペルカードを取りだした。

「行け！俺のスペル！【陽符 式神召喚】」

陰陽玉が多数現れ魔理沙を襲う、それと同時に鳥に似た弾幕が左右から攻めて行く。

「ぐっ、これは前回で見切っ……おっとと！」

「俺と同じセリフを無理にやらなくてもいいんだぜ」

呆れ気味に俺は魔理沙に言うが避けるのに集中して全然聞こえてないようだ。さて、下の奴らの様子でもチラミしとか。結構暇なのでちりりとなのは達の方をしてみる。

「わあ、綺麗だねフェイトちゃん」

「うん、星とか鳥とか凄い」

「あれも魔法かい？よく分らないけど綺麗なものだね」

「あんな魔法見た事ない……前例もないし、この二人は一体何者なんだろう？」

まあ、各自感想を口に出している。ユーノに関しては詮索を始めているな、ちよつと不味いな。転生者だとばれる訳にはいかないぜ。今はこいつらに話す時じゃない、いずれ話す時が来るだろうがそれまで不問だ！

「始まったばかりだが……時間が惜しい。魔理沙、お前の最強を打つてみる！俺も最強で打ち返す！」

「おっ！いいね、じゃあ遠慮なく行くぜ！【魔砲 ファイナルスパーク】」

「し、集束魔法をあんなに高速で打ち出すなんて！蒼真危ない！」

八卦炉から極太のレーザーが発射される！ユーノが叫ぶが俺も最強技があるんでね。しかしすげえな、あれが魔理沙の全力か。なら、俺もその実力に答えてやらなきゃいけないよな！

「ラストスペル【陰陽符 十二神融合】」

俺の周りに干支に係する十二支が出現。全員が同時にレーザー状の弾幕を発射する。それが中央で集まりファイナルスパークに引けを取らない大きさとなった。

「くっ、このままじゃ地形が変わる！間に合え！広域結界」

ユーノが魔法陣を展開し周りが通常の景色と一変する。確かこれは此処を別次元にするような魔法だったな。ならば、全力全開でいいよな！

「うおおおおお！！！！全てを穿て！最強の十二神！！！！」

「私だって負けないぜ！フルパワーだ！！！！」

ぶつかり合う閃光。俺達は互いの霊力、魔力を全て攻撃に回し叫ぶ。

そして――戦いは終結した。

第十二話 幻想と魔法使い（後書き）

今回はスペルカード戦を行ってみました。

蒼真

「まだまだ、駄文だから戦闘シーンがまだまだだな」

なのは

「にやははは……」

蒼真

「まあ、次回も見てくれ！」

なのは・魔理沙

「じゃないと（ディバインバスターだよ）（マスタースパークだぜ）」

次回【十三話 幻想とラストジュエル】

第十三話 幻想とラストジュエル（前書き）

蒼真

「みなさん、聞いてください」

なのは

「どうしたの、蒼真君。改まったりして」

フェイト

「蒼真にしては珍しい」

ボン（爆発音）

蒼真

「ほう、フェイト……後でお仕置きを兼ねた調教が必要かな（大人モード）」

フェイト

「はう！？」

なのは

「そ、それよりどうしたの！」

蒼真

「ああ、そうだな。簡単にいうとこの小説にある小説の主人公がやつてくるみたいだ」

なのは

「という事はコラボしちゃうんだね！」

フェイト

「確かに珍しい事が起こった……」

蒼真

「詳細は下の後付けで話すがとりあえず誰が来るかは紹介する。カモーン紫さん！」

紫

「はい、では紹介するわ。作者【ギギネブラ・スカーレット】さんの『東方現文録』から主人公の天文^{てんじょうまこと} 惇が出現しますわ」

蒼真

「はい、ギギネブラ・スカーレットさんにはコラボ企画として飴玉一個を贈呈」

フェイト

「少ないよ！？初めてのコラボなんだから、もっと盛大な贈り物を送ろうよ……！」

蒼真

「そうか……仕方がない、代わりになのはを送ろう！この小説の主人公は俺だから大丈夫だ……！」

なのは

「うええ!!!!大丈夫じゃないよ!」

ブルルルル（携帯着信音）

蒼真

「もしもし、えっ……ああ、分かった。なのは駄目だった、好みじゃないしペドフェリアでもロリコンでもないから要らないってさ」

なのは

「あれ？何でだろう、ふられた訳でもないのに涙が…」

フェイト

「だ、大丈夫？」

蒼真

「涙を流し人は更に強くなっていくものだ……これも宿命の星に生まれた者の使命よ!」

紫

「軽く自分の暴動を正当化させたわね。まあいいわ、そろそろ始めましょう」

蒼真・なのは・フェイト・紫

「魔法少女リリカルなのは×東方project×オリジナル」幻想と転生の使者始まります!!!!

第十三話 幻想とラストジュエル

「いやー、お邪魔するぜ」

「はあ、どうしてこうなった」

魔理沙との弾幕ごっこから三日目、俺は温泉で有意義に過ごした後
に旅行を終え返って来たんだが……………何故か家に魔理沙が住む事
になってしまった。

事の発端はユーノ君にあります。

そして時は遡る！

「ぐっ、ぜえぜえ……………流石にやるな魔理沙」

「やってやったぜ、て言いたいところだけどこっちもクタクタなんだぜ」

渦巻く奔流が消えた後、俺達は全力を出し切った所為かぶっ倒れた。俺は子供モードに戻り魔理沙は筭から落下して木の上に引っ掛かっている。

「蒼真！大丈夫かい、どこか怪我は……………してないみたいだね」

「よかったの……………でも無理は禁物だよ」

「そつだよ、無理はしちゃダメ」

「広域結界を張るこっちの身にもなつてよ」

「わりい、ちよいと疲れた。誰か肩を貸してくれ……そこで何故三人とも敵対し合うんだよ！」

俺が肩を貸してくれといった瞬間、なのは・フェイト・アルフの間に火花が散った気がする。どうでもいいが俺は靈力を強引に表に出した結果……身体が動かん、そう指すら動かせない状況にある。

「アルフは背丈的に無理だな。なのはとフェイトが左右から支えてくれ」

「うん！分かったの！」

「分かった、大事に扱うね」

「くつ、この時ばかりは自分の大きさを呪うよ」

おい、アルフ。今のは全国の身長が著しく伸びない少年少女に対して喧嘩を売る発言だぞ！それとフェイトお前は俺を何だと思っている、骨董品や割れやすいモノじゃないぞ！確かに心はガラスハートだがな。

「私を忘れてないか……これでもへとへとなんだが誰か助けてくれ」

「あつ、忘れてた。アルフ、魔理沙を頼む。さっきの紹介と戦闘は彼女流の挨拶だから気にするな」

「そうだったのかい、そういえば妙に仲良さげだったね」

アルフは魔理沙と箒を抱えて俺達の後ろをついてくる。それと同時に俺のサイドから気のせいであってほしい程の重圧プレッシャーがかかった。最近、こんな事が良くあります、もしかしてハーレムを築くって結構大変なのかなと思いなおす、俺。

「ふふふ、蒼真君と魔理沙さんには後でおはなしが必要だね」

「そうだね、私も参戦するよ」

「OK、肉体言語だけは勘弁してください」

夕刻

「で、フェイト達はどつするって?」

「それがジュエルシードを渡したら帰るっていうからお見送りをしようとしたけど間に合わなかったの」

「そうか、仕方ないな。ユーノ、別に一つぐらい大丈夫だよな」

「うーん、確かにこっちの方が有利だけど……ジュエルシードは危険なんだ」

魔理沙が持っていたジュエルシードを誰が貰うかという話し合いの末、勝ち取ったのはフェイト組だった。ルールは守ると誓ったのでそれを潔く渡すと彼女達は帰っていったらしい。

肉体言語

「あつ！こんな所にいた！蒼真、アンター一体この時間まで何処にいたのよ！」

「なのはちゃんもいるね」

向こうの方からアリサとすずかが走って来る。こちら、廊下は走るモノじゃありません。でも中々浴衣姿もいいな。ちなみになのはと俺は汗だくになったので温泉にもう一度入る事になった。

「いやー、なのはがもう一度風呂に入りたいって聞かなかったからつい長湯しちゃったぜ」

「えっ！？」

「なのはさん、話を合わせてください。どう考えても戦闘してましたじゃばれるだろ」

「そ、そうだね。なんだか全てを押しつけられている気がするけど気の所為だよな」

うん、気の所為だ。決して面倒だからなのはを出汁に逃げ出そうと
か思っていないから。

「へえー、なのは抜け駆け？」

「ちょっとあつちの子供部屋でお話しましょう」

「えっ！？そ、蒼真君！」

「アイルビーバック！幸運を祈る」

俺はその場から光の速さで逃げました。忘れがちだが魔理沙は大人
軍に俺の友人で行き倒れていたって事にした。すると快く高町家の
皆さまは魔理沙を介抱してくれた。

うん、良い人たちで助かるわ。

そんなこんなで俺は今夜を迎えた。

魔理沙は現在、俺達の部屋で睡眠中……余程魔力を使っただからか揺すつても起きなかった。

「で、何故か俺もお前らと同室で寝るのか。まあ予想は立ってたがな」

「当り前でしょ、三部屋しか予約してないんだから。それとこの人だれよ」

「霧雨魔理沙、年齢不明……あれだな、調合が好きなちょいと危ない人、俺と同じ所出身者」

「プロフィールなんて聞いてないわ！何で此処にいるかよ！」

アリスがツンツン状態でドシドシ質問をしてくる。全く、これだからツンデレは好きなんだあああ！！！！おっと、本音が出たぜ。

「簡単だ。俺を追ってきて路銀が尽き行き倒れ」

「行動力がある人なんですね」

「でも計画性はなそう」

「にやはは」

うん、まあ確かに計画性はなそうだ。でも、かなりの努力はしたんだろうな。紫さん関連だと思っけど俺を探すのに一苦労しただろう。紫さんの事だから絶対俺と同じ所には落とさないな。

これは長年の勘だが八割がた当たるんだよな。

「さて、寝るか……………て、おいどうして就寝の話になった瞬間お前らの仲が険悪になるんだ。火花散らすな引火するぞ」

「「「蒼真（君）の隣は譲らない！！！！」」」

こうして女の戦いが始まった。

「ふん！運動神経の悪いなのはには負けない！」

「むっ、だけどこの勝負は負けられないの！」

「二人ともあんまり変な所に飛ばさないでね。でも、全力で相手をするよ」

枕投げ……それは修学旅行でよくある現象。興奮して眠れない身体

を疲れさせるにはかなり定評のあるバトルだ。で、これに女の嫉妬と独占欲を加えると……戦争に代わるんだ、皆知ってたか？

さつきから全力投球で三人が投げあう。稀に流れ弾がとんでくるがそんなものに当たる俺じゃないので弾くとユーノに激突。会えなくフェレットが一匹この世から去った。

『死んでないよ！まだ生きてるから！』

亡霊からのメッセージを受信するほど俺はロースペックじゃないから、何にも聞こえない。

「てかさ、お前らそんなに騒ぐより俺の布団で寝ないか？その方が争う必要くない？」

ピタ

全員の動きが止まった。凄いシンクロ率だ……流石一年からの親友たちだ。

「だ、駄目よ！それなら一人あぶれるじゃない！」

「そつだよ！だから……」

「いや、俺はそれも予測して話をしている。故に左右以外に寝る奴は俺の上だ」

左右がないなら俺の上で寝てくれればいい。抱き着くなり抱き枕にするなり活用法は多大だ。

だが、この発言により更に枕投げ戦争が悪化したのは誤算だった。

それから就寝時間まで頑張った拳句……アリサが俺の上を確保。右にずずか、左になのはというハーレム王万歳！なムフフな状況になったとさ。

いやーアリサの寝顔が可愛かった。後、浴衣が解けたりとアクションがありずずかのやわ肌やなのはの下着が見えたりとキャフフな展開もありました。

結局、俺達はその後何事もなく旅館から出発し家へと帰還したのである。その際に魔理沙は旅館で別れたんだが――

ユーノが俺の家を何故か知っていて教えたらしく現在に至った訳だ。

「はあ、それで何か用か？住むのは良いが他にも何かあるんだろ」

「ああ、勿論だ。私が来る時は大概用事があるぞ。あの魔石の最後の一個が見つかったぜ」

「何！本当か、一体どこに」

「海鳴臨界公園の木々の中に混じってるのを見たぜ」

「みたなら取って来いよ！」

魔理沙はどうやらこの格好で街を搜索したらしい。へたすりや警察沙汰だろ。

「まあ、いいじゃないか。場所は覚えてるんだ。今すぐ行こうぜ！」

「仕方ない、なのはに連絡を取り次第行く。フェイトは……家知らねえ」

まあ、ジュエルシードが発動すれば来るか。

俺はなのはに連絡後、海鳴臨界公園に急いだ。

「急いだつもりだったんだがな。どうやら木にジュエルシードが入ってるな。てか、バリア張ってるし」

気付けば広域結界がスタンバイされておりフェイトやアルフも参上

していた。ユーノが張った結界を察知して来てくれたらしい。

「どうみても人面樹ですね、分かります」

「駄目だ、りんごがついてないんだぜ」

魔理沙、このネタが分かるとは……貴様やれるな！

「キシヤアアアア（奇声というか叫び？）」

「なんだか強そうだよ。シールドも張ってあるみたいだしフェイトちゃん、一緒に倒そう！」

「うん、分かった。一斉に攻撃だね」

「ふたりでせーの、で一気に封印！」

なのは達は持ち前のデバイスであるレイジングハートとバルディッシュを構え木の化け物と対峙する。

「デイベインバスター、フルパワー……いけるね？」

『All right, my master.』

「アークセイバー……いくよ、バルディッシュ」

『Arc saber.』

あれね？もしかして俺は蚊帳の外？戸惑っている内になのは達が動き出した。

「いくよ、レイジングハート！」

二人はとっさのコンビネーションで同時攻撃を開始した。

「貫け轟雷！」

「撃ち抜いて——ディバイン！」

『Buster!』

『Thunder smasher!』

同時に解放される二つの魔力、桜色の光線と黄色い閃光二つが重なりあい……

「キシヤアアア」

木の化け物を貫いた！バリアを貫通とかどんな威力だ……二人とも高位の魔導師だ。これぐらいの魔力はあつて当然なのか……それに比べて俺はデバイスもなければ魔法も使えない。多少の陰陽術ぐらいしか使用できない。これからの戦い足を引つ張りそうだな。

これは非常に不味い。

そんなこと思っている間にジュエルシードの封印が終了した。

これですべてのジュエルシードが封印された事になる。

しかし、これからどうやってまとめるかが問題だ。そして俺達は次なる問題に突き当たる事になった。

もっと……

もっと力が欲しい。

第十三話 幻想とラストジュエル（後書き）

お詫びと投稿者さまに返事

蒼真

「えー、この度は背景が黒いのが目が悪影響があるのを投稿者【蒼^{アオ}】様から指摘がありましたので目に良いと迷信か世迷言であるグリーンに変えてみました」

なのは

「にははは、確かに背景とか黒い色にしてたけどどうして？」

蒼真

「それは簡単さ！作者が厨二病第一級患者だからさ！邪気眼とか解放したんじゃないか？」

上海

「おい、コラ！勝手に人を公園でかめは○破を打つ痛い人みたいにいるな！」

蒼真

「おつ、来たな。駄目で残念な作者、略して駄作」

上海

「ぐぼっ！き、貴様、創作キャラの分際で私を愚弄するか！」

なのは

「それより、上で話してたコラボについて説明が欲しいの！」

上海

「おう、とりあえずはこちらがこちらの小説の主人公を番外編として出沒させる形だ。初コラボだが緊張するな、キャラクターを観察してから自キャラと接触させないと大変な事になるぜ」

蒼真

「そういえば、お前モ〇ゲーで幻想入り書いててコラボしすぎて大変な事になったよな」

上海

「ぐはっ！的確に心臓をえぐるその一撃ゲイボルグか！」

蒼真

「いや、ランサーじゃねえよ！」

上海

「それは兎も角、これを機にコラボを募集します！逆に家の蒼真を使いたいという方はコラボの方と同様に一言やレビューに書いてね！」

蒼真

「シヨイコラ！じゃなかった、おい、コラ！俺は承諾した覚えは……」

上海

「なのは…GO!」

なのは

「蒼真君……頑張ってね」

蒼真

「うつ……上目づかいとは卑怯なり!くそっ、やりやいんでしょうが!」

上海

「という訳で気軽に相談してね!コメントも待ってるよ!」

蒼真・なのは

「「よろしく願います!」!」

コラボ編 幻想ともずく（前書き）

蒼真

「お待たせしました。コラボのお時間です」

惇

「ちょっと待って！題名から凄く嫌がらせ感があるんだけど！あつ、申し遅れました天文^{てんじょう} 惇^{まこと}です」

天文惇はもずくが嫌い。【ギギネブラ・スカーレット】さんの『東方現文録』参照

なのは

「もずく……？」

蒼真

「なのは知らないのか、もずくはもじやもじやのアフロだ」

なのは

「そうなの！？」

惇

「あつてる気がするけど果てしなく違う何かだね」

蒼真

「まあいいだろう、何にせよ初コラボだ。成功させなければなら
ない」

惇

「了解、近代ネタを連発するから気をつけてね」

蒼真・惇・なのは

「「「幻想と転生の使者×東方現文録コラボ始まるよ!」「」」

コラボ編 幻想ともずく

とある休日

なのはやアリサ、すずかは習い事や家の手伝いがあるので遊べない。つまり、暇なのだ。魔理沙は起きたらいなかった。何処かに材料でも探しに行ったのか……山にキノコ狩りか？

という以上の理由で俺は今、暇している訳だ。

「楽しい事探しに行くか、とか言っている内に海鳴臨界公園だな」

静かな公園だ。夕陽も美しかったが昼前の静かな公園もまた一興なのだろうか。やはり、暇なので俺はその辺りをぶらぶら散歩し出した。

「あれ？此処何処だ、公園ぽいけど……人がいないな」

何か女顔の少年といっても学生らしく制服を着用していた。少年って言っても高校かその辺りだろう。俺は現在九歳の身体だからな、精神年齢なら三十路間近だな。

「良い歳こいて迷子か、見た感じだと学生と分かるが」

「おっ、人がいた。て、随分小さい少年だね」

「小さくて悪かったな。これでも二十六だ」

実年齢を言ってみたが信じないだろうな。逆に信じたら間抜けか天然だしな。

「えっ、俺より十ぐらい年上！ば、馬鹿な」

信じたよ、おい。まあいいか、それよりこの男……微かな靈力を感じるな。

「貴様は何者だ！」

「俺は決闘者D A」
デュエリスト

まさかのデュエリスト発言！しかも、いつの間にか左腕に決闘盤デュエルディスクが装着されてるし！

「さあ、デュエルだ！」

「仕方ない、受けて立つ……！」

俺の腕にもいつの間にかあったそれを見てため息をついたがお構いなしにデュエルが開始された。

ここから先は主人公のキャラとルールが完全に崩壊するので嫌な方は飛ばしてください。ちなみにモンスター効果は某相棒VS動画から引用

お互いライフ8000

謎の少年のターン

「行くぜ！先行！」

カードを一枚ドロする。

「だが断る！」

しかし、某露伴先生の名言発動により俺のターン……！

「な、なんだと！」

「ドロー！手札から融合！ブルーアイズアルテムットドラゴン！更に融合解除！二体リリース！セイバアアア……！召喚！」

某ペンドラゴンを召喚

ATK2500 DEF1500

某青い目の龍

ATK3000 DEF2500

「サーヴァンド・セイバー、召喚に応じて参上した」

「ちょ、それチート……！」

「更にドロー……！何が何でもドローオオオ……！！！」

五枚ぐらい引いた。 あっ？ 正規ルール？ そんなものいらぬ！ 我を縛るものなど存在せぬわ！！！！

「手札抹殺！！！！手札を破棄して四枚ドロ、魔法使用でセイバアア攻撃力アップ！」

セイバー ATK 3000

「更に魔法メテオ！直接1000ダメージ！セイバー攻撃アップ！
×四」

「酷くない！某チートバトルより酷い！！！！」

謎の少年

8000 ↓ 4000

某ペンドラゴン

ATK 5000

「正々堂々？くそつくれえじゃあああセイバー攻撃いい！！！！」

「ばあああああつあああ！！！！」

謎の少年

4000
↓ - 1000

「あれ？何か白昼夢でも見た様な」

「奇遇だね。俺も君にもっこにやられた気がする」

もっこもこて何さ。それよりもこいつの霊力について聞きたいな。
此処はカマかけてみるか。

「俺は縁授蒼真……能力は陰陽術を使える程度の能力」

「あ、どうも。俺は天文惇、能力は金属を操る程度の能力だよ」

やはり能力者か。て、事は幻想郷を出てきたのか。それとも紫さんの何時神隠しの遊びか？

「それより聞きたい事が……」

俺の台詞を奪う様に広域結界が張られた。確かこれはユーノが使う結界だったな。てことはなのはやフェイトが出てくる可能性も捨てきれんな。とりあえずは、俺も様子見だ。

「景色が一変した。なにこれ、俺は現在進行形で日常を破壊されているのか」

「それは奇遇だな。俺も現在進行形で破壊されてるし休日を邪魔されてる」

ま、基本暇だからいいがな。此処にいても何も変わらないので俺は惇少年をつれて結界の中心に近づく事にした。

「わお、ファンタステック」

「ま、まさか此処で黒い悪魔に出会う事になるなんて」

常識の範疇を超えた出来ごとに俺の脳処理が停止した。目の前には海藻類で人間の髪の毛に類似しているもずくが蠢いていた。その大

きさ全長五メートル、巨大なもずくの塊は気持ち悪いぐらいに這いまわっている。

「全部狩って売却とはいかなそうだ」

「近づきたくないし触りたくもない。こんな時には全て灰に変えてやればいいんだと思う」

惇の一言によりもずくVS人間の全面戦争が始まった。

「火は金を溶かす業火、燃えろ！火剋金」

前方に魔法陣を展開させる、布陣から強力な炎が爆ぜる。しかし、もずくは水を吸っているのか火が表面上を焦がすが内面までは届かない模様。

「…………あれ？操るにも金属ないね…………俺、足引っ張ってますよね？」

「確かに…………今回は特別サービスだ。土は金を生じず、産まれよ！土生金」

ズズズズ

惇の足もとに多数の金属柱が出現する。主に鉄、銀、金といった代表的な物が多い。土の成分を使って金を生じさせる五行の技の一つだ。

「これなら、やれる！悪魔を断ち切る断罪の剣！パニッシャーあああ……………」

叫びを上げた惇が二メートル弱ある大剣を両手で振ろうとしている。あれが放てればもずくは分解して燃えやすくなるだろう。ただ、問題点は持ち上げれるならだ。

「お、重い！だが、俺のもずくに対しての好き嫌いは人間を超越するんだ！」

ブン

おお！底力が発動したのか重くて動かない筈の大剣は惇によって持ちあげられる。遅くてスローモーションと言えるほどの速度だがほぼ同じような動きをするもずくには案外簡単に当たった。

「もずく狩りじゃあああああ！！！！」

「もずく切りじゃあああああ！！！！」

惇が攻撃、今度は両手に片手剣を持った双剣スタイルだ。憎むべき敵と戦う様に半分に割れた巨大もずくを更に細かく切り裂いて行く。俺も負けじと火瀑符を放つ。

「あつ、蒼真君！と、誰だろ？」

「分からないけど民間協力者かな？」

「どうしてもいけど速くあのもじやもじやを倒してお弁当にしよう！」

天を見上げるとそこには知り合いが三人。
なのは、フェイト、アルフだ。

どうやら、こちらの動きに気付いて来たんだろ。あん？惇が顔面蒼白でなのは達を見ている、いや……よく見ればなのはを凝視している。

「どうした、惚れたか？だが、やらんぞ」

「あ、あれは魔王様……だと！？」

……なのは、お前何時の間に魔王という地位に着いたんだ？

俺が知らない所でなのはが変わっていく、これが父親が娘がどんどん変質していくのを見ている時の心境なのか？

「ほえ？」

「アンタ、何時の間に魔王に昇格したんだい？」

「ふええ！！！！ち、違うよ！私、魔王なんかじゃないよ！」

「こ、殺される！俺達は魔王に殺される！」
オーバーキル

尋常じゃない脅え方だ。一体何が……もしや、なのはの魔王砲ディバインバスターか？

確かにあれを喰らったら正直、トラウマものだもんな。破壊力高すぎるっての。

「デストロイされる……」

「しないよ！私、魔王じゃないし！」

なのはが下まで降りてきて惇を説得中、俺はとりあえずその様を温かい目で見守る事にした。

「もずく……スープにでもするか？」

「これ、食べられるの？」

「なんかまずそうだね」

ミネラルは豊富だと思うよ？お肌が健康になるのは確かだって誰かが宣伝していた気がするんだ。

「うげっ、また殖えとる！くそっ、皆……広域魔法で止めを刺す！だから魔導師達は全力全開を用意しておいてくれ……俺達はもずくの移動を遮る！」

「ぐえ！……首しまってる、首しまってますよ！」

「分かった！私達は砲撃を用意するから蒼真君よろしくね」

惇をもずくの前に連れて行き、俺はあるだけの札を取りだした。

「惇、こいつらの動きを金属でとめれないか？」

「……はっ！出来る、俺が知っている技の中で広範囲に攻撃しながら動きを抑えるモノがあるんだ」

「なら、それをやろう!」

喜々となつて喜ぶ惇。一体どんな技を使うのか楽しみだ。

「それには蒼真の手助けが居る。俺が技の名前を叫んだら金属をありっただけ作ってくれ」

「了解、じゃあ用意する」

「では……始めぜ!!!」

惇はモズクたちの前に立った。

I am the bone of my sword .
(身体は剣でできている)

Steel is my body , and fire is

my blood .

(血潮は鉄で心は硝子)

I have created over a thousand
blades .

(幾たびの戦場を越えて不敗)

Unknown to Death .

(ただの一度も敗走はなく)

Not known to Life .

(ただの一度も理解されない)

Have withstood pain to create
many weapons .

(彼の者は常に独り 剣の丘で勝利に酔う)

Yet , those hands will never ho
ld anything .

(故に、生涯に意味はなく)

So as I pray , unlimited blade
works .

(その体はきつと剣で出来ていた)

「アンリミテッドブレイドワークス
無限の剣製!!--!」

「いまだ！土は金を生じす、産まれよ！土生金！」

ズガガガガガガガガガ

生産された金属が剣の形を象って行く。それと同時にもずくたちが悲惨な事になって行く。

生成された金属の数だけ剣がまるで墓標のように地面に突き刺さり容赦なくもずくを大破させる。このくらいボロボロになったら後は後ろの魔道師達^{なのは達}がどうにかしてくれるだろう。

「出来た！デイベインバスターの発射形態バリエーション！全力全開スターライトブレイカー！！！」

『St ar l i g h t B r e a k e r』

「撃ち抜け、轟雷！サンダースマッシャー！！！」

『Thunder smasher！』

なのはとフェイトの砲撃がもずくを所謂消し済みに変えて行く。さ
らば、もずく………また会う日まで………出来れば一生会いたくな
いがな。

てか、桜色の砲撃は強すぎやしませんか？フェイトを圧倒するほど
の威力があるけどさ。

「で、デストロイギガレイズ何て強いんだ、超魔王砲だ……オーバー
キルだ」

横で惇が贅辞の言葉と恐怖の表情を浮かべなのはが放ったスターライ
イトブレイカーとやらを見ていた。まあ、なんだ？確かに魔王級の
攻撃じゃねえか！

こうしてなのはの超魔王砲によりもずくは海の藻屑と消えた。で、
もずく嫌いの惇はというと……

「だから、私は魔王じゃないって！」

「すみません、本当にごめんなさい。だから殺さないでください」

なのはのトラウマ砲を見て平謝りしていた。プライドなにそれ、食
えんの？みたいな感じだ。俺も土下座ぐらいしておこうかな。

とりあえず、今回の件で分かった事はなのはを怒らせたら魔王砲が

飛んでくるという事だ。

「あの人、最終的には何処から来たのかな？ やっぱり、次元漂流者？」

「まあ、似た様なものだろ」

フェイトは次元漂流者、簡単にいえば迷子を届ける為には時空管理局と呼ばれる団体が返してくれるというがどうやらフェイト達は会いたくない様だ。

ま、別にそれでもいいや。どうせ、そろそろ……

「あら？ 迷子ね、おひとり様元の世界へ」案内」

「ちくせう！ 面倒事は勘弁してくれ（キリッ）」

軽快な口調とともに惇がスキマに落ちて行っ

た。
これで一件落着。

「ほいじゃ帰るか魔王様」

「もう！魔王じゃないってば！！！！蒼真君のバカアアア！！！！」

「ちょ、ブレイカーはヤバいって……守護符、ぎゃあああああ！！！！！！」

「見落着だといいな……」

コラボ編 幻想ともずく（後書き）

基本、コラボ編はストーリーに全くというほどに影響を及ぼしません。

故にSSとかそういう感じで見てください。

コラボしてくださった【ギギネブラ・スカーレット】さんに感謝です。

天文惇君は無事、紫さんの能力で元の世界へ帰還しました。

さて、それでは次は本編でまた会いましょう

スーパ―編集タイム&作者土下座

誠に申し訳ありません。

的確な指摘で作者の脳内フィルターが正常値に戻りました。

理由

フェイトに近距離戦でなのはが互角とか一週間じゃ無理だ。

投稿者：【なっぺ】様

的確な指摘をありがとうございました。おかげで目が覚めました。

上海

「確かにこれ無理があつたよな」

蒼真

「だろうな、失敗だな。大失敗……これだから初心者わ」

上海

「本当にすいません、読者の方々には不快な思いさせました。首吊ります、樹海に行ってきます」

蒼真

「なあ、この小説ってさ主にご都合主義の原作ブレイカーだよな……… だったら、俺が戦っている最中にプレシアの時の庭園に突っ込んでみてもよくない？」

上海

「ああ、確かにね……… でもね、基本……… 俺、主人公以外の視点苦手なんだ」

蒼真

「はあ、これだから脳内happyは……… だったら神視点でいけoutsideで書いてろ」

上海

「そつだな……… プロット書き直し及び原作を見直してくる」

蒼真

「そつだ、それでいい。他の皆様を不快させたんだ……… もっと頑張ってきて」

上海

「本気ですみませんでした」

蒼真

「とりあえず、今後の路線を少しだけ暴露だ」

上海

「えっ、何で」

蒼真

「ネタばれにならない様に整理するためだ」

上海

「暴露したらネタばれじゃない？」

蒼真

「いいじゃん、ご都合主義だし」

上海

「まさかの適当」

今後の路線は原作に幻想の住人が介入してくるでしょう。

蒼真、大けがをするでしょう。

蒼真にデバイス？あるかもしれない

十二神って何かを説明が何時か入るでしょう。

ちなみに蒼真のスペルにあった干支を召喚するのとは違うのでその辺りは近日紹介？

蒼真

「このぐらいだな」

上海

「疑問が尽きない暴露だな」

蒼真

「気にするな……次回は真面目に考えて書くので待っていてほしい」

上海

「流石に一週間で強化は難しいね」

蒼真

「だったら俺のチートに近い陰陽術でネ○まの修行模型（時間がゆったりながれるやつ）とかメル○ブンの修行の門に近いのだったら」

上海

「そうだな……そうするか。マジで自分が泣けてきた」

蒼真

「はぁ、次からこんなのかなしな」

上海

「分かっている。俺は自分の未熟さと傲慢さで馬鹿をした……だから今後は方向性を間違わない様にする」

蒼真

「ふう、微妙な所だが……まあいい」

上海

「そついつ訳ですので読者の皆様はしばしお待ちください」

第十四話 幻想と友達？（前書き）

蒼真

「よし、心に杭を差し込み作者が復活した所で遂にラストパートだ」

なのは

「よくわかんないけど頑張ればいいんだね」

蒼真

「そつだ、もはや語る言葉ない！ちなみに一週間の時を修業期間にするから今回は長いぜ！」

紫

「幻想郷からも助っ人を補充するわよ」

蒼真

「時間の流れを遅くするのを頼みますよ、紫さん」

紫

「基本、境界を弄れば問題ないものね」

なのは

「私の知らない所でとんでもない事が起きてる気がするの」

蒼真・なのは・紫

「『さて、それでは編集版&反省点を生かして！【魔法少女リリカルなのは×東方project×オリジナル】幻想と転生の使者が始まります！』『

第十四話 幻想と友達？

「ストップ！時空管理局執務官、クロノハラオウンだ…詳しい事情を聞かせてもらおうか？」

そんなKY発言を聞いて一日たった。

簡易的に説明するとなのはとフェイトが互いのジュエルシードをかけて戦う事になったんだ。

まあ、どうせこうなるのは分かっていた。フェイトも何か背負っている様な瞳をしていたし、なのはも自分の正義を正して突き進んでいたからな。

自らの正義を信じて貫けば何処かで誰かの正義とぶつかり合う、それがただほんの少しだけすれ違う物もあれば互いを高め合う宿敵^{ライバル}みたいな存在になる奴もいるだろう。

意見の違う物同士がぶつかる。ある意味、王道展開の末端かもしれんな。

だからあえて俺は止めなかったんだが……

「こんな所で君達が全力で戦ったらジュエルシードが活性化されて次元災害が起こる所だったんだぞ！」

クロノという少年、背丈から同年かそれ以上か……まあ野郎の事などどうでもいい。

こいつが決闘を止めてからフェイトは時空管理局という単語を聞いてからすぐに逃げた。

で、俺らは逆らうのも面倒なので連行される事にした道中は特に何もないので省く……いや、ユーノが男しかも同年というのに愕然とした。

いらん、フラグを立てた気がする。

兎も角、それから時空管理局提督『アースラ』の艦長 リンディ・ハラオウンという人に面会した。どうやらクロノの母親らしいが…

…若いな、凄く若い……何だろうな、母親って何処まで若くある存在なのか？高町家といいこの人といい……話がそれだな。

そもでもって『ロストロギア』とかいう物の話をした。

ジュエルシードを含む、ロストロギアは幾つも存在する世界の遺産らしい。幻想郷の存在を知っていた俺に関してはどうせ異世界ぐらにあるだろうなと思っていたので特に驚く事は無かった。

それよりも招待された時に出されたお茶に角砂糖を投下したリンデ伊さんに驚いたわ。

糖分摂取は控えめにお願いします。

話を戻すがロストロギアは非常に危険で次元空間つまり世界一つを滅ぼしてしまうぐらいの威力があるそうだ……じゃあ、創造と破壊の能力を持つ紫さんは生きているロストロギアですね分かります。

で、ロストロギアに関しての事はこちらが全責任を持つから普通の生活に戻ってよしだとさ。

一度、返って考えて来なさいと言われたがそこで矛盾が生じる事に

俺は気がついた。

これ以上、民間人を危険にさせないのに何故、もう一度此处に来る必要があるのかって事だ。

それを質問するとリンディさんは押し黙る。大方、俺らを協力させるつもりで発言したんだと思う、なのはの魔力は予想以上に大きいらしいしな。

するとリンディさんはそれを肯定した後、に改めて俺らに手伝ってほしいと願い出た。俺達……というか主になのはが全面的に協力したいと申し出たので乗りかかった船だしやるかみたいな感じにまとまった。

そして現在、俺となのは……後、クロノは紫さんの前で正座している。

「貴方達に修行をしてもらいます。フェイトという少女には一週間

後になのはちゃんと蒼真で二対二で戦ってくれる様に伝えたから」

「はあ、それは有り難いんだが……何故にクロノまでいるんだ」

「そうだ！僕は執務官としての仕事があるんだ！速くこの拘束を解いてくれ！」

そんな声を荒げているクロノの腕には何かと嚴重な拘束器具が設置されておりデバイス何処ろか指一つ動かせない状態だ。

「あら、貴方はなのはちゃんに魔法を教えるのよ。だから、呼んだのよ」

さらりとクロノを利用する気満々な紫さん、貴女は鬼ですか……てか、微笑を浮かべてこちらを見るのやめて！何か凄く嫌な予感しかないんですね！

「蒼真、私は鬼じゃなくて『マジカル美少女』紫よ」

きやるんとかいう効果音が出るのではというほどリアクションだ

った。

シーン

僅かな静寂が辺りを支配した。

そして誰もいなくなるのか……じゃなかった。誰も反応しない、俺はスルースキルを活用して視線を逸らす。勿論、なのはにはツッコミスキルは無いので茫然としている。

恐らくどう反応していいのか分からないのであろう。

しかし、KYの称号をあげなくなるぐらいこいつは止まらなかった。

そう、クロノハラオウン執務官……彼は我に返ったと同時に初源の恐怖を知る事となるのであった。

「何を馬鹿な事を言っているんだ！それに貴女は少女という年齢層ではない！」

嗚呼、言いやがった。滅びの言霊を彼は発動させた。

去らば、クロノ君の事は忘れない。

♪（BGMはターミオーターかジョーズでお願いします）

「あら、私ってそんなにも老けて見えるのかしら？」

凄まじい威圧感が……俺達を襲う。俺は鍛え抜かれた精神力でどうにか冷や汗だけですむがなのはが昏倒しかけている。

「ぐっ、なんて威圧感だ。魔力が跳ね上がっている」

おお、クロノは威勢がいいだけに踏みとどまっている！

凄いぞ、クロノ！その根性だけには感心したぞ。

「ふふふ、少しお仕置きが必要ね」

ゴゴゴゴゴゴゴ

紫さんから濃いオーラが立ち上る。逃げようかな……なのは連れて行った方が身のためかな。

「式神【八雲藍】^{やくもらん}、式神【橙】^{ちえん}」

訂正、遅すぎたようです。間に合いませんでした。

「なっ！？使い魔か——ぐあ！——！」

最初に出てきたのは八雲藍……九尾の狐で最高峰の力を持つ、ちなみに最初は警戒されたが慣れてくれると世話焼きなお姉さんだ。

「えーい！」

二撃目、猫又の橙^{ちえん}が登場。クロノが更に追撃されて遠くまで飛んで行く。手が動かせない状態で式神二体はきついだろう。初見で見切るには無理がある。

「幻巢【飛光虫ネスト】」

おおっと、此处で追撃とか鬼畜だな。

虫の羽に似た弾幕がクロノ両手両足に突き刺さる、これでクロノは身動きが取れず更に言えばゲームオーバーだな。

さて、そろそろ助けに――

「後でみたらし団子を買ってあげるから邪魔をしちゃダメよ」

「アイ、ママ！」

いやゝ紫さんは何時も美少女で優しいな、目から鱗が出そうだ。

えっ？クロノ、誰それ？俺知らないよ。

「そ、蒼真！今助けてくれたら母さんが知っている甘味屋で団子をお好きなだけおごってやるから助けてくれ！」

「おしゃあああああ！！！任せる！クロノ！！ハラオウン執務官を救助に向かうぜ！陰符【陰陽呪縛】」

スペルを宣言。クロノを中心とした弾幕が紫さんのスペルを浸食、これであいつには攻撃が当たらない。

「はあ、そういえば貴方は物欲に弱かったわね。この食いつきよう

……靈夢に似てきているわよ」

「ほわぁ！？自称樂園の巫女に似ているだと！馬鹿な、そんな馬鹿なぁぁぁ！！！」

「それを靈夢が聞いたら傷付くわよきつと」

殺気を抑えた紫さんがため息をつく。

時に事実とは受け入れなければならないのだ。

そして真実は残酷なのが相場だと俺は知っている。

「それはそうと暴走してないで修行内容を教えてください。残りの期限まで後六日ぐらいしか無いじゃないですか」

「そうね、どうせ金欠という罰があの子には下るからいいとして……藍、橙。貴女達は蒼真の援護をしながら私が造った迷宮を進んでらっしゃい」

「分かりました、紫様」

「任せてください」

「んっ？もしか、ダンジョン系で修行ですか？まさかのドラ○エ展開だと！」

迷宮探索系で修行か……お宝とか薬草とか武器とかあるんだろうか？
そんな事を考えているとボロボロになったクロノが歩いてきた。

「ぐはっ、思ったよりもダメージが激しい。蒼真、正直助かった、礼を言わせてくれ」

「まっ、いいさ。それより約束は守れよ」

「分かっている。僕は一度、約束した事は護る」

「あゝ、私達はとうすれば」

小さくなっていたのはがおずおずと手を上げて質問。

「そうね、そのクロノって子にデバイスについて説明を受けて特訓にいそしみなさい。後は……時間と次元の境界を弄って……はい、出来た」

変な歪みが目の前に構築された。多分、あれだね……特訓場所に移動できるって奴だな。

何度も思っけどスキマって超便利だな。

「此処に入って修行してもらっわ。中ではこっちの世界と時間軸がずれているからあっちで百年過そうがこっちでは一分も経たないわ。これで通常生活を維持しながら強くなれるわよ、後ちゃんとお仕事も出来るわ」

「時間軸を弄るなんて高度な技術を使う貴女は一体？」

クロノの疑問も御尤もだが紫さんはうつすらと笑みを浮かべ

「女には秘密が幾つも存在するのよ……良い女というのは秘密を食べて磨かれるの」

と言ってスルーしていた。

さて、始めますかな。修行を！

「じゃあ、行きますか」

「ええ、なのはちゃんとクロノはこつちね。蒼真と同じ構造の空間だから最大攻撃力の魔法でも壊れないわ。力尽きたら戻ってくるといいわ」

「分かった。一応は尽力はするが……この子しだいで修行のスピードも変わる」

「そうね、でも頑張るんでしょなのはちゃん」

「はい！フェイトちゃんに勝ってちゃんとおはなしをしてもらおう！」

「ついでに俺らの修行が始まった。」

第十四話 幻想と友達？（前書き）

蒼真

「とりあえず、クエストの内容を発表！」

紫

「何故、クエストかは知らないけど貴方が行ったダンジョンは私が幻想郷の住民を多数配置したわ。ついでに低級妖怪もいるから限界だと思ったら藍か橙に言って帰還符を使いなさい」

蒼真

「了解、で…なのは達はどんな所に閉じ込められたんですか？」

紫

「簡単に言うと重力が地球の二倍、そして低級妖怪を配置した空間よ。蒼真みたいなダンジョンじゃないから睡眠の為の部屋とかも完備しているわよ」

蒼真

「あれ？俺と比べたら凄い完備良くない？どうせ、あれでしょ……俺は地べたで倒れるように睡眠しろというんでしょ？」

紫

「そんな事ないわ……まず、敵が多すぎて休む暇ないわ。休めると

したら力尽きた時だけね、目覚め次第修行再会だけど」

蒼真

「鬼だああああ！！！！此処に史上最強の鬼畜がいるううううう！！！！！！」

紫

「そんな蒼真を置いていて【魔法少女リリカルなのは×東方project×オリジナル】幻想と転生の使者 始まりますわよ」

蒼真

「ほつとかれた！てか、クロノめ！なのはと二人つきりで良い雰囲気とかかなりやがったら殺すぞおおおおおお！！！！」

第十四話 幻想と友達？

なのは s i d e

私たちは紫さんの用意してくれた空間に案内され即座に修行をする事になったの。

「くっ、重力が普通より強い！地球と比べると二倍前後ありそうだ！すぐにセットアップするぞ！」

「は、はい！レイジングハートお願い！」

『a l l r i g h t ・ s e t u p .』

すぐに私はバリアジャケットを身につけレイジングハートを構えた。

普段より身体が重い、上手く動けそうにないの。

「しかも、ご丁寧に敵まで完備が……しかし、何だろつなあ毛玉」

クロノ君が疑問をこぼす、私たちの目の前には白いふわふわした球体が浮かんでいる。

毛玉としか形容できないそれは一定間隔で魔砲弾を発射し出したの。

「多少動きにくいかもしれないがいつらの動きも単調で分かりやすい。飛翔魔法を駆使してあいつらを叩くぞ！」

「わ、分かりました！レイジングハート」

『Flier Fin』

「よしっ！こちらでも攻撃に転じる、相手に囲まれない様に注意して殲滅させる！」

「はい！」

蒼真君もこんな事しているのだろうか？

気になるけど修行内容は帰ってから聞いてみようかな？

私、フェイトちゃんとおはなしする為に頑張るから、蒼真君もどうか挫けないでね。

蒼真 side

ダンジョンとか男のロマンだよな……とか言った奴前に出る。

俺はダンジョン内に潜入してから骨が折れる想いをしていた。

「蒼真、右から敵が三体、低級妖怪だ」

「了解！急急慮律令——火爆符！」

俺は妖怪どもの間をする抜けながら狭い通路を走り抜ける。

「次は左から低級が二体、飛べるタイプだよ！」

「OK！急急慮律令！斬撃符！」

ロマンも語る暇さえ与えてくれないダンジョンとがありますか？

くそつ、思ったよりも敵とのエンカウント率が高い、下手すればすぐに霊力と魔力を消費して倒れるだろうな……こういう時には隠^{大人モ}し玉は出さないでボス戦に使うべきだな。

「はあああ、結構しんどい。何処か回復できるスペースは無いのか！」

「この先に広がっている場所がある。狭い通路を出て奴らの侵入口を封鎖すれば少しは休憩が出来るそうぞ」

藍さんによるナビゲーションで俺は走る速度を上げた。

「よしっ！出た、藍さん、橙…居るな！」

「私はいるぞ、橙も無事だ」

「はい、大丈夫です」

まだ、低級妖怪は通路口に固まっている。今なら、体制を整える事ができるぜ！

「少し、でかいの行くぜ！火は金を溶かす、急急慮律令——火剋金！」

巨大な火の玉が通路の天井を破壊。呆気なく通路は塞がり低級妖怪達も生き埋めだろう。

南無阿弥陀仏……化けて出るなよ。

まあ、出たとしても俺がこの世から末梢してやるがな。

「ふう、これで一息つける——」

「そうは問屋が許しませんよ。蒼真さん、転生しなさって弱くなられた様ですが剣筋の方はどうでしょうか？」

聞き覚えのある声に思わず振り返る。

そこにいるのは一人の少女、緑のワンピースに太刀を日本持っている物騒な少女は俺が知る限り一人……いや、半人しかない。

「嘘お……此処に来て妖夢かよ。勘弁してくれえ!!!」

「修行と聞いて参上しました。紫様から聞いた話によると幻想郷以外でも側室を作っている模様ですね……貴方はあれだけ幻想郷で暴れまわり人々を虜にしながら！まだ、足りないんですかあああああ……!!!」

「うおおお！！！！明らかに前半が建前で後半が此処にいる理由にしか見えない！」

剣を抜いて突進してくる妖？、俺は即座に呪符で剣を象った武器を作り出す。妖夢の持つ『楼観剣』ろうかんけんと『白楼剣』はくろうけんを酷使し鋭い連撃をかましてくる。

こいつの能力はこれだから厄介だ。『剣術を扱う程度の能力』、読んで字のごとく剣術を使いこなすことが出来る。

接近戦において彼女ほど強い人物はいないだろう。が、どうしても妖夢の師匠は突然何処かへ消えて行ってしまった為にまだ未熟らしい。

「ちっ、俺とて剣の一族に生まれた訳だ！陰陽術との複合で連携させて貰う！」

「かかって来てください！そのねじれた性根を叩き直してあげます！人符【現世斬】」

不意に妖夢が視界から消える……これは高速移動による抜刀術だったな！

「させるか！前回の戦闘で見切ったわ！真・天地開闢流 一の太刀
【双月】」

抜刀に対して護る剣術を使ってやる。俺はこの世界に転生してから剣闘士として嫡男として育てられただけに剣術自体はマスターしている。開祖が願った護るべきモノを護る技……なめんなよ！

ガキン

「くっ！これは……現世斬があっさりと止められた！」

「っ…流石に身体の大きさからじゃ完全とは言えないがとりあえず成功」

俺は妖夢が迫りくる瞬間に抜刀を抜刀により防いだのだ。但し、俺の抜刀は二撃分程あった。

元々、抜刀した後に更に切り返す技なので一撃目でみょん……もと
い妖夢の抜刀の威力を中和させ切り返して完全に受け止めた訳だ。

「ふう、この流派も捨てたもんじゃねえぞ」

「ええ、そのようで……ですがこれからは手加減しませんよ」

楼観剣を縦に構える妖夢、何か大技が放たれそうな雰囲気なんです
が……しょうがない、此处で余り体力を消費している暇はないしサ
ポートはありだから。

「藍さん！サポートをお願いします！式神【劣化版八雲藍】」

「任せろ！」

紫さんが使った様に俺も藍さんを式神として使用する事が出来る。
だが、大妖怪たる紫さんランクの技は俺には無理なので劣化版だが
技を封じるにはもってこいだ。

身体を回転させまるで伐採機のように飛んで行く藍さん。

「むっ、式神を使えるのか。だが、負けません！」

ガガガガガガガ

藍さんと妖夢の楼観剣が激突する。

基本、藍さんは九尾の天狐なので刀じゃあ簡単には傷付く事はない。
逆に楼観剣もそこらのなまくらと一緒にしてもらっては困るぐらい
の業物なので折れない。

互いに激しくぶつかり合う二人……今攻撃すれば勝てるんじゃない？

そんな事に気付いた俺の手にはスペルカードが二枚握られていた。

此处に落とされると同時に渡された代物だ。

一枚が、怪奇【簡易版スキマ】、もう一枚が、恋符【マスタースパーク】だ。

明らかに一枚は魔理沙のスペルな訳だが気にしたら負けだ。

この二枚を使えば妖夢だけに大ダメージを与えられるな。

「橙：俺が今から藍さんをスキマでこちらに転移させるから妖夢の周りに弾幕を密集させてくれ」

「はい、分かりました！」

そういつて橙は弾幕をばら撒く。良い子だな……本当に良い子だ。

「ふはは、今から本当の悪夢を見せてやろう！怪奇【簡易版スキマ】」

「むっ、私は退場の様だ」

「何っ！くっ、弾幕に囲まれているがこのぐらいなら」

橙の弾幕を見切って移動する妖夢。だが、決定的にその場から動けないのは見て明らか……此処にマスタースパークを打ち込めば勝てる。

正々堂々？紳士的？ようは勝てばいんだよ！これも作戦の一つだからな！

「恋符【マスタースパーク】」

「なっ！卑怯だ！それは魔理沙の――」

妖夢が何か言っていたけど聞こえないよ。僕にはなににも聞こえなかったんだ。

そうして俺は第一の試練を突破した。

第十四話 幻想と友達？（後書き）

蒼真が剣術を使い始めましたね。

このままいくと修行終わり時期には完全に剣士になってますね。

それでは次回も修行編ですがどうぞ生温かい目で見守ってください

祝 PV80000 幻想SS書いてみますか！（前書き）

皆さま、ありがとうございます！

今回は80000を超えた記念にSSでも書いてみようと思います。

基本、幻想郷の蒼真の過去話が絡むので宜しくお願いします。

祝 PV 80000 幻想SS書いてみますか！

PV 84 / 805アクセス

ユニーク 11 / 571人

上海

「これが何だか分かるかな」

蒼真

「明らかに分かるだろうが……読者さま方のご厚意だろうが」

上海

「ああ、当初俺は此処まで来るとは思ってた。軽い気持ちでリリカル×東方やってみるか的な感じで始めたら80000アクセス……俺は今、幸せの絶頂にいる」

蒼真

「やべえ……ヘブン状態だ！」

森近 霖之助

「やれやれ……初登場で作者のヘブン状態を見せつけられるとは……」

蒼真

「お、お前は！……誰だっけ？」

霖之助

「（ずてっ）…僕だよ！森近霖之助！香霖堂の店主の！忘れたのかい、君に色々と道具をあげたじゃないか！」

蒼真

「あつ……嗚呼、ごめん。全然思い出せないわ、多分俺は転生した事によって一部記憶が飛んでる個所があるからそれが原因かと」

上海

「本音は？」

蒼真

「男に興味はない」

霖之助

「こんな酷い主人公を僕は今までに見た事がない」

蒼真

「まっ、落ち込むなよ、香霖」

霖之助

「覚えてるじゃないか！」

蒼真

「そりゃそうだ。お前の漢^{おん}らしい禪姿は簡単には忘れないぜ」

霖之助

「そんな事をした覚えはない……！」

上海

「という事で今回は蒼真が魔理沙の適当な態度のお陰で幻覚を見た
ショートストーリーというSSを記念にやってみようかと思っています」

蒼真

「ああ、幻想茸を適当な相槌で返した魔理沙によって俺が食ったあれだな」

霖之助

「まったく……魔理沙の奴は、あれでどれだけ僕が苦労した事か」

上海

「それでは始まるよ！」

此処から先に出てくる森近霖之助は夢の世界の住人であり二次創作キャラのこーりんである為に霖之助のキャラブレイクに『激しい嫌悪感を抱いている人』は見ない方がいいです。
それでも良いという人はどうぞ続きを見ていってください。

幻想郷

外の世界で忘れられたモノが流れ着く幻想の地

そこに近年住み着いた少年が森とある少女と徘徊していた。

「おい、魔理沙。これはどうだ」

「おつ、これは魔法実験に使えるな」

少年の名は蒼真^{そうま}。

とある理由にて陰陽師の家系から性を剥奪されたフリーの術者だ。

長身とは言えないがそこそこある身長と日本人に多くみられる黒い髪、両腕には何時でも戦えるように五芒星^{ごぼうせい}が縫い付けられた手袋をはめていた。

そして彼の横にいるのは霧雨^{きりさめ}魔理沙。

普通の魔法使いと名乗っている人間、魔女が被るような黒のトンがり帽子にエプロンドレス、長いブロンドがその衣装に映えていた。

「この辺りに……なんだこれ？ ゴミか……いや、香霖に見てもらうか」

魔理沙は落ちていた捨てられていたモノを拾いまじまじと眺めていた。

その後ろで蒼真は茸を探している。本日は魔理沙の依頼により蒼真はキノコ狩りに狩りだされていた。

基本、蒼真は妖怪退治以外の時はなんでも屋みたいな事をしており、猫の搜索からゴミ掃除、配達、お賽銭寄越せなどの依頼をやっている。

る。

依頼終了時には賃金を貰ってもいいし仕事に見合う物を貰ってもいいと結構いい加減な報酬を要求していた。

「魔理沙く、珍しいのは分かるが今は茸が目当てだろうが、クライアントがしっかりしてくれないと補助の俺が疲れるだけだぜ」

「ふふ、ちゃんと報酬を払うんだ。へとへとなるまでこき使ってやるぜ」

「うえ、依頼主間違えた気がする……で、これは？」

「おつ、それは食用だな。確か、椎茸しいたけだった気がする」

「これが椎茸の原型か、殆ど調理した物しか見た事ないから分かんかった」

蒼真は路頭に迷っている時に幻想入りした。その前は由緒正しき家系で修行を行っていた為に茸の知識など無かった。正しく言えば、スパルタだった父親に『余計な知識はいらない。陰陽道だけを習得しろ』と命令を受けており一般教科（つまり国語、数学、社会、理

科、英語）と陰陽術、鬼道術、合気道、その他武術などの知識しか持っていなかった。

ちなみにアニメや漫画はこっそりと見ていたらしいが…

「んっ？何か孢子の量が多い場所が……」

近くに茸から排出される孢子量が多い場所が近くにあるのに気付き、蒼真は林をかき分けその場所を目指した。

「うぶっ、茸の群生地か……息がし辛いな。魔理沙！此処に茸がたくさんあるぜ！」

「おっ、でかした！これは貴重な茸が多いぜ。これは白あわび茸、これは爆発茸、毒テングダケ、ルグニカオオベニテングダケ」

「ちょ、ちょっと魔理沙さん。何処かで聞き覚えがある茸が混じっているんだが」

「気にしたら負けだぜ。さてと……そこそこ籠に集まったから今日

は終わりにするか」

魔理沙は背中に背負っていた籠一杯に茸を入れ歩き出そうとした。

「おっと……とと」

「危ないぞ」

茸の重さでバランスを崩しそうになった所を蒼真が支える。魔理沙の細い身体が蒼真の身体にぽっすりとはまる。

「大丈夫か？重いなら持つが」

「だ、大丈夫だぜ！箒で飛べば重さも関係ないんだぜ！」

「おいおい、本当に大丈夫か？顔が真っ赤だぜ（にやにや）」

「あっ！からかってるな！絶対おいて帰る！」

「ちょ、それは勘弁！」

魔理沙はすぐに蒼真から身体を離し、箒に跨って飛翔する。蒼真も置いてかれてたまるかと飛びあがる。

「ふっ、スピードで私に勝とうなんて百年速いぜ！幻想郷一の速さを見せてやる！」

「はんっ、幻想郷一は射命丸だろ」

「う、うるさいぜ！そんな事より私の家まで競争だ！」

「よっしゃ、勝つ！」

同時にスタートを切った二人は颯爽とその場からいなくなった。

残ったのは静けさと舞いあがった孢子だけだった。

魔理沙の家【霧雨魔法店】

二人が速さを競い合ってから早十分、決着がついた。

「私の勝ちだ！！！」

「ぜえぜえ、流石に元幻想一の速さは伊達じゃないな。てか、実際の所途中で前が依頼品きのかをばら撒いたのが勝敗の分かれ目じゃないのかよ！」

「き、気の所為だぜ」

バツ悪そうに魔理沙は顔をそむける。競争の際に魔理沙が弾幕を放った、それを蒼真が相殺させた事が原因で魔理沙が『茸弾幕だぜ！

（毒キノコor危険な部類のキノコ）』と言いながら茸を投下させ、蒼真が必死でそれを回避&キャッチを繰り返した結果が現在である。

「まあいいや、これで依頼は終了だ。で、報酬は金にするか物にする？あつ、言つとくが俺にはツケとか聞かんぞ」

「ちつ、しょうがないぜ。ほら、食用キノコ」

籠の中から魔理沙が十本ほどの茸を取り出す。

「キノコ狩りに行った報酬がキノコか……もうキノコは当分見たくない」

げっそりした蒼真は魔理沙から茸を受け取り依頼を完了させた。

直後、頬を少し赤らめた魔理沙から

「そ、蒼真……あれだぜ、日も暮れた事だし、き、今日は泊っていかないか！」

と誘いがあつた。

普段なら蒼真は何の躊躇もなく泊っているが、今回は依頼後だけに一旦引き揚げる必要があるのだ。無理に同じ場所に滞在していて依頼主が家で待っていたら信用にかかわる為に依頼が終わり次第帰るのが蒼真の中の約束事だった。

「んゝ、確かに有り難いが……依頼を終了させたら一旦、帰らないといけないからな」

「そ、そうか……」

少し落ち込む魔理沙『仕方ないよな』と呟いたのを蒼真は自慢の耳（女の子の声だけを拡張して聞こえる）でキャッチした。

「あれだ……依頼者がいなかったら泊りに来るよ、それにそろそろ掃除しないとお前の家大変だろう」

「ぐつ、痛い所を突いてくるぜ。一応、キノコ料理を作っておくぜ」

「……頼むから毒キノコだけは入れるなよ」

「分かってるぜ」

一度そういう経験がある為に蒼真は表情を陰しくして忠告した。

「さてと……ひとつ走りするか」

こうして蒼真は一旦家に帰り、依頼料キノコを置いて霧雨魔法店へ向かう事になった。

「ふう、今回はまともな茸を入れたな。上手かったぜ」

「そ、そうか！それは良かった……と、私は魔法研究があつた」

「おつ、流石努力家、じゃあ俺は先に寝る。明日は大忙しだからな」

蒼真は魔理沙の家の散らかし具合を見てため息をついた。

「掃除を頼むぜ！」

「いや、お前も手伝えよ！」

そんなコントまがいな会話を終え、蒼真はキノコ狩りの疲れかすぐに眠りに着いた。

これから起こる摩訶不思議もとい最凶の悪夢を見る事になるとも知らずに――

「んっ、此处は……」

蒼真は森の中にいた。魔法の森とは違う、空気の澄み切った心地よい森。

「夢か？久しぶりに見るなあ、しかも結構現実味がある」

「キシヤアアア」

そんな平和な感想を破壊するように上空から低級妖怪が振って来た。

「敵か！俺は夢でも休む事が出来んのか！」

飛んで来た妖怪を避け、反撃に移ろうとするがふと気付いた。

「こいつ……もう倒れてる。打撲痕があるな、どんだけの威力で殴られたんだ？」

落ちてきた妖怪を見て蒼真は呟く。顔面に何かが当たった様な痕があり目を回しながら気絶している。

「ふう、何にせよこれで休め——」

「H A H A H A H A ! 俺はこーりん！森の妖精さ！」

「うおおおお！！！！」

突如現れた森の妖精（禪一枚の香霖堂の店主）は自慢の白フンをはためかせ蒼真の前に着地した。

「な、何だ！霖之助か、どうしたその格好わ！新手的健康法か！」

「違う！これは解放感を追求した結果だ！」

「うわああああ！！絶対に変態だ！仮に変態だとしても変態紳士だとか良いそうだ！！！」

我が目をと脳を疑った蒼真は膝について耳をふさいだ。これは夢だ、こんな奇妙奇天烈な奴が幻想郷においての男友達ではないと断言するように……しかし、それも問屋が許さなかった。

「むっ、新手か！」

とこーりんが叫ぶ。

すると茂みから謎の影が飛び出した。

「ちっ、また妖怪か……えー！」

現実逃避したかったが蒼真は新しく乱入してきた影に視線を向け、

絶句した。

「だまされるな、蒼真！そいつは偽物だ！」

禪二号機が出現した。額に何故かBと書かれている。

「また増えたあああああ！！！！」

大絶叫する蒼真、もう何がなんやら分からなくなり近くにあった巨木に頭を乱打した。

「これは夢だ！覚めろ！覚めろ！覚めてくれええええ！！！！」

「どちらが本当のこーりんか勝負だ！」

「良いだろう！こちらから行くぞ！禪旋風！」

蒼真がヘッドバンドマシンに代わっている間、こーりん×？は決闘を始めた。本当の己をかけて二人の変態（紳士）が宙を舞った。

「くっ、痛いが出ねえ事から推測するにこれは確実に夢だな。しかも最大級に悪夢だ」

頭を打ち付けた事によって正気を取り戻した蒼真は上空で決闘している二名を完全に無視して解決策を考えていた。

「痛みがないから起きる事はない。だが、この悪夢から生還しないと精神的に死ぬ。どうすればいい……」

「ほおおおおおおおおおおお……！！！！」

「ほあああああああああ……！！！！」

激突する肉体、飛び散る血と汗、全てが混ざり合い上空では地獄絵図が出来上がっていた。

「てめえら五月蠅い！！！」

精神的にきつくなって来た蒼真は懷から札を取り出し二名を爆撃した。バランスを崩した二体は地面にクレーターを作り撃沈。砂が舞い視界が一時的に悪くなる。

「はあはあ……これで静かになった」

と安堵したのもつかの間、視界が良好の状態になり蒼真は今回二度目の絶句。

「『『『 H A H A H A H A H A、この俺が本当のこーりんだ！』』」

何と禪が四体に増えていた。何れもA、B、C、Dと記号が額に着

「うお………夢か」

辺りを見回すと霧雨魔法店だった。ごちゃごちゃとした空間においてあるソファで蒼真は寝ていたようで朝日が直に顔に射しこんでいた。

「どうしたんだ、怖い夢でもみたのか？」

背後から魔理沙の声が聞こえ、安堵した蒼真は振り返って――

「まあ、飯でも食えよ」

更に絶望した。こーりんが禪＋エプロン姿で料理を構えて蒼真の目の前に立っていた。夢の住人

精神的に限界だったのか、はたまた本能が動いたのかは分からないが蒼真は意識を手放しブラックアウトした。

「うわあああ！！！二重だった！まさかの二重トラップだった！」

「お、おい！どうしたんだぜ！」

目の前には本物の魔理沙が心配そうに蒼真を見ていた。手には昨日取って来た紫色の茸が握られていた。

「ほ、本物の魔理沙だ。ははは、俺は悪夢から解放された！」

「お、おおおおいいいい！！！！行き成り、抱き着くな！！！！」

悪夢から解放された嬉しさで蒼真は魔理沙を思いっきり抱きしめた。
無論、魔理沙は顔を真っ赤に染めてじたばたしていた。

それから二人が落ち着くまで五分ほど時間を必要とした。

「で、つまりそのキノコの所為で俺はあんな夢を見たのか」

「あはは、うっかり変なキノコを入れてしまったんだぜ」

「はあ、おかげで変な夢見て死にかけたぞ」

気分が悪そうな蒼真はげっそりと頂垂れた。だが、逆に同じ物を食べた魔理沙は何処か機嫌が良さげだった事に蒼真は気がつく。そこを指摘してみると魔理沙は耳まで真っ赤に染め蒸気を頭から発していた。

「い、言えないぜ！蒼真があんなことした事なんて！」

「夢の中で俺はお前に何をした!!!!」

「言えないんだぜ!!!!!!」

魔理沙は即座に箒に乗り、扉を突き破って空へと舞い上がっていった。蒼真は精神的な疲労により追う何処ろではなかったので仕方なく検索を諦めた。

「しかし、奇妙な体験だったな」

「一体、どんな体験だったんですか？」

「ああ、霖之助がな禪一枚で森の妖精を自称しながら飛んでたんだ」

「ほうほう、特ダネですね」

「て、射命丸！」

声の主を確認すると蒼真はくたびれた表情を更に悪化させた。

「ええ、清く正しく射命丸です！今のは私の新聞の材料にさせていただきます！」

「ちょ、これは悪魔で夢の話——て、人の話を聞けええええ！！！！」

蒼真が射命丸を取り押さえようとした時には既に遅し……射命丸は悠久の空の彼方に消え去っていた。

後日、この新聞が幻想郷にばら撒かれ霖之助は酷く居たたまれない事になっていたのは必然だった。

人の噂も七十五日……残りの日数をひっそりと何時も通りに過してくれ

蒼真はそう願うのであった。

祝 PV80000 幻想SS書いてみますか！(後書き)

取り返しのつかない事になった。

私はそう思った。

第十四話 幻想と友達？

試練は終わった……と、思っていたんだがね。

あれだけの弾幕が密集した空間で逃げ場のない攻撃を受ければ倒れてくれると想定した妖夢は今だ、俺の眼下に立っていた。

「げっ、まだ倒れてない」

「そう簡単には倒れませんよ。それにその魔理沙のマスタースパークは熱の魔法を研究したからこそ本来の力を出せる。それを媒体もなし、知識も浅い状態でやれば威力も大分削がれます。故に私は助かったんです」

楼観剣をこちらに向けて立つ妖夢。だが、仮にもあの状態から防ぐにせよ交わすにせよダメージはあったらしく妖夢の服はあちらこちら焦げたり破れたりしている。

それに疲労の色も見える。

「確かに……俺は熱魔法の勉強などした事がないからな。白い魔導師の集束魔法で奴を見よう見まねで出してみるのもいいかもな！」

こちらも此処に来るまでになんか体力を消費したが今の妖夢ほどではない。『弾幕はパワーだぜ』と発言する魔理沙じゃないが、でかい一撃を当てて沈黙してもらうしかないだろうな。

俺は自分の目の前に五芒星^{ペンタグラム}が書かれた魔法陣を展開させる。

昔、使っていたグローブにも五芒星は描かれており、これは陰陽師にとって全ての術式の要となるモノだ。

「藍さん、橙、援護をお願いします！俺は術式を完成させますので時間稼ぎをしてください」

「任せろ、久々にどこまでやれるか見てやろう」

「分かりました！頑張ります！」

スキマ空間から帰って来た藍さんと橙が地面を蹴って素早く妖夢に接近する。妖獣である橙は猫の式神故に藍さんより素早く接近する事が出来る、そして間髪いれずにスペルカードを発動させた。

「速い！」

「鬼符【青鬼赤鬼】」

青と赤の弾幕があふれ出す、細かな弾幕と大型の弾幕が行き来する中、妖夢はそれを寸前の所で避けていた。

すげえな、流石で言いたいところだが藍さんもいるしな。

「悪いが更に攻めさせてもらう。式神【憑依茶吉尼天】」

高速回転しながら藍さんが辺りに弾幕を振りまく、これは弾幕ごっこじゃない為に問題はないみたいだ。それに今は酷く疲れている、だから休みたい。故に全力を出す、人間にとっては当たり前前の要求だ！

サポートされている中、俺は目の前の魔法陣に手をかざす。神経を集中させる、何事もそれから始まる。

祖は、光の集束

力は、己が欲望

最果ては、如何なるモノをも潰えさせる絶望

果てよ、我が覇道の妨げとなるモノよ！

呪文の様にそれを俺は呟く。恐らくは他の人が聞けば何を言っているか分からないだろうが今はどうでもいい。

呪文と術式は完成した……後は打てるか打てないかな。

さてと……頑張りますか！

フ ェ イ ト s i d e

一週間後になのはという子と蒼真と戦い。

蒼真の保護者（？）である紫という人からの通告がこれだった。

全てのジュエルシードをかけて戦う。

管理局も感ずいた、後がないのは分かる、けどこれは賭けに近い。

それに今の私に課せられている問題はジュエルシードではなくなつた。

この間、母さんに会いに行った時に言われた言葉

『フェイト、私はジュエルシードについては一旦保留にしようと思う。それよりね、あの蒼真って子が気に入ったわ。此処に連れて来なさい、出来るだけ早くして』

母さんは蒼真を欲した、理由は分からないけど……母さんが言うのだから実行しなきゃ。

私の中での蒼真は日々大きくなり始めていた。

初めて会った時は強く、気さくで明るい印象、そして……とても強いと感じた。

次に会う時もそうだった。

優しくあり厳しくもあった彼はお兄さん……というのが正しいのかもしれない。

それに……前に見せてもらった成長した姿……カッコよかった。

はっ、わ、私は何を考えて!?

「どうしたんだい、フェイト? 顔が赤いけど」

「だ、大丈夫だよ、アルフ」

落ちつけ、冷静さを失ったら負け、母さんの笑顔をもう一度見る為に私はあの二人と対立しなければならない。

紫って人が言った内容は『二対二のチーム戦』

コンビネーションを使ってもよし二人で一人を叩いてもよしだった。

不敵に笑うあの人の顔がまだ鮮明に私の記憶に刻まれている。

一週間……私は勝たなくてはならなかった。

母さんの為にも絶対に勝ってジュエルシードと蒼真を連れ帰る。

そうしたらもう一度、母さんは笑ってくれるかな？

o u t s i d e

黄昏時、彼女たちはいた。

永遠に幼き赤い月『レミリア』スカーレット』

完璧で瀟洒な従者『十六夜咲夜』

「あら？中々、面白い運命ね。あの人間、蒼真を捕まえてくれそうだけど……手荒な真似はしてほしくないのにな」

「そう思いましたら私が伝えて来ましょうか？」

「いえ、いいわ。面白い結末が見えたのよ。この運命から蒼真が今度こそ逃げられると信じてるわ」

何か含む様な言い方でレミリアは呟く。

彼女が見た運命とは——如何なるものなのか、それは神と彼女しか知らない。

第十四話 幻想と友達？（後書き）

まだまだ、続きます。

ストーリーが滅茶苦茶進むの遅くてすみません

第十四話 幻想と友達？

蒼真 side

「穿て、消えよ！爆雷^{はくらいほうてんげき}方天戟」

布陣が輝き、術式が完全解放される。遊撃していた藍さん達は俺の術が完成したのを感じたのかすぐにその場から撤退していた。

魔法陣から金色の閃光が迸る。

「私も剣士だ。貴方の攻撃を真つ向から打ち破る！人鬼【未来永劫斬】」

妖夢も俺の最高砲撃魔法に対峙するように大技を繰り出す。剣圧と雷撃が交差し激しい衝撃が辺りに四散する。

だが、所詮付け焼き刃……徐々に俺の技の方が押し返されつつある。

不味いな、造ったばかりの布陣では無理があるか、だが此処で負けて幻想郷に連れ返されるのはまだ勘弁だぜ。

まだ、誰一人幸せにしていないし何より、あいつ等の心の底からの笑顔って奴を見ていない。

俺は昔の事情で人の幸せそうな『笑顔』を見るのが好きになったんだ、原動力と言っても過言ではないだろう。

キザ野郎ととられても構わない。

俺はそれだけが生きがいとなっていたのだから。

「まだだ……俺はこんな所で終われないんだよ……！」

無理やり霊力を練り込む、一発で駄目ならもう一発放ってやればいい！

俺は第二発目の布陣を展開し術式を解放する。

「くっ、連続で術を発動……無茶をする」

「無茶しないと負けるだろう、負けるのは性に合わないんでね。敗退は申したくないんだよ！」

二本目の雷撃が妖夢を襲う。それでも未来永劫斬の威力は劣る事がない、寧ろ更に力が強く脈打った気がする。

「ですが、こちらとて負けれません！これで最後です……！」

「だったら……これならどうだああああ……！！！」

身体中に巡っている魔力、霊力の一部を今使っている術式に反映させる。

この方法で爆雷方天戟の威力は加算されるだろう、そして何より質

より数で勝負する！

「ば、馬鹿な！？貴方の霊力は今の術式に全て使われている筈！威力を強化するのなら兎も角、小型の布陣を複数敷くなんて出来る筈がない！」

妖夢が焦った様子で剣を振るう、だが一度の焦りが俺を勝利へと導く事になった。

身体が軋む、頭が割れそうな程痛む、全身に掛かる重力を増加させられた様に重い。

それでも、俺は勝利を願い、力を願い、新たな道を願った。

「爆雷方天戟——散——」

号令と共に空に浮かぶ小型の魔法陣から連鎖的に雷撃が発射された。

「さ、さばききれない！くっ、うおおおおお！！！」

「威力が土壇場で更に上がった！だが、俺も負けれんのだよ！」

妖夢、悪いが俺は先に行く。何時までも過去にとらわれる訳にはいかないのだ！

真正正銘の全力全開を放つ！全てを穿て！雷撃の剣！！！

俺は護るべきモノの為にお前を倒す！

妖夢 side

「ですが、こちらとて負けられません！これで最後です！！！」

私は未来永劫斬の力に更に力を入れる。これで押し切るつもりだった。

だが、彼はそう簡単に折れる心を持っていなかったのを思い出した。

「だったら………これならどうだあああああ！！！！！」

「ば、馬鹿な！？貴方の霊力は今の術式に全て使われている筈！威力を強化するのなら兎も角、小型の布陣を複数敷くなんて出来る筈がない！」

驚愕した、蒼真さんの霊力は既に最初と二発目の術式に全て注がれている為に複数の布陣を配置する事なんて出来ない筈だった。

それなのに蒼真さんは小型の魔法陣を自分の周りに展開した！

私は驚愕すら覚える中で蒼真さんがあちらの世界にいる意味が少しわかった気がした。

「爆雷方天戟——散——」

遅い来る小型の雷撃、一発が起動したら後は連鎖的に襲い来る弾幕。
だ、駄目だ！この数は未熟な私では防ぎきる事は出来ない！

「さ、さばききれない！くっ、うおおおおお！——！」

「威力が土壇場で更に上がった！だが、俺も負けれんのだよ！」

彼の一撃が本気といなら私も全力を出して相手を務めさせてもらおう！

小型の雷撃は回避すればいいが大型の弾幕は未来永劫斬で対応せねば回避どころか防ぐ事すらできないだろう。

この強さ、嗚呼……貴方はあちらの世界に護るべきモノを見つけたのですか。

ふう、人間の寿命は短い……それに比べて私たちは遥か長い時間を生きる事が出来る、というか私は半霊半人なので生きるといのは些か矛盾している様な……

くつ、更に蒼真さんの術式の威力が上がる……これ以上は持ちませんね。

ですが、最後まで私は諦めませんから！

蒼真 side

「はあはあ……勝ったのか？」

俺は妖夢に向けて全力を放った、雷撃が彼女を飲み込んだのは分かったが決着が着いたのか着いていないのか分からない。

煙が立ち上っている為に視界が悪すぎる。

「蒼真……どうやら、勝ったみたいだな」

「えっ？あつ、妖夢が倒れてるな」

力尽きたのか妖夢は仰向けで倒れている。

近寄って意識を確認してみるがどこぞのアニメみたいに目をナルトみたいに回していた。

「は、はははは……勝ったな」

「そうだな、休憩先を探していたのにそれが新しい技を作る結果になるとはな」

「全くですよ……あれ？目の前が暗く……おう」

ボタン

俺は霊力、魔力をいい加減なやり方で取りだした所為か身体が動かなくなり倒れ伏した。

-
-
-
-
-
-
-
-
-
-

「起きなさい、蒼真」

「あ、あゝ……どうなったんだっけ？」

「蒼真君、大丈夫！」

目が覚めると同時になのはが視界に映った。頬や髪の毛が少々焦げている所から見ればどうやら俺と同じく修行を切り上げて帰って来たのか。

「つう……駄目だな。体中が痛い」

「アホか君は、修行で身体を壊したら元も子もないだろう」

「面目ない、思いがけない強敵と遭遇してね。まあ、なのはのデИБラインバスターを見よう見まねで同時に二発撃ちして見たら勝てた」

何となく口に出してみたら、なのはとクロノの顔が引きつった。

あん？どうした、なんで存在しないような物を見る目でこっちを見るんだよ。

「砲撃を同時打ち……しかも、デバイス要らずか規格外の力だな」

「そうでもないぜ。全力出したから動けん」

まだ、俺は床に転がったままだ。やばいな、明日の学校に出れるか？

「大丈夫？駄目そうなら……私の家泊る？」

「えっ、流石に迷惑だろ」

「お邪魔して来なさい。というか、修行中はなのはちゃんの家泊ったらいじゃない」

さらりと問題発言を投下する紫さん、てっ、なのは！何故、お前は

嬉しそうな顔で決定事項みたいな感じで電話してんの！

「はあ、いいんじゃないか？無茶をするようなら彼女が止めてくれるだろうからな」

クロノも賛成………というかこの件には関わらないといった感じでスルーする気だな！

そついう訳で修行中、俺はなのはの家に住居する事になった。

第十四話 幻想と友達？（後書き）

さて、そろそろ黒幕が動くころかなと思います

第十四話 幻想と友達？

修行三日目、早朝にて俺は高町家の道場で決闘を恭也さんから申し込まれていた。

「勝負しろ蒼真！お前が俺に一太刀でも浴びせればなのはとの交際を認めてやる！」

「どうしてこうなったんだかな……」

この状況になるまでには少し時間を遡る必要がある。

——回想

「ふう、これぐらいにしとか。ていうか、二日目からサポートなしになったけどそんなに厳しくなくなっただな」

迷宮の中で俺は人知れず呟く。妖夢との戦闘を行い幾らか成長できた俺は小型の布陣を使い周りの敵を蹴散らすなどの応用技を覚え接近戦に持ち込んで来れるのは魔法陣からこぼれた奴が強靱な奴だけだが大抵の雑魚はすぐに雷撃の餌食となり消失する。

「現在、地下二階……妖夢で一階なら二階にもボスがいるんだよな、絶対」

ぶつぶつ文句をこぼしても仕方ないので朝の訓練はこれぐらいにして引き上げるか。

俺は懷から帰還符を取り出し発動する、帰還符は主に移動に使う事が多いが転移符と違い指定された場所への特定移動が出来ない。

故に帰還符はこの世界から離脱するという契約の下役立ってくれる。

目の前が真っ白に染まる同時に身体が軽くなる、次の瞬間には見慣れた顔ぶれがいた。

へろへろになっているのはとズタボロのゴミ屑になり果てているクロノ……妖艶に笑いながらクロノを椅子代わりに使っている我らが紫さん。

いや、何があつた……！！

とりあえず、聞く事は聞いたんだが『乙女の秘密よ』の一言で終わらされた。

クロノにもなのはにも聞く気にはなれずこの件は迷宮入りと……俺が迷宮に入っていただけにな。

それからすぐになのはの家に帰還、時刻は4：30だ。起床した時刻から一分も経っていない。流石は紫さんのスキマ能力だな、あっちの空間では軽く五時間は戦闘を行ったんだと思うんだがな。

このまま修行し続けると時間間隔が可笑しくなる様な気がしてならないな。

「ふあゝ、疲れたから眠くなって来ちゃった」

「そうだな、まだ早朝だからな。寝とけよ、俺は術式の構成でもやつとくから」

「うーん、蒼真君が頑張るなら私も……………」

こてんと倒れ伏すのは……………どれだけ特訓したんだよ、女の子を床で寝かすのは抵抗があるし疲れてるんだろうからソファにでも寝かせてそっとしておいてやるか。

「んっ、意外と軽いな。………なのは顔が此処まで近くにあるとこっ………何かふつふつとわきあがる何か——き、気のせいだな」

俺は実年齢なら二十歳はたちを既に超えている………いや、違っぞ！ロリコンじゃないし、ペド野郎でもないからな！

てっ、俺は誰に向かって弁解しているんだ？

がしゃん

んっ？何かが落ちる音が——てっ、うお………！

「シネエエエエエエエ………！」

「ちょ、木刀を振り回しながら突貫するの辞めてください、恭也さ

ん!!!」

鬼の形相で恭也さんが木刀を二本握りながら切りかかって来る！こっちはなのはを抱えている関係で防ぐに防げないので家の中を逃げ回る。

「くっ、埒が明かない！なのはには悪いが——そいつ！」

「みゃっ!!!」

回避と同時になのはをソファに投げつける。ソファが思ったより柔らかかった所為かワンバウンドすることなく沈んでくれた、てか……起しちまった。

「今すぐ死んで懺悔しろ！俺の妹に手を出した事を後悔させてやる！」

「ちょっと、待って！なんのことやらさっぱり分からない！」

今までの自分の動作を細かく思い出していく。俺はなのはを抱きかかえて……ソファに寝かせようと思ってから表情を覗き込んで……覗き込む？

あつ、これか！確かに見方によればそういう風に取り取る人もいるよな。

「くそつ、だったら正々堂々と恭也さんに勝つてなのは貰う！」

「なつ……いいだろう！ただし、俺が勝ったら金輪際なのは半径一メートル以内に入るな！」

「受けて立つ！」

——回想終了

はあ、思い出してみれば馬鹿らしい。誤解を解いて穏便にしすませ

ばよかったのだが修行後のテンションが高いと思ったより上手く事を運べないな。

「よし、今回は本気で行く。二刀流だ、お前も本気で来るんだな」

「はい、勿論。剣士の決闘に手を抜くなどの泥を塗るようなまねはしませんよ」

俺は木刀を片手に恭也さんの前に立つ。修行の疲労は既に取れている、ちなみに決闘の切っ掛けとなった当本人は状況が把握できないで俺達から少し離れている所で待機している。

というか……

「なんで皆さん勢ぞろい？」

気付いた時には父親の土郎さん、母親の桃子さん、姉の美由紀さんがいた。まあ、基本早起き家族なのかもしれないな。

「気にしたら負けよ。若いんだから細かい事は気にしちゃダメよ、それよりどちらとも頑張ってね」

「よく分かんないけど、お兄ちゃんも蒼真君も頑張って」

よく分らないのに応援するのかよ、とツツコミを入れるのは無粋か。それより、恭也さんが本気か……多少身体の動きが戻って来ているといつてもまだ九歳の子供だからな。

限界ギリギリまで粘ってみるか、なのはを嫁にするにはこの人を超えて行かないといけないらしいしな、やれやれ一番難しいルートを選んだな、俺はよ。

「では、双方準備はいいか？」

「ああ、父さん」

「こつちも大丈夫です」

士郎さんが手を上にあげ……

「試合開始！」

下げた！

「先手必殺！うおおおおお」

「くっ、重っ！？一撃の重さが前の比じゃない！」

「当り前だ、前は実力を出し切ってない！今回は最初から潰す気で行く！」

うお、目が血走ってるぞ。恭也さんを倒す方法ね……………陰陽術を使うのはせこいですか？いいえ、俺の能力なので関係ないっす。

「硬化符を両腕へ。これで痺れを中和できる、さて反撃だ！」

硬化符の効果で両腕の耐久率と物理的な硬さが岩ぐらいにはなった。さて、切りかかって来るならカウンターを決めるまでだ！

「真・天地開闢流一の太刀【双月】」

「がつ、速度を落とさず二連撃だと！侮っていた様だな、なら俺も本気で行く！御神流奥義【神速】」

恭也さんが技の型を取った……と確認した瞬間、俺の視界から消えた去った！不味い、これは高速で移動している！

「はああああああ！！！！」

咆哮とともに恭也さんが常人では見切れないほどの攻撃を仕掛けてきた。だが、動体視力の良い俺はどうか視界に恭也さんの攻撃を捉え防御態勢に入る。

「ぐう、がはっ！くそっ、二発ほどガード仕損じた！」

「これを初見で防いだのは君ぐらいだと思うがな。さて、大人げないとは言わないでくれよ、これで止めといく」

再び、恭也さんは神速の構えをとる。やばい、こちらも反撃の技を使わないと殺られる！シスコンめ、此处まで強いとは……！しょうがない、こちらにも出し惜しみせずに天地開闢流を披露するか！

「御神流奥義【神速】」

再度、恭也さんは消える。俺は天才だ、誰が何と言おうと俺は天才

だ……この技は見切った！

「真・天地開闢流二の太刀【新月】^{しんげつ}」

木刀を下斜めに構え、攻撃が当たるのを待つ……来た！右から二発、上から一撃、左から三発！

俺はしなやか動きで恭也さんの剣撃を防いでいく、二の太刀は主に防御がメインで攻撃ではない。相手の行動を先読みし焦らず包み込むように防ぐ事が出来る技だ。

そして、これからが俺の攻めだ！

「ふ、防がれた！今回は全て！」

「踊り狂え、愚者よ。真。天地開闢流奥義【無月虎咆】^{むげつこほう}」

キレのある斬撃が打たれる、それをガードする恭也さん、しかし甘

い。そのまま、二打三打と攻撃が続けられるがこの奥義は掴みどころがないのだ。つまり、全ての太刀筋が変幻自在に変化して行く為に初見では避ける事が出来ない。

「ぐっ、くそ……負ける訳には」

「止めだ！うおおおお！！！」

バキン

次の瞬間、恭也さんの持っていた木刀が木屑と化す、こうして俺の勝利が確定した。

第十四話 幻想と友達？

「ふう、恭也さんに勝ったのはいいが………大丈夫かな？」

「多分大丈夫だよ、お兄ちゃんだし」

「てか、何か元気ないな」

「そ、そうかな？大丈夫だよ、私は元気だよ！」

………これは何か隠している気がするな。

まあ、それは兎も角だ………

現在、修行四日目だ。先日は恭也さんとの決闘で勝利した。

だが、その代償として………恭也さんが士郎さんに性根を叩き直すなどという理由でフルぼっこにされている。

すみません、貴方を助ける理由が見つからないので放置させて貰います。

さて、今日も修行学校から帰ったら修行するか。

- - - - -

「ねえ、アンタらさ……何か私たちに隠してない？」

「んっ？一体何の事だ……待て、問答無用に拳を突き付けてくるな！」

アリサの攻撃と質問を軽くかわすとすずかに羽交い締めにされた。

「蒼真君、なのはちゃんが深刻の顔をしている時があるんだけど大丈夫って言って放してくれなくて……アリサちゃんが喧嘩しちゃうたの」

おいおい……朝の元気のなさはそれか昨日は魔理沙に放課後呼び出されたから知らなかったがそんな事が起きていたのか。

で、アリサも気が荒くなっており俺に八つ当たりをし続けている訳ね……ごふっ、ちょ……今、鳩尾に入った！

てか、すずかに抑えられてアリサにサンドバックになっている俺ってどうなんだ！

「ぐふっ、殴るのを止めなさい。ふう、喧嘩して気が立っているからって八つ当たりをするな」

「アンタ、何か知ってるでしょ。なのはが何を私たちに隠しているのか」

「ナンノコトヤラ」

「何で片言なのよ！」

やれやれ、アリサは鋭すぎて痛い目を見るタイプだな。深入りしすぎたらいけない事もあるんだけどな、まあそれだけ友達思いなんだろうか？

すずかも平気そうにしているけど不安何だろうな、友達が悩んでいるのに手を貸せないという歯がゆい現実が……アリサに加勢して俺をサンドバックにするぐらいだからな。

「まあ、簡潔にいうと俺は確かなのはが悩む理由を知っている……が、理由は言えない」

「何だよ！教えなさいよ！」

「落ちついてよ、アリサちゃん！」

勢いよく飛びかかりそうなアリサを抑えるすずか、こいつらを魔法世界の面倒事に巻き込みたくないんだろうなのは奴……だったら、俺がやる事は一つだな。

「なのはが言わないんだろ、だったら俺がいうのは卑怯だろ」

「でも、なのはが悩んでいるなら私たちだって力になりたいのよ！」

「はあ、分からないかな。これ以上の追及はなのはにとっても俺にとっても色々と面倒な事になるんだよ！」

いい加減イライラしてきたので少し怒鳴ってみた。しかし、アリサは引き下がるどころか更にヒートアップした。

「何よ！面倒事なら私たちにも教えてくれればいいじゃない！一緒に悩んで——」

「分かんないのかよ！お前らじゃ無理なんだよ！良いから引ッ込んでろ！」

「っ……最悪」

怒声を上げてやるとアリサは呟きを残し、一人で教室を出て行った。周りの奴らもちろちらこちらを見ているが睨んでやるとすぐに全員が目線を逸らした。

そんな中、すずかだけが優しい笑顔を浮かべて俺の横にいた。

「嫌な役ばかりやると勘違いされちゃうよ？」

「ぐっ、すずかは何でもお見通しかよ……はあ、なのはと俺はお前からこの件に関わって欲しくないんだ。だから、決心がつくまで待っててくれ」

するとすずかは俺の手を取り、笑顔で他に聞こえない様に囁いた。

「手がこんなになるまで頑張ったんだね。私はこれ以上聞かないよ。でも、危ない事はしないでね」

「此処まで見透かされるのは初めてだ……本当に凄いな、すずか」

俺の手のひらには爪が食い込んで出来た傷が幾つかあった。どの傷からも出血しているのを見ればどれだけ強い握力で握ったか丸分かりなのだが……これを見た目で判断したのか？それとも直感か何かなのだろつか？

「怪我を消毒する為に保健室に行こうか」

「すまん、何時かは話すさ」

「うん、アリサちゃんは私に任せて」

「二度めだが……本当にすまない」

- - - - -

「これでいいね、保健室の先生の後任で誰になるんだろうね？」

「そうだな、出来れば美人がいい！」

キリ

「真面目な顔でふざけた事言つの禁止ね」

「いまだ！ひたいから……すじゅか、ちゅねるな（痛い！痛いから、すずか！つねるな！）」

「もう、私は先に帰るけど……本当に昼休みが終わるまで此処にいるの？」

「うん、そういう事さ」

軽く笑い、俺はすずかを教室に返した。

手の包帯を見てアリサの事を思い出しやっちゃまった感が罪悪感を掻き立てる。

同時に昔の記憶がフラッシュバックして色々と混乱してきたぜ。

「誰もいない……よな。はあ、人に嫌われるのは慣れてる筈だったんだがな……畜生が……！」

自分のふがいなさに俺は壁に拳を突き立てた。

それと同時にこちらの世界に来て初めて俺は涙を流した。

「くそが！結局、こんな結果かよ……俺は昔から進歩しない……人の事なんか関係なく自分を突き通してそれで終わりになるまで走り続けてそれで何もできないでいるだけじゃねえか！」

『お前は何もできない、人形だ。貴様の所為であいつは死んだのだ、お前は何がしたかったのだ』

前世の記憶に残っている父親の声が頭に木霊する。

五月蠅い！出てくるな！もう、過去とは決別したんだ！

『貴様は何も護れないまま中途半端に力を持ち、誰も助けることな

どできない。誰も貴様を必要となどしないのだ。分かったら消えるがいい、『家の恥さらしが!』

「五月蠅い!!! 喋るな! もう、俺に関わるなあああ!!!!!!」

何かに当たらないとやるせない気持ちが膨れ上がり俺は火爆符を作り出し保健室を爆破しようとした……………爆発と共に保健室は粉碎する……………筈だった。

しかし、それは一人の少女の行動により起こらなかった。

「駄目よ……………アンタのオカルトチックな技で八つ当たり何かしたら此処が木端微塵よ」

「……………あ、アリサ! 何でここに!」

「……………べ、別にすずかと保健室に行った聞いたからアンタがすずかを襲わないか見に來ただけよ」

「さいですか」

あれ？てか、もしか泣かれたの見られた？

「なあ、見たのか……」

「えっ、いや……別に覗く気じゃなかったんだけど……えっ！なん
で危険物をこちらに向けてるのよ！」

「消去しなければいけない……記憶から抹消だ」

「ちょっと落ちつきなさいよ！」

「ぐはっ！？はっ……俺は何を？」

アリサの鉄拳で目を覚ました俺は目線を逸らした。理由は簡単だ……
…超気まずいからだよ！

「こそこそ泣かなくても良かったじゃない。私たちは友達でしょ、苦しかったりしたら気軽に言ってくれればいいじゃない。無理に悪役ぶらなくても」

「……その情報源はすずかか？」

「そうよ、アンタ一人で全てを背負いこもつとしているから保健室に行けって言われたのよ。ふん、別に心配じゃなかったけどね」

「おいおい、前半の台詞と後半の台詞で矛盾が生じてるぞ。まあ、純粹に心配してくれていたって事だろうか……友達か、そんな奴はほばいなかったからな。」

「幻想郷じゃ異変解決の仲間の感覚だったから、友達というのか仕事仲間みたいだったし前世では家からは出なかったからいいい。」

「なのはが気に入る筈か……ふふ、全くこの世界は面白いな。」

「というかすずかには後でお仕置きだな……ぐへへ、待っているよ！」

「邪悪な気配を感じるんだけど」

「おっと…危ない。それよりさっきは悪かったな、怒鳴ったりしてさ」

「別に……私も必死になりすぎてた事も悪い訳だし」

暫く沈黙……おい、何でも話さないんだよ、こっちを見ながら赤面されてもどう反応したらいいのか分からないじゃないか！

「そ、それはそうとなのはと仲直りしとけよ」

「う、うん。そうね、何時までも喧嘩したままじゃ気分悪いしね！でも、ちゃんと何時かは話さないよ！」

「おうよ、まあ今は無理だが整理が着いたらなのはから話してくれるだろう」

「それもだけど…アンタの事もよ。あの錯乱ぶりから見てかなり嫌な事があつたんでしょ、無理に言えとは言わないけど、どとどとどうしてもて言うなら私が聞いてあげるわ」

アリサは気恥ずかしくなつたのかそつぽを向く、友達か……よくよく考えるとそうかもな。初めての友達になるんだろ……この事は言わないけどな、恥ずかしいし。

「くくく、お前はあれか世話焼き女房か」

「なっ！？アンタ人が折角心配してあげたのに茶化すな……！」

「うぶっ…」

再びアリサのストレートが鳩尾へクリティカルヒットする。

拝啓、縁授家のお母様、お父様

どうやら、僕には新しい生活の方が性に合っている気がします。

これからの修行も耐えれそうだな、なのは達はやっぱり笑顔の方がいい。そう、こいつらには幸せになって貰いたい。

そのためなら俺はどんな事でもしてやる！よっしゃああああ、気合Maxだ！！！！

第十四話 幻想と友達？（後書き）

十四話終了ですが、修行はまだ続きます

第十五話 幻想と宿命

「遂に残す所、今日を含めて三日になったわ」

「ですね、迷宮攻略もそろそろいい感じになってきました」

「基礎も技術も上げて行きたいけど後三日なの」

なのは達が仲直りしてから放課後というか夕方、俺たちは例の如く修行場にいた。異質な空間で時間と認識を歪ませる結果が貼られており普通の人物なら認識する事すらできない。

「そろそろ連携について考えてみたのよ。相手は用意したわ、なのはちゃんと蒼真で戦って来なさい」

「行き成りだな……まあいい。誰が来ても問題ない！」

「うん、フェイトちゃんに勝つために頑張る！」

「俺となのはのコンビネーションを見せてやるっぜ！」

「うん！」

やる気十分な俺たちはすぐさま紫さんが用意した迷宮に侵入した。

-
-
-
-
-
-
-

『Protection』

「蒼真君、大丈夫！」

「くっ、思ってたよりあいつ等強いな」

俺たちは迷宮に入っすぐにとある二人と対面しバトルする事となった。

その二名とは――

「ふふふ、今日こそアンタを倒して天界へ持ち帰るわ！……その後、存分に苛めてもらう」

「あたいたら最強ね！」

天界での不良……俺から言わせればドMの比那名居天子と？がトレードマークの氷精チルノだった。

何故かやたらテンションが高い二人はコンビネーションも抜群で初回から劣勢を強いられた。

「このままじゃ、ジリ貧だ！」

「蒼真君は飛べない、それに対応して桃の髪飾りの人が大地を揺るがせて攻撃。それに転じて青いワンピースの子が氷の魔法を発動してくる。私はどうにかデイベインシューターで援護するけど蒼真君は」

「大丈夫だ。お前に合わせて攻撃する、チルノ自体の弾幕は見切れる、だから先に天子から片付けよう！」

俺は駆け出し一気にスペルを発動！

「行くぞ！【陰符 陰陽呪縛】」

モノクロの弾幕が動きを制限するように天子の行動を阻害する。触れれば弾幕が爆発するように考えてあるので一度これを喰らった天子は一応理解して――

「ふぎやあ！！！！……ちよつといいかも」

訂正。全然理解してなかった、寧ろ生前の俺との絡みより更に酷くなっていた。これは危険だ……対象年齢が十八をオーバーするような事があれば、なのはには見せられないよ！

全力で阻止せねばならぬ！

「なのは！今だ！！！！天子は動けない、チルノは俺に任せて全力で天子を撃つんだ！！！！」

「分かった！レイジングハート！あれ行くよ！」

『all right』

なのは目の前に丸い円陣が展開される。その魔法陣は周辺より何かをかき集めるように収縮していく。魔力の流れを感じる……まさか、大気の中にある魔力までも上乗せして攻撃するというのか！

「むむむ、何をしようとしているか分かんないけど！あたいを甘く見るな……！【氷符 ソードフリーザー】」

スペルカードを宣言したチルノの手には大きな氷の剣が握られており、回転しながら突撃してきたチルノに俺は吹き飛ばされてしまった。

「ぐわあああ……！な、なん……だとチルノが見た事もないスペル

カードを使用している。名前の通り氷の剣か……ならば、こっちも新しいスペルカードで対抗する！【剣符 ソードフライヤー】」

念の為に紫さんから貰っていた予備のスペルカードを新規スペルとして俺のライブラリーに登録した【剣符 ソードフライヤー】は主に幾度として繰り返される斬撃をイメージしたスペルカードで広範囲にわたって鋭い弾幕を雨の様に降らせる事が出来る。

「わ、わわわ！……ふ、ふん！最強のあたにかかればこんな弾幕！……ふぎゃ！」

小柄なチルノは驚くべき回避率で弾幕を避けていたが残念な事に最後の方に油断して撃墜。地面に落ちたものの倒れるレベルのダメージではなくすぐに立ち上がって新たなスペルカードを取り出した。

「いたた、中々やるわね！でも、これで終わりよ！【雪符 ダイヤモンドブリザード】」

大雪を思わせる氷型の弾幕が吹き荒れる！

「なのはまで弾幕が届きそうだ！回避しつつなのはに当たりそうな弾幕は俺が受ける！」

「お願い！もう少しだけ待って！」

大分レイジングハートの先端に魔力が集中されてきている。もう数十秒ほど耐えればかなりでかいの来る筈だ！それまで俺がどうにかせねばならん！

「あん！……なかなか良かった——じゃなかった！よくもやってくれたわね！お返しよ！【天符 天道是非の剣】」

「っ！？天子も立ち直ったか！くそっ、一気に来られたら不味い！
【陽符 式神召喚】」

俺が展開した弾幕がチルノのダイヤモンドブリザードと天子の突貫をいなししていく。だが、大体は相殺できるが全部とは行かず流れ弾がなのはの方へと向かった。

一番嫌な展開だ！これだけは止める！スキマダイブ！

【簡易式スキマ】を発動し俺は動く事が出来ないのはの前に転移。

「ぐおっ！冷たい！！！」

俺は弾幕にワザとぶつかり吹き飛ばされる。氷属性だけに凍傷になるのではないかと不安はあるがどうにかなのはには届かなかった。

「出来た！蒼真君、避けて！」

「嫌な予感が……うおおおお!!!!」

チャージが終了したレイジングハートから巨大な魔力を感じられる。恐らく一撃必殺と言ったところだろうか。それよりも逃げるのを優先したい!!!!

「行くよ! スターライトお……」

『Starlight Breaker』

「ブレイカーっ!」

魔法陣に収縮されていた魔力球が解放され巨大な力の奔流となり放たれた。なのはの砲撃魔法『デインバスター』を遥かに超えた砲撃…… スターライトブレイカーは俺の弾幕とチルノ達の弾幕すら消し去り視界を桜色に染めるのだった。

ちなみにこの魔法によりチルノと天子はリタイア。結果的には勝ちとなった……あと二日後に控えているフェイト達との戦闘でもこの戦闘形式をとって闘うか……勿論、大人モードで戦うつもりだが十分という縛られた時間を有効に使い戦場を動かすかが必要。

まだ足りない……まだ足りない。俺はもっともつと強くあり続けなくてはならない。

魂が解き放たれてしまつまでは……

第十五話 幻想と宿命（後書き）

【裏舞台】

蒼真

「一体どうなることやら……てか、更新が偉く遅かったな」

上海二一ト

「ああ、それね。運悪く、就職試験と中間テスト、指を痛めるの泣き面に蜂状態に陥った為に更新が止まったんだ」

蒼真

「試験やテストは兎も角、指はどうしてそうなったんだよ」

上海二一ト

「えっ、あゝ……壁に全力でぶつけた」

蒼真

「何その、全力全壊……」

上海二一ト

「いやね、筋力強化のためにシャドウボクシングしてたら足が滑って遠心力を着けたまま壁を殴ってね……人差し指と中指が逝った」

蒼真

「アホだ……真正のアホがいる」

上海二一ト

「だがもう大丈夫だ！サロンパスとかアンメルツとか使ったら痛みが引いたから」

蒼真

「そうか……てか、現在進行形でテスト期間だな」

上海二一ト

「ええ、そうです。だから更新はやや遅れ気味になるけどね」

蒼真

「まあ仕方ない、ついでに誕生日がテストの前日なんだろう？」

上海二一ト

「そうなんだよ、やっと十八だ。……いざ逝かん、ヴァルハラへ！（ストップマークがついた暖簾を抜けて行く）」

蒼真

「駄目だ……奴の性欲を止めることが出来ない……！」

第十六話 幻想と亡霊と賢者

明くる日の放課後、俺はなのはと帰宅し残り二日に控えた決戦の為に翠屋で甘味を食しながら雑談をしていた。

「なのは、今日は紫さんが取って置き of 訓練をしてくれるらしいぞ」

「取って置き？もう、日にちがないから最終段階に入るとは言うてたけど……どんな修行何だろうね？」

「さあな、俺にも報告がなかったぐらいだ……壮絶なバトルにならない事を祈るか」

「にやはは……でも、どんなに苦しい修行でも耐えてみせるよ。蒼真君も頑張ろうね」

苦笑いを浮かべていたなのはがすぐに思い返した様に真剣な表情へと変わる。これが少し前まで普通の小学生の女の子だったとは思えないな。

覚悟……か、確かに人には多数の意思と心がある……心と意思は似ているようで違う物、どれだけ表面上で何かをしたいと思っただけでも心は動かない。心を動かすことが出来るのは決意や覚悟といった確固たる精神の表れ。

この少女はこんなにも未発達な精神を成長させたのだ。心を揺るぎない覚悟へと昇華させた。

それだけでも驚くべきことだ。なのにまだこいつは頑張るのか……昔の俺とは大違いだな。陰陽師の最高機関の息子として産まれた俺は限りなく妖怪退治についての術を叩きこまれた。幼い精神を重圧する汚い俗世……そして息子をただの兵器としか見ていない父親。

それを救ってくれたのが俺の母親だ。彼女は厳格な父とは違い、朗らかに笑い、大空の様な心を持っていた。

そんな母に支えられ俺は十六年目の誕生日を迎えた。

十六歳……この年は俺の前世において最悪な記憶の塊だ。

俺が生を宿した陰陽師の家系では十六歳の男の子には頭首となれるかの適正試験がある。簡単にいえば指定された妖怪を調伏すればいいだけの事だ。

対象にされたのは一角鬼だった。

使えても火炎や強力な腕力から繰り出される打撃ぐらいのものだ。

だが、俺の誤算はこれだった……ただの一角鬼だろう、そう俺は慢心していた。自分の才能と技術では一瞬で瞬殺だと過信していた。

あの時、もう少し事前に情報を得ていれば俺は誤った選択肢を選ばなかっただろうか……今となっては過ぎた過去の一部にすぎないがな。

「蒼真君？どうしたの、顔色が優れないよ……今日は修行お休みす

る？」

ふと顔を上げたらそこにはこちらを心配している少女の姿が目についた。優しい瞳が全てを包み込むように俺の心の重さを軽減してくれる。

思い出すのも嫌だった記憶……俺が転生者である事……何時かなのは達に話せるときが来るだろうか？俺はその時逃げないで全てを伝えることが出来るのだろうか……それを聞いてなのは達は俺を畏怖したいりしないだろうか？

そんな疑念が次々とあふれ出す。ヤバいな、負の感情をコントロールしきれない。

「大丈夫だ……もう少し休めば気分も良くなるから今日も一緒に行くぜ」

「うん、分かった。けど、無理はしないでね」

「ああ」

適度に休んだ後、俺は心機一転して紫さんと待ち合わせの場所へと最終訓練に勤しむ為になのはと歩き出した。

-
-
-
-
-
-
-
-
-
-

「良く来たわね。今日と明日は私と私の親友の幽々子で相手になるわ」

「あら、可愛い子ね。蒼真も可愛くなっちゃって」

「むぐ……もが（H A N A S E）」

「あ、あの蒼真君が窒息しちやいそうです」

結界が貼られた空間に入ると懐かしい人が……どちらかというと人では無かったな。懐かしい亡霊おねいさんがいた。

そして有無も言わずホールドされ窒息気味……この巨大な胸は何処までも俺を苦しめるのだろうか？

ボケてる場合じゃねえ！！本気でヤバい！！！！しかし、さっきから全力で振りほどこうとしているのにもかかわらずなんで外れないんだよ！

予想外の筋力に全俺がビビったわ！

「あらあら……ごめんね、蒼真。貴方が余りに可愛らしくなったらか」

『幽々子……転生の話しは禁忌タブーよ。今は喋れない状況なの』

「続けてごめんなさい。蒼真がこんなに可愛く育つなんて思わなかったわ」

やっと放してくれる幽々子さん。この方は西行寺さいぎょうじ 幽々子という名前で白玉楼はくぎょくろうという冥界にある屋敷の主人で管理者でもある。

幻想郷でも強者の類に入っている……それに紫さんも参入だ…と？

この日、なのはと俺は地獄を見る羽目になる。再会したのもつかの間、時間が惜しい（でも時間はゆっくりな筈なのにな）という理由で理不尽に弾幕を放たれ、トリッキーな動きで回避をして見たが幽々子さんの誘導弾幕がかなりきわどく十分経てば俺らは完全に力尽きていた。

こ、これは……かなりキツイのではと思う。だが、二日だ……あと二日……今日はとことんやってやるわ！

- - - - -

なのはside

ふえええ！？

私は激しい魔力弾を回避しながらも追って来る誘導弾を相殺させつつ間合いを開けようとしていた。けど、どっという訳か紫さんや幽々子さんという人の攻撃は激しくどんな距離にしようと砲撃を打つチャンスをくれない。

距離をとつても詰めても弾幕が襲いかかる両立された攻撃。近づけば幽々子さんの誘導弾、離れれば紫さんの次元を超えた魔力弾……確かこの裂け目の事を『スキマ』って呼んでたよね。

兎に角、凄いの！蒼真君は誘導弾を避けつつも何度も紫さんに接近して持っている剣で攻撃しようとするけど大抵が弾幕の嵐によって弾かれてしまうの。

「うおおおおお！！！！今度こそおおお！！！！」【陰符 陰陽呪縛】「

蒼真君が『すべるカード』というモノを使う。

あれを使うと必殺技が使えるんだって蒼真君がそう説明してくれた。

ちよつと羨ましかったです。

黒い球体が紫さんと幽々子さんの動きを制限に同時に私は隙を突いてデイベインバスターを撃ってみたの……でも、駄目だった。

スキマと呼ばれる裂け目に私の砲撃は吸収されるように吸い込まれ別の場所に逸らされる。あれが自分に帰ってきたらと思うとぞっとするの。

「あらあら……それじゃそろそろ使っわよ！【桜符 完全なる墨染の桜 - 亡我 -】」

そう宣言すると幽々子さんの必殺技が放たれた。蒼真君の知り合いにはとても綺麗な魔法を使う人が多いの。本人たち曰く『地元では強さと言うより美しさを競うのが主体なのよ』と力強く豪語されたの。

それにしても確かに綺麗。この世のものとは思えない幻想的な情景

に私は一瞬心を奪われた。

「ば、馬鹿！何ぼうつとしてるんだ！」

蒼真君の声が聞こえた次の瞬間、私は空中に投げ出されていた。

s i d e
o u t

第十七話 幻想と決意（前書き）

この頃、テストがあるので中々更新が出来ない。

祝三十部！此処まできたのか

第十七話 幻想と決意

蒼真 side

「あゝあ、戦闘中に敵の攻撃に見とれてたら意味ないだろうに」

俺は弾幕に被弾して気絶しているのはを抱えて呟いた。

「それだけ私たちのスペルカード戦が優雅で美しいという事よ」

「そうね…傍観者の立場なら問題ないけど戦闘している本人なら駄目ね」

「相変わらず手厳しい……さて、なのはが寝たなら本気を出せるという物だ」

台詞を呟いた後、不敵に笑い弾幕を二人へ向かって放つ。霊夢と同じく俺の弾幕は札の様な形状をしており無駄に速い。

「相変わらずの速さね。少しでも気を緩めれば被弾しそうね」

「ええ、でもそこが面白いから弾幕ごっこなのよ」

「本当に相変わらず、その神経の太さには舌を巻くよ」

速度が速いのにも関わらず二人は俺の弾幕を軽々と避けていく。前世において見を持って知っていたがやはりこの二人の強さは健在らしいな。

だったら持ってきた魔力を使っても構わないと見た！

「祖は、光の集束、力は、己が欲望、最果ては、如何なるモノをも潰えさせる絶望、果てよ、我が覇道の妨げとなるモノよ！穿て、消えよ！爆雷方天戟——ともえ巴——」

新必殺技である『爆雷方天戟』を拡散させるように放つ。これが前に使っていた複数の布陣と同時に発射する『爆雷方天戟——散——』の

派生系『爆雷^{ばくらい}方天戟^{ほうてんげき}―巴―』だ。

「あらあら……拡散した弾幕ね、それでもなお集中した攻撃も生かす……面白いモノを作ったわね、蒼真も成長したのね」

「そうね、魔理沙のマスタースパークの様で違う。一直線ではなく発動した後に拡散するようになってるのね……また、私は厄介な人を育ててしまったのかもしれないわ」

「まあ、そんな事より決めましょう……なのはが起きる前にやっておきたい事があるんですよ」

俺は心の底で一つだけ決心していた。自分の中に存在する“アレ”を使うかどうかを迷っていたが此処でフェイト達に負ければなのはがやって来た事が無駄になる。彼女は一生懸命に努力してこの訳のわからない物語の中で友人にも話せない事をやっていた。

せめて俺が少しでもなのは達の心の重みを軽くしてやれればいい一緒にいる。ハーレムを作るなんてものは建前に過ぎない。確かに子孫繁栄の為に努力しないといけないのはそうなのだが俺自身そこまで家訓には興味がない。

ただ、一つだけ気にかかる事……それは封印された“アレ”がもう一度暴走するのではないかという事だ。俺に封印されている邪悪な力は時として武器になる……だが、その分リスクは高い。

上手く使役できなければ、封印から諸悪の権化が今でも抜けだそうと悪あがきを行っている。

転生したのにも関わらず俺の中の修羅は消えなかった。転生をしながら俺にへばりつく悪魔より質の悪い化け物。この力を使えばフェイト達には圧勝出来る。

フェイト達は確かにデバイスや戦闘訓練を積んでいると言っても所詮数年程度……数十年も血なまぐさい事をしていた俺に言わせればまだまだビギナーレベルだ。

「何を考えているのか当てて上げましょうか？それと……戦闘中に考え事は命取りよ！【廃線　ぶらり廃駅下車の旅】」

「痛かったらごめんね」【反魂蝶　- 参分咲 -】

あつ……電車と弾幕が迫って来る。

しまったあ……この距離じゃ避けねえじゃねえか！！！！

「うふあー！！！」

紫さんの召喚(?)した列車による交通事故に遭い跳ねあげられる。
その後、幽々子さんの弾幕により撃墜。

結果……顔面から地面に叩きつけられる格好となった。

なんだかさっきまでのシリアス思考が仇となった気がする。次からはシリアスムード出しながら自分の世界に浸るの止めよう。

しかし……

「で、電車強すぎ……がく」

こうして俺は意識を飛ばした。

第十八話 幻想とスキマ（前書き）

やっとテストが終わった。

しかし…… 赤点取ったら死ぬな。

自動車学校に行けないぜ

第十八話 幻想とスキマ

蒼真 side

「ふぁ……眠い。春風が俺を午後の眠りに……誘っ」

「チエスト！」

「ぎゃああああ、フォークが刺さった……！」

昼食時、屋上にて眠いので睡眠を取ろうとした所にアリサのシルバ
ーフォークが頭蓋に突き刺さった。

「痛いだろうが……やばいって今のは殺傷物だ」

「大丈夫よ、そこまで鋭利じゃないから刺さってないわよ？」

「アリサちゃん、そのフォーク結構鋭いと思うよ？だって血が……」

「気にしたら負けよ」

といいつつアリサは血液を布巾で拭う。この野郎、女じゃなかったら殴ってるな。

てか、本気で痛かったんだが……げっ、結構血が出てるんだけど。

「大丈夫、蒼真君。出血がひどいなら保健室一緒に行くよ?」

すずかは心配してくれるようで……んっ?目がちよいと怪しい色をしている気がするの俺の気のせいなのか?

「ああ、すずか有難う。たくっ、アリサ少しは手加減しろ!」

「ふんっ、別にいいじゃない。アンタは頑丈なんだし」

「そういう問題じゃなくてな……はあ、とりあえずは保健室で止血してもらったか」

「うん、行こう」

すずかと共に保健室に行く事になった俺はその場を去る事にした。

ちなみに此処で必ずというほどにいるのはが会話に入ってこないのはレイジングハートの計らいで直接、脳に仮想戦闘を行っているからだ。慣れれば仮想戦闘をしながら授業などの事が出来るらしい、しかし便利なデバイス……俺も少し欲しくなった。

- - - - -

なのはside

私はレイジングハートから送られてくる情報で空想上で戦闘を行っている。

敵に回り込まれたら直ぐにアクセルシューターを使って回避しつつも攻撃を行う。蒼真君、曰くヒット&アウェイも大切だがカウンタ―にも気をかけろ……だったかな？

つまりは接近されるのを前提に攻撃を返す方法を考えておけと言う事だね。

「ふう、あれ？蒼真君とすずかちゃんは？」

「あつ、やっとこっちに帰って来た。もう、ぼうとしてたからどうしたのかと思ったわよ、ちなみに蒼真はすずかと保健室」

「えっ？蒼真君、怪我でもしたの！」

「結構、鋭いのね……フォークって」

「ええっ！？もう、アリサちゃんは蒼真君に八つ当たりしすぎなの！」

こちらに隠し事をしているのでアリサちゃんが不機嫌なのは分かるけど……ちょっと酷いの。

「今回は八つ当たりじゃないわよ。蒼真の血液のサンプルを貰おうと思ってね」

「えっ？どうしてそんな事を？」

「簡単な事よ、蒼真は不思議な力を持っているのは血脈だと思うのよ。だって、この間の温泉の時に剣闘士だって言ってたじゃない。だから、血液を調べれば何か面白い事が分かるんじゃないかと思っ
て」

うーん、確かに不思議な力を使うのは興味はあるけど本人の許可なしでやっていいのかな？でも、私は興味もあつたのか止める気にはなれなかった。

- - - - -

蒼真 side

「嗚呼、運命は時に驚くべき方向に力を発揮するんだな」

「そうね、私もびっくりしているの」

保健室に着いたのはいいが……何故か白衣で丸メガネをかけた紫さ

んがいた。

可笑しいな……ああそうか、前の保険の先生は駆け落ちしたんだっけ？だからといって何故に紫さんが此処にいるんだよ。

「嘘ですね、紫さん。明らかに意図的に保険医なんてなったんですよ？」

「ふふ、それはどうかしら？私は数学においては天才を超える実力よ、数学の教師としてもいけるわ」

「だからこそ無理でしょう。無駄に頭の良さを披露すれば注目を集めて全世界の数学学者を敵に回しますって」

はあ、この人ならどんな数学者よりも上に行くと思うんだけど……式神の藍さんだってフェルマーの最終定理を数秒で解けるとか言っているし……紫さんに関しては規格外だろうな。

絶対に数学者に喧嘩吹っ掛けるにきまつてるな。

「蒼真君は保健室の先生とお知り合いなの？」

「んっ、ああ……まあ昔馴染みのお姉さんかな？」

「蒼真……その疑問形は見逃せないわよ」

おっと、殺気が……。それより何故かすずかが落ち込み始めた。

「やっぱり……大人の女性がいいのかな？」

「何の話？」

「乙女の秘密よ。妄りに接すると心を傷つけてしまうわよ」

うーむ、乙女心と言う物は理解できないな。それより頭の治療をしてもらわないと……

「それより、頭のこれどうにかしてください」

「それもそうね……それじゃ、傷と自己修復の境界を弄って……はい、完治したわよ」

「おい、待てこら！すずかが居るのに能力使用するのはどういう事ですか！！！」

何故か堂々と境界を弄って頭の傷が完治したが横にいたすずかはぽかんとして驚いている。明らかに紫さんらしくない大胆さだ。

「大丈夫でしょう、その子は私達となんら変わらない体質だから」

「えっ、どうして」

「どうして知っているかという事ね。簡単よ、貴女と私はよく似た様な存在だから」

驚くすずかの台詞を遮って紫さんはそう語る。すずかの特異体質『夜の眷属』と紫さんたち……つまり妖怪は似ているという事は案外間違っではない。

すずかは基本的に運動が飛びぬけている。反応速度、腕力、握力、脚力、素早さについては他の人間とは比にならない。

だが、余りにも強い力なので彼女は学校生活ではこの身体能力を四割ぐらいしか活用して内容だ。

俺はバリバリ活用して化け物みたいな存在になってるがな。

「似た存在？ 本当なんですか」

「ああ、紫さんはすずかの体質とよく似ている。人間とはかけ離れた寿命と身体能力を持っているからな」

「そうなんだ……私たち以外にも似た人たちが居るんだ」

「そうよ、だから……この事は秘密よ？」

紫さんが妖艶に笑う。もしかしてだが……紫さんは不憫なすずか達の負担を少しでも軽くしてやろうと思ってこんな事をしたのだろうか？

ただ、他の人間よりも強いだけで恐れられ、拒絶されるのが怖いすずかを助けてくれたのではと俺は勝手な構想を描く。

もしかしたら、万が一行き先が無くなってしまった月村家を幻想入

りさせるつもりじゃあ……

そんな疑惑を乗せ、紫さんに視線を向けると少し間を空けた後に脳内に声が響いた。

『その通り』

やっぱりか……はあ、確かにそんなことがあれば紫さんは受け入れるだろう。そして幻想郷も彼女たちを受け入れる事は間違いない。

「蒼真君、紫先生を見過ぎだよ」

「いまだ……耳を引っ張るなよ！」

「仲良しね、これからも蒼真を末永く宜しくね」

紫さん、それ明らかに保護者がいうような台詞！しかも結婚前提みたいなの……！

それにすずかは……

「はい！よろしくお願いします！」

元氣よく返しました。やれやれ……これは凄まじい程の縁を結んでしまったかな？

まあ、楽しい事は幾らでも来い。しかし、彼女たちに降りかかる災厄は俺が全て薙ぎ被ってやるがな。

そんなこんなで後、決戦の日まで一日を切った。

第十八話 幻想とスキマ（後書き）

今回は日常編……かな？

第十九話 幻想と決戦前日

「決闘まで後一日を切ったわ」

早朝訓練を済ました俺たちの間で紫さんが宣言する。

「辺り一面を須臾にした後に謎の迷宮に放り込まれ」

「魔力が尽きるまで魔法を使っただの」

ぐったりした俺たちは二人共倒れ状態、簡単にいえば体力、魔力、霊力が最早無いに等しい。しかも何度かなのはのスターライトブレイカーに巻き添えになりそうになって恐ろしかった。

なのはのスターライトは後世に伝えるべきだな……危険、速攻で戦線離脱してくださいと

「よく頑張ったわね。これで前座は終わりよ……さあ、此処からが本番。時間は無限にあるわ……さあ、始めましょう」

「嘘お……まさか、これが前座だというのか。俺達既に尽きてるんですが？」

「うふふ、大丈夫よ。幽々子も私も元気だから」

「そつちじゃねえよ！？こつちの心配してくださいよ！」

最上級クラスの妖怪と亡霊を相手にして疲労困憊状態で勝てる気がしねえ。だが、唯一の救いは俺の成長バージョン身体が一時間保てるようになったことだ。力を使い過ぎれば十分も持たないが、セーブしていけばそこそこ持つから大丈夫かもしれない。

基本的に成長状態の身体は転生した時の霊力と魔力を引き継いでいるのでそれが自由に解放できるようになる。子供状態でそれが無制限に使用できないのは紫さんに枷を付けてもらっているからである。小さな子供が大量の魔力を使うという事は危ういらしい。

なのは達はリンカーコアと呼ばれる制御媒体がある為に大量の魔力を消費する事が可能だが俺にはリンカーコアと言う物が微々たる物しかなく……簡単にいえば魔力が暴走して身体がバラバラになるから使えない状態なのである。

「駄目よ、精神がすり減っている今だからこそ鍛えられるの。仮にも貴方達は決闘を行う、蒼真は兎も角、なのはちゃんはまだ小学三年生……世界を知らなすぎる。だから、こうやって世界の厳しさを教えて行くのよ。それなのに蒼真が音をあげたら駄目じゃない」

「返すお言葉がありません」

至極真つ当な理由だ。確かにそうだ…俺は兎も角、隣の少女はまだ真っ直ぐ過ぎて汚れを知らない。だから少しでも厳しく戦いを教えないといけない。そうだな、そうだ！俺も頑張らなきゃ駄目だ！

「大丈夫だよ、蒼真君。私はまだやれるよ……」

「そう言ってるが…限界だろ？足が震えてるぜ」

「あらあら？紫ったらこんな小さい子たちを苛めて……蒼真、これをあげるわ」

ニコニコ笑う幽々子さんはスペルカードを俺にそつと渡す。それは

俺のトラウマをスペルカードにした決意の二枚…【輪廻 欠けて二度と戻らない命】【悲劇 十六年の刻】の二枚。

「幽々子」それは最後まで預かっておいて欲しいからって貴女に渡していた物なだけど？」

「そうだったかしら？でも、良いじゃない。どうせ返すんでしょ？」

「そうだけど……まあいいわ。どうせ、幽々子には通じないみたいだし」

苦虫を五匹程同時に噛みつぶしたような顔つきになるが直ぐに呆れた様な表情になり、ため息をつくとこちらに真剣な視線を向ける。

「さあ、始めるわよ。戻って来たスペルカードに貴方の成長した形態ならそこそこの勝負は出来るわ」

「ええ、その為に迷宮に居る間は成長した状態で戦わせたんですよ。あれはきつかった」

修行が後半にさし変わってから迷宮内での俺は殆ど青年の姿だった。最初にそれを指示された時に気付いたんだが【成長符】を維持していれば何時か使用時間が延びるんじゃないかと思ってたが確証はなかった。だが、それが現実が変わった…これならアルフと同じ体格でやり合える。

「いいえ、違うわよ。あれは昔の貴方が見たかっただけ……他に他意は無かったんだけど結果的に成長符を強化したみたいね」

「ええ！？まさかたったそれだけの理由で！結果的には都合よくありませんからいいですけど」

「にやはは……蒼真君も大変なんだね」

「大変なのが分かってるなら家で四六時中くつつくのをやめてくれ」

軽いジョークをかましてみると何故か幽々子さんの目つきが険しくなった。

「……そんな羨ましい事やってるのね。最近の子は進んでるみたいね、ずるい」

「ええっ！？私そんな事やってないもん！」

慌てて否定するのはだが……惜しい、少し時間が遅かった。幽々子さんは自分の世界へトリップしているみたいで何にも聞こえていない。

「ブツブツ……やっぱり、私も好きなだけ抱きつこうかしら？それとも性的に頂こうかしら？」

あれ？やばげな単語がチヨクチヨク聞こえるんだけど……もしや、俺は自分の首を自分で絞めてしまったのか！？

「蒼真……後は任せたわよ。幸い、この空間は時間も歳も流れないから……ね」

「ね、じゃない！助けてくださいよ！」

「い・や・よ」

「絶対この状況を楽しんでる！」

「わ、私何時も抱き着いてなんかないもん！そんなに甘えん坊でもないし！」

俺が大変なものにも関わらず一人でなのは誰かに弁解していた。

- - - - -

「さて、仕切り直しね……さあ、行くわよ」

そう言ってスキマに腰をかけ日傘を差す紫さん。

「ええ、何時でもどうぞ」

符で生産した刀を構え俺は紫さんと対峙する。

ちなみになのはと幽々子さんかというと…

「羨ましい……妬ましい……」

「何もしてないのにいいい！蒼真君の馬鹿ああ！！！」

既に対戦を始めていたらしく、パルパルしてらっしゃる幽々子さんに追いかけて回されていた。

やれやれだぜ……ん？謝らないよ、面白いから。

第十九話 幻想と決戦前日（後書き）

久々の更新……そろそろ決戦ですね。

できれば更新していきたい。

第二十話 幻想と決戦前日? (前書き)

蒼真

「本気なんだ……俺は、なのは家のシュークリームが好きだあああ
! ! ! !」

紫

「まさか、ヒロインをぶつちぎって甘露に目標を定めるとは思わな
かったわ」

なのは

「シュークリームに負けた、私って」

幽々子

「どんまゝいね（はあと）。蒼真、私とデートしない?」

蒼真

「食費が赤字どころかドクロマークまで行きそうなので却下します」

幽々子

「ええっ!? 私はそんなに食いしん坊じゃないわよ」

蒼真

「一日の摂取量は?」

幽々子

「一万Kカロリー!!」

蒼真

「じゃああ!!! 続いて行くぜ!」

幽々子

「無視された!?!」

紫

「それでは、幻想と転生の使者、limited world
crisisが始まるわよ!」

第二十話 幻想と決戦前日？

八雲紫 side

「では、行きますよ！」

そういつて蒼真は駆け出す。小さな身体で飛んだり跳ねたり、まるで無邪気な子供の様に戦いを楽しんでいる。強くなれるのが嬉しいのだらうけど……貴方は何に向かって力を伸ばしているのか。

あるいは、過去の過ちを引きずっているのか。

それとも絶望の淵に存在する闇がそうさせているのか……何れにしても貴方は逃れられない。

今回は、特にね。

「来なさい。力を得たくば、力への執着を捨てなさい。じゃないと……無の辺境を歩く事になるわよ」

「何が言いたいのか……分かった気がします。天才の俺でも時々、紫さんの言っている意味が理解できない時があるんですが？」

「当たり前。生きてる年数が違うもの」

「ああ、年の功て奴か……とあ!？」

何か聞き捨てならない発言を聞いた気がしたので弾幕を打ち込んであげたわ。でも、回避には成功みたいね。日に日に前の感覚を取り戻しているのかしら？

しかし、あの吸血鬼は何を考えて敵に入れ込んでいるのかしら？

これは、蒼真には言わない方がいいわね。無駄にレミリア「スカ」レットに入れ込んでるモノね、この子。

確か……『可愛いわ、正義!』だったかしら。

なんだか腹が立ってきたわ。何時もよりきつめでいいかしら？

「覚悟しなさい、蒼真」

そうして、私は幻想郷が愛した彼に向って弾幕を放つのである。

- - - - -

蒼真 side

こえええ！？年の功で名言を出した瞬間から紫さんの行動が過激に
！？

一体何を間違えたんだ俺は……

「覚悟しなさい、蒼真」

何か凄くご立腹だ。ヤバいな、絶対何時もより加減が聞いてないだろっな。

その思っていたのもつかの間、速攻で紫さんの弾幕が展開される。

見るだけなら美しい弾幕ごっじ。

やっているこっちの身にもなってみろて感じだな！

「負けるか！こっちも弾幕で応戦！」

「甘いわ。その程度の弾幕は、実戦では使えない。弾幕ごっここで魔導師に勝負を挑むならもつとスピードを上げなさい。そして動作性も起動パターンを読まれたら終わりよ」

相変わらずスパルタな授業だな……心が折れそう。

うーん、これならフランと戦ってた方がいい気がする。可愛い正義だし、尚且彼女の弾幕は力強いというか歪みねえといえますかね。

「あら？戦闘中に他の女の子の事考えてもいいのかしら？それと、後ろに気をつけてね」

「後ろ？……見なきゃよかった」

紫さんの策略（？）で背後を向いた俺は、愕然としたね。うん、これは泣いてもいいレベルだ。

何があつたかと言うとだな……まあ、さっきの紫さんが俺の心を読み、発言した単語に背後で戦っていた二人が反応したらしい。

なのはがこちらに向かってスターライトの準備をちやくちやくと完成させている。

幽々子さんは……もう、黒死蝶乱舞する気満々だな。

「えー、ハーレムって死亡フラグが憑き物だよね」(ある意味憑いてるな、亡霊とか)」

「『ええ、そうだね』」

嗚呼、二方向からの弾幕と一方通行キャノンが、織り成すビジョンを頭で思い描く。やばいつて死ぬってこれは……そうだ、なのはが使っていたプロテクションだっけ？あれを使えば大丈夫かもしれない！

使用法は、単純だ。魔力を体外に排出し膜を張る様に伸ばす。

よし、出来た！

次は、強化だ。これじゃあ、ただの魔力の膜だ。簡単に突破されるであろう。だから、更に何重にも魔力を上乗せして硬質化させる！
！！

淡い紫色のシールドが二枚完成する。

直後、事は起こった。

「スターライトお、ブレイカアア!!!!!!」

『Starlight Breaker』

「行くわよ」【蝶符 鳳蝶紋の死槍】

「続いておまけよ」【結界 光と闇の網目】

大量に発生する魔力の渦、あれ？生き残れる確率低くないか？ごめん、皆俺……死ぬかも。

一斉に発射される弾幕と魔法。

ガガガガガガガ

一気にシールドが削れていく音がする。ヤバいな、これは非常にマズ過ぎる！

魔力の出力不足で防ぎきれんな、なのは達の方だけに優先出来るなら問題ない気がするが……分散された攻撃だからな、やばっ！？シールドが耐えきれん！

くそっ！？ヤケクソだ！魔力が少量だからな、成長符を使うしかないぜ！

俺は、即座に懐から札を取り出し発動。

一気に身体が成長し魔力と霊力が戻る。これなら、行ける！

「うおおおおおおお！！！！！！！！弾き飛ばすぜ！！！！」

ガガガガガ、ガキン！

弾幕とスターライトブレイカーの軌道を逸らし、シールドの耐久率の温存。それに受け流すことによって魔力を少量調整するだけで防ぎきれぬ。

「防がれたの？全力でやったのに」

「あらあら……防がれちゃったわね」

「防御型の訓練終わり」

「はっ？」

全力を尽くした俺は紫さんの一言に呆気にとられた。

つまり、こういう事だ。嫉妬を利用して俺に攻撃を向けさせて最終局面において防御の練習をしたという事らしい。何処までが本当で何処までが嘘かは不明だが。

おかげで防御の仕方が大体把握できた。

この技、名付けて【不動防御陣】で所だな。

さて、明日はどうなるやら。

第二十話 幻想と決戦前日？（後書き）

此処でオリジナル魔法（蒼真）について補足を入れます。

【爆雷方天撃】

まあ所謂、マスタースパークですね。

それに派生させたのが散と巴です。

散は、マスパ収縮＋克蘭ベリートラップ背後から連射とってください。

巴は、一直線に見えて中間で拡散する技。マスパが空中分解され、小型のレーザーになるとというのが適切かと思いました。

【術符】

陰陽師が良く使われていたと思われる札

火爆符：着弾すると小爆発

爆撃符：拡散する火爆符（未使用）

斬撃符：刃の様に鋭い真空波を起こす

硬化符：肉体を鋼の様に強化

成長符…リミッター解除！

とまあ、そのぐらいです。

更新遅くてすみません！

第二十一話 幻想と決心（前書き）

蒼真

「はぁ、スランプから抜け出せない主がゲームに走った所為で更新が遅れたな」

上海二一ト

「すみません、積みゲーしてたら忘れてました！」

紫

「駄目駄目ね。ゴットイーターバーストが発売してデットライジング2が発売したからって両方に手を出すなんて」

上海二一ト

「それだけじゃなく、友達から借りた……SCHOOLdaysHQ版をやって鬱になってました」

蒼真

「なんという駄目っぷり」

紫

「それは、兎も角…始まるわよ！」

第二十一話 幻想と決心

蒼真 side

明日が、決戦か。意外と速いようで呆気ない。

日が経つのがこれ程速く感じれたのは久しぶりだ。

なんにせよ、明日はフェイト達と決戦。この間の様にギャグじゃ済まないし、本気で来るだろう。アルフにしては、絶対に俺を潰しに来る。

速さじゃ俺の方が劣っているが、巫女さん直伝の結界移動法ならどうにか合わせられる。

しかし、問題はなのはとフェイトだ。

あの二人は、明らかに分が悪い。

なのはが、遠距離からの射撃砲台とすれば、フェイトは近距離戦闘

をこなすソルジャー。

明らかに攻められれば、なのはが不利。

だが、逆に遠距離からならフェイトが不利となる。

「あゝ、ダルい。面倒にも程があるな……だが、やらなきゃいけない。本当に世界は面倒なことばかりだ」

ただ、高町家の天井を見上げながらつぶやく。俺は、用意された部屋に寝泊まりしており今日まで頑張っている。兄の恭也がかなり厳しい（主に妹を思う気持ちからの暴走が）態度を取って来る以外は温かな家族で済ませられる。

まるで、戦乱の世を駆け巡っていたような俺とは違う、普通の家。

なんで、俺は普通の家系に生まれなかったのかと何度も自問自答し神に願いを捧げた。

『次に目が覚めたら普通の生活がしたい』

幼い俺はそう願った。皮肉な事にそれが今叶っている。まあ、ちょっと要らないジョイントパーツが着いてきたが。

殺伐とした戦いもなければ、人を喰らう鬼もないこの世界。居るのは弱卒な低級霊と下級妖怪。

後、幻想郷の皆だったな。

はあ、いつその事……ジュエルシード集めが終わったなら幻想郷に帰れないかな？

まあ、それは……最終手段としとくか。

なのは s i d e

お母さんに頼まれて蒼真君を呼びに来たんだけど…部屋には電気がついていなくてそつと耳を立ててみたの。

「あゝ、ダルい。面倒にも程があるな……だが、やらなきゃいけない。本当に世界は面倒なことばかりだ」

そんな蒼真君の愚痴が聞こえた。

蒼真君は、蒼真君なりに闘おうとしている。そんな中、私は正直迷っていた。

本当に明日勝てるのか、それに闘うだけじゃなくてお話で解決できないのかなあって。

でも、フェイトちゃんは一步も譲らなかった。だから、私も譲る気はないの！

よおし！明日に向けて頑張る！

その時、不意に目の前の扉が開き…

「はあ、考えても仕方ないか……て、なのは？何で転がってんだ？
頭抑えて」

「うみゅゝ、突然開けないでよ」

「ああ、悪い。だが、何時まで転がってんだ？パンツ見えてんぞ」

「ほえ！？」

飄々と蒼真君は、歩いて行く。で、振り返りざまに…

「ピンクか、中々似合ってるぞ」

「にゃあああああ！！？」

その後、あんまり覚えてないけど気付いたら蒼真君とお兄ちゃんが家の中で戦闘を行ってたの。

フエイトside

明日、明日……全てが決まる。

どれだけ足掻こうと明日、全てが決まる。

母さんの為に私は全力であの子たちと戦う。アルフも手伝ってくれる、母さんも私を待っていてくれる筈……だから、私は戦える。

一番気がかりなのは、蒼真だ。あの子は、抜け目ない。

どんな状況でも土壇場でひっくり返してしまう策士の様なタイプだ。だから、蒼真と戦う時には気をつける必要がある。

逆になのはこの子は、実戦経験が浅い。故にまだ脅威というほどにはならないかもしれない。でも、油断はできない。あの子は、私よりも強い魔力を秘めている。

あんな大量の魔力を上乗せした集束魔法でも喰らってしまえば一溜まりもないと思う。

でも、弱点はある。あの二人は、あつて間もないらしい。だから、明確なコンビネーションを行って来る事はないだろう。

そこが、勝利の境目なのかもしれない。

母さん、私……明日勝つから

その時は……

アルフside

色々とまずいね。あれは、どう見てもただの子供じゃない。

蒼真という奴は、かなりの力を隠している。私の野生の勘がそう告げる。

前の時も油断したとはいえ、背後を取られた拳句、強力な打撃で何キロ吹き飛ばされたか分からない。

「やれやれだね、フェイトは兎も角、私は無理かもしれないね」

正直、けた外れの破壊威力だった。一発喰らっただけで身体が悲鳴を上げる程、うーん……どうやったら勝てるようになるのかね？速さはどうにか勝ってるようだけど瞬間的に加速する様な仕草を見せたり……面倒な敵には違いないね。

フェイトがあのお譲ちゃんを倒すまで持たせればどうにか二人で蒼真を叩く事が出来るんだけどね。

持つか持たないか……厳しいね。

でも、負けるわけにはいかないんだよね、これが……あの女にフェイトがこれ以上傷つけられているのを見ているだけはごめんさ。

明日は……勝つよ！

- - - - -

Outside

海鳴町にあるとあるビルの上には彼女たちがいた。スカーレットデビル、レミリア、スカーレット。完全に瀟洒なメイド、十六夜咲夜。

「いよいよ明日だね。咲夜、どちらが勝つと思う？」

「そうですね、明らかに蒼真様の方が有利かと……スキマ妖怪の訓練で元々の力を取り戻しつつありますから。ですが、あの二人組もそこそこの使い手ですわ。五分五分だと思われそうですわ」

「そう、中々いい読みしてるじゃない。流石、咲夜ね」

レミリアは、妖艶な笑みを浮かべ、自慢のメイド長を見つめる。そ

して、咲夜は主の言葉に頭を下げた。

「お褒め頂き光栄の至りでございますわ。例の作戦ですが、戦闘直後に開始する……とあの大魔導師に伝えておきましたわ」

「御苦労さま、明日はいよいよ……楽しみね」

暗き闇の中、幼き吸血鬼は空を仰ぎ、明日始まる決戦を心待ちにしていた。

今日も月が満ちる。

第二十二話 幻想と決戦（前書き）

上海ニート

「お久しぶりでございます。やっとのこと文化祭も終わり爆睡して気付けば一日が終わり掛けておりました」

蒼真

「確か、昨日の間に更新予定じゃなかったのか？」

上海ニート

「そうなんだけどね。寝落ちしちゃった、てへ」

蒼真

「爆雷方天撃！」

ちゅどーん！

紫

「あら、こんな所にこんがり焼けた作者が」

蒼真

「むかついた、後悔も反省もしていない」

紫

「アホね、さて…今回は、例の如くやつとのこさ、フェイトちゃんとなのはちゃんの闘いね」

上海二一ト

「そうだな、無駄に伸ばしてしまったからな。戦闘シーンは苦手なのだがね」

紫・蒼真

「「はあ、だからこいつは駄目なんだ」」

上海二一ト

「ちくせう！それは、兎も角…幻想と転生の使者…limited world crisis…始まるよ！」

第二十二話 幻想と決戦

蒼真 side

さあ、新しい朝が始まった。と言うか、決戦当日だ。

俺たちは、海鳴公園にいた。

最終決戦とは言わないが、此处で何かが終わる……いや、逆だな。
何かが始まるんだ、恐らくなのはとフェイトの…

「蒼真君、いよいよだね。私、修行を挫けずに頑張れた。だから今日は、フェイトちゃんと戦う。だから、蒼真君も自分の戦いに専念してね」

「ああ、危なくなったら助けるぞ。一応はチーム戦だからな」

「うん、でも大丈夫。私は、勝つから」

決心は、硬いようだ。俺が心配しなくても勝利を持って帰ってきそうだな。

そろそろ、時間か。

クロノ達は、アースラとかいう戦艦で観戦だっけな？良い御身分な事だ。

その時、俺らの頭上で空間が裂ける。スキマだ、紫さんか。

「いよいよね、もう相手はきたみたいよ」

「ん？転移ですか、魔法って便利だな。パチュリーに習っけばよかった」

直ぐ目の前に魔法陣が展開される。輝きが一層激しくなり、二人の

人影が現れる。勿論、フェイトとアルフだ。雰囲気从一开始から戦うつもりなのか敵意が厳しい。

「来たよ、ジュエルシードをかけて戦おう」

「今日は、絶対に負けないから！」

「こっちも同じさ！」

三人は、対峙するが俺だけは完全に蚊帳の外……別にさみしくないよ？アウトオブ眼中でもめげたりしないさ。

でも、出来れば気付いてほしいな、俺がこの場に存在する事。

「完全に忘れられているわね。可愛そうね」

「はは、まあそれだけ譲れないで事でしょうね。さあ、いがみ合いは終わったか？そろそろ、勝負だ」

枯れた笑いを出しながらも俺は持ち直し、三人に問いかける。三人は、無言でうなづく。ふう、さあ……始まる、今日まで努力はしてきたつもりだ。これで駄目なら諦めよう、ただ簡単に負けるのは勘弁だ。

突如、結界が生じる。これは、ユーノが使っていた結界……なんだが無駄に範囲と強度が上がってる気がするんだが……ん？ユーノが片手にギブスを着けながら結界を張ってる……大方、紫さんにしごかれたな。この人、結界に関してはエキスパートだからな。

『四人とも揃ったようね。事情は、その紫さんから聞いてるわ』

と、上空にモニターと共にリンディさんの顔が映る。

「ああ、大丈夫だ。決闘前に全員に条件をもう一度確認する、勝った方がジュエルシードを全て貰える。バトルは、形式上はチーム戦……一人を倒せば加勢してもいいが……まあ、そんな無粋な事は俺はしないがな」

「うん、理解してる。今度こそ完全に勝利してジュエルシードを渡

してもらっ」

「そう！今日は、勝って帰るんだ！」

「負けない、絶対に負けない！私は、今日勝ってフェイトちゃんとお話するんだ！」

「四人の理解は正しい様だな。よって、決闘を始める！」

あれ？何時の間にクロノいたんだ？全く気付かなかった、気配を消すスキルでも強化したのか？

何はともあれ、クロノの合図によってなのはとフェイトは海上に飛び立つ。勿論、俺とアルフは地上戦……理由は、なのはとフェイトの決闘を邪魔しない為、極力協力はしないつもりだ。二対一なんてやった日には、寝覚めが悪いわ。

『では、正式に決闘を始めます。では……………開始!』

リンディさんの合図とともに俺は、飛びだした。一撃必殺、初撃で全てを終わらせれば後は、ゆっくりと観戦したいところだ。

「速攻だね、そう来ると思ってたよ!」

「ちつ、やっぱり読んでたか…だが、一向に問題ない。それも読んでいた」

初撃を防がれた俺は、懷から事前に造っていた火爆符を三枚取り出し、無造作に投げつける。

「くっ!?……………なっ、爆発した!」

札を無意識の内に防御したアルフは、爆撃を喰らい何歩か後退。

引っ掛かったな、アホがあ!

「止めだ！爆撃符」

拡散する大量の火爆符を発射。辺り一面は、真っ赤に燃え上がりベ
ンチやコンクリートの地面が崩壊する。あゝ、やり過ぎたか？まあ、
どうせ隔離世界だから実際の世界には干渉できないんだからいいか。

その時、金色の閃光と共に爆音になる。

上空を見上げるとフェイトが、なのはを全力で攻撃したようだ。く
っ、土煙でなのはが安否が確認できない！

「舐めるなあああ！！！！！」

「何ッ！？ぐああああ！！！！！」

一瞬だけ、注意を逸らした隙を狙ってアルフが決死の一撃を当てて
きた。完全に不意打ちだった。俺は、無残にも地面に何度か叩きつ
けられて無様に転がされる。

骨が幾らか折れた様で呼吸が上手く行えない。くそっ！子供の身体が此処まで弱いとは、慢心していた俺が悪いが防御力の低さに泣きそうだ。

立ちあがれそうだが、最初ほどのスピードは出せそうもない。仕方がない、応急処置として硬化符で…

「まだまだ終わってないよ！休む暇なんてやらない！勝つのは私らだ！」

「がつ！？やべ、避ける暇がない」

結界も張り様がない。アルフの猛攻は俺が倒れるまで続いた。身体の痛みよりなのはの事が気になった。フェイトに撃ち落とされたのだろうか？それとも海に沈んだのか？

決死の思いで念話を繋いでみる。

『なのは……無事か？』

『蒼……真君？大丈夫だよ、ちょっと油断しただけだから、蒼真君も頑張って勝ってね……私、負けないから』

すぐに、戦いに集中する為か念話が切れた。

……俺は、何をしているんだ？調子に乗ってやられてるだけじゃないか？守るとか宣言しておいてこのざまか……寧ろ足を引っ張ってるのは俺の方じゃないか！！！！

ざけんな！？これ以上、俺は無様に負ける必要なんてないんだよ！

勝つ、勝つ、勝つ、勝つ、勝つ、勝つ、勝つ……！！！！

「何時まで寝てるんだい？まさか、これで終わり何かじゃないんだろっ？」

挑発的なアルフの言葉なんて聞いていなかった。ただ一つ、俺は勝利への執念を解放すると同時に十二神の術式を一つ解放した。前は、天狼を解放したが今回は勝つために武器を取る事にした。

俺が、勝利する為に用いた術式……

「てめえは……俺には勝てない。もう、俺は本気で行く事にした……我、頂点に捧げられし剣なり、汝の答えと共に覇道の力と共に全ての障害を薙ぎ抜く！禁忌術十二神融合、一神装着！彼のモノの名は【天剣】」

輝きと共に俺の手には、過去幾度も強敵をなぎ倒した愛剣が握られていた。

天剣：何処の誰が造ったか分からない代物。神をも屠るほどの潜在能力を隠し持っていると言われているが初代から今に至るまで誰もその力を見たモノはいない。

だが、特殊な能力が付属されている。

【全ての現象を消し去る能力】

ありとあらゆる現象を消し去る聖剣。全てを制し全てを薙ぐ事が出

来る最強の剣だ。

俺は、勝つ！何が何でもこの戦いを勝ち抜いてやる！

第二十二話 幻想と決戦（後書き）

次回、決闘が決着！

新たな動きが四人を襲う！

第二十三話 幻想と決着（前書き）

上海ニート

「ああ、ほぼ放置していたね……」

蒼真

「とんでもなくすみません。作者に心の余裕がなく真面目な文章を書く力が欠如しておりました」

紫

「軽くスランプね。一応は、治ったのかしら？」

上海ニート

「治ればよかったなと思ってます。なんだか早すぎる五月病みたいな感じですね……他の小説は書けるのに」

蒼真

「死ねばいいと思うよ」

上海ニート

「それは兎も角、幻想と転生の使者 } limited world
crisis } 始まるよ！」

第二十三話 幻想と決着

「我が幻想の剣……受けきれぬものなら受けてみる！魔法は幻想、幻は回帰し無に還るのみ！」

「やってみなよ！前は不覚をとったけど今回ばかりは、本気で行かせてもらおうよ！」

激突するアルフの拳と俺の剣。誰もいない公園で空しく金属音と爆音が飛び交うだけ。言葉はいらない。ただ目の前に対峙する敵を倒すだけだ。

そうだろう、前世より継承した禁忌十二神はクロノが言うロストロギアみたいなものだ。存在自体がばかっている。故に使い手を選ぶ、運よく俺はこの力に認められ受け継いだ。

仮初の時を崩壊へと導いたと称されている破滅と忘却の剣。この伝説となった天剣は、何も詳細が分かっていない……否、分からないのだ。

「くそっ！？チェーンバインド！」

「魔法の鎖か？」

連撃を繰り出していたアルフが、突如その場を離れ魔法陣を発動。すると同時に足もとから鎖が多数現れ俺を押さえつける。だが、この幻想の剣には無駄。

「言つたら、魔法が幻想である限り回帰するってな」

「なっ、バインドが簡単に破壊された！」

驚きを隠せないアルフ。そうだろうとも動きを止める筈が無駄に時間を消費しただけだったんだからな。それに補助魔法には自信があったんだろう。

「続きだ、その程度で終わってくれはしないんだろう？」

「そうさ、確かにあんたには魔法が通じないのは分かった。だってら、近距離戦で勝ってやるだけさ」

不敵な笑みを浮かべアルフが特攻をかける。本気らしい、迷いが一切ない。

その拳に一体何を乗せて戦っているのかどれほどの想いを体现しようとしているのか。

俺は、心を読む事なんてできない。だから、他人の心の中を覗き込むことなど不可能。だけど、何となくだが分かる。

アルフは、必死なんだとフェイトの為に死に物狂いで駆け巡り主を助けようとしている。

フェイトも同様に母親の役に立ちたい、笑顔をもう一度見たい。

そんな素直な気持ちが彼女らを動かしているのだろう。

だからこそ……決着をつけないければならない。なのはにも想いはある、ちっぽけかもしれないが小さな心で真っ直ぐ生きようとしている。そんな彼女たちを俺は護って行きたい。

昔、そうしたようにこれからもそれは変わらない。

「おらおら！どうしたよ、お前の想いはその程度か！勝つんだろ！
だったらもつと激しく！強く！気高く舞いやがれ！！！」

「うるさい！あんたに何が分かる！！！フェイトは、苦しんでるんだ！母親の所為で！母親の為に！！！！だから負けられない！！！」

激しくなる攻防戦、アルフから繰り出される無数の拳。素人から見れば分身しているようにも見えるだろう。俺もそれを当たらぬように剣で防ぎきる。着々とスピードが落ちている、無理もない激しい攻撃を重ねると言う事はそれだけ筋肉の持久力を削っているという事なんだから。

「これで決着をつけるよ！！！」

「これで……終わりだ」

何事にも終わりはある、この戦いも例外ではない。隙のでかい大きな一撃を叩きこもうとしたアルフだがそれは俺からすれば格好の的だ。

大きく振りかぶるその一撃、魔力で強化されている拳はとてつもな

い威力を誇るだろうがなんにせよ当たらなければどうと言っ訳ではない。

俺は一瞬の差でそれを掻い潜り、一閃。

「がはっ！？フェイト……ごめんね。負けちゃったよ」

「せめて……安らかに眠れ」

ばかりとその場に倒れ伏すアルフ。

いやまあ、死んで無いよ？あれだから、幻想の剣は現象を忘却させることで消し去る。故に剣で切られたという状況を忘れさせれば良いだけの話だから。

「さて、あつちも大詰めか」

ふと空を見上げる。なのはがフェイトに特大のスターライトブレイカーを打ち込もうとしていた。うわっ、えげつねえ。

『聞こえるか！こちら、アースラのクロノ！そちらに巨大な魔法反応が――』

直後、視界が真っ白に染まった。何だ！？一体何が！！

『ぐっ、エイミィ！ 攻撃の位置を把握してくれ。蒼真、なのは！ 無事か？』

クロノから再び念話が入る。原因をアースラで調べているらしい。

「ああ、無事だが……それより二人はどうなってる！」

周りの視界が悪くて見えない。くそっ、なのは達に念話が繋がらない。

ぞくっ

異質……それそのものが俺の動きを止めた。瞬間、眼前が無数の銀のナイフでおおわれていた。

この攻撃はまさか！？

次の考えが思い浮かばなかった。俺が最後に見たのは天より飛来する雷撃だけだった。

第二十四話 幻想と遭遇（前書き）

上海ニート

「いやー長らくお待たせしました」

蒼真

「本当に待ったな」

紫

「そっね、何時まで経っても更新しないんだから」

上海ニート

「同時更新は難しいのだよ。絶対に偏りが出るから」

蒼真

「じゃあ、一つに絞ればよかったじゃないか」

上海ニート

「後の祭りだ」

蒼真・紫

「駄目だ、この作者！速くなんとかしないと！」「」

上海ニート

「てな訳で始まります」

第二十四話 幻想と遭遇

全身が痛い。至る所全てが激痛に襲われている。全身にやけどを負った様な痛みだ、そうか……俺は雷撃に当たって気絶したのか。

「ぐっ、此処は」

目を開けるとそこには見知った顔がいた。

「目覚めはいかがかしら？私の玩具そつま」

「…………レミリア？」

「それ以外に誰に見える？私は、一度もお前を間違えた事は無い。それなのにお前は目の前にいる私を他人と見間違えるのか？」

見間違えではない、低い身長で独特の薄紅色のワンピースを身につけている少女。何よりも紅いその瞳は、恐怖を増長させ、背中から立派に広がっている小さな蝙蝠に似た羽は彼女の存在を証明していると言っても過言ではないだろう。

「いや、それはない。あまりに衝撃的な出会いに一瞬夢かと思ったんだ」

俺の瞳に映るお嬢様が本物ならばレミリア＝スカーレット。永遠に幼き赤い月の称号を持つ悪魔もとい吸血鬼だ。

そして、生前俺に無理難題を押し付けまくった拳句の果てに『私のモノになれ！』宣言をかますほどの我がままだ。

いや、あれだよ。世間では美味しいポジションかもしれないが、下手に承諾したモノなら何をさせられるか分からないしな。ちゃんと可愛い所もあるんだけどな。

「ふふ、残念ながらこれは夢ではない。現実には起きているのよ」

「ああ、理解は出来た……のだが、何故に縛られているんだ俺は」

手首足首を御丁寧に魔法コーティングで加工された縄で縛られている。俺は、そっち系のアブノーマルな趣味は持ち合わせていないつもりなんだがな。

「貴方が逃げない様にしっかりと縛ってみたわ。フランも貴方に会いたがってたのよ、可愛い妹のお願いぐらい聞いてあげるのも姉の義務よね」

「明らかに私用だろ！？で、その女性は誰だ？」

すると後ろで様子をうかがっていた女性が前に出てくる。目つきの悪い、黒い髪を肩越しまでなびかせるローブを着た女性。何となく研究員とか魔術師とかいうのが似合いそうだ。

「貴方が縁授蒼真。私の愛しいアリシアを蘇らせることのできる存在」

「行き成りだな。レミリア、一体この人に何を吹き込んだんだ？」

「簡単よ。娘を蘇らせて貰える代わりに貴方を捕獲するのを手伝え……と契約したのよ」

何て自分勝手な願いをかなえようとしているんだこの悪魔は……てか、俺の意見は聞いてないとも言いたげにふんぞり返ってるよ。

「そんな事はどうでもいいのよ！早く教えなさい！あの子をアリシアを蘇らせる事の出来る方法を……！」

「……死者を蘇らせるということは、自然の摂理に反し神を恐れる禁忌だ」

「そんな事は知っているわよ！？それでも……私は、もう一度元気に笑うあの子を見たいのよ！」

切羽詰まった表情で叫ぶこの女性。何となく分かるのだが子を思う心が変な方向へ暴走してしまったみたいだ。立派な母親なのだろうが一度狂ってしまえば狂人にすぎない。この人は心から病む一步手前なのかもしれない。

「分かったよ。ただ、媒体となる土人形とか娘の一部がいるんだが」

「なら問題ないわ、アリシアの身体はちゃんと保管してあるのよ。
こっちよ、着いて来なさい」

そう言つて踵を返す彼女。母の子を想う心は偉大だな、此処まで人を掻き立てる。俺の母親がそうだったようにこの人もそうなのかもしれない。

「さ、行つて来なさい。私は、此処で事の成り行きを見届けるわ」

いつの間にか用意されていたテーブルと椅子、それに腰を下ろすレミリア。悠然とカップに注がれた紅茶を堪能している。

その横には銀髪のパークトメイド長十六夜咲夜がスタンバイしている。

成程、落雷を受ける寸前に見えたナイフはこの人の所為か。全く、受けるこっちの身にもなってほしいもんだぜ。

「何をしているの！早く来なさい！！」

「はいよ、今行く」

またあの人が吠えだしたのでちょうど壁をくりぬいた様な入口が出来ているのでそこへ向かって歩き出した。

「これがアリシアの身体よ」

「……………」

あまりの光景に俺は絶句した。文字通り、言葉がでない。目に移るのは、カプセルの様な容器に入った金髪の少女。何処となく幼さが

残る顔立ちだ。

何より……フェイト「テストロッサに瓜二つ。

「そう言えば、自己紹介がまだだったわね。私は、プレシア「テストロッサ」

そして二重の意味において衝撃告発を受けた。

-
-
-
-
-
-
-
-
-
-
-
-
-
-
-
-
-
-
-

変えられない過去がある様に変えることのできない事実がある。

私は、とても悲しい現実には直面していたの。

写りだされる女性の顔、そして悲しいほどに過酷な話。

『フェイト、貴女を造ったのはやはり失敗だったわ。ぐずぐずしてジエルシードを集めきれないでいるのね。もういいわ、貴女は使えない人形よ。そう、貴女は私の娘『アリシア』テストロッサのクローン。あの事件で愛娘を失った私は、全てをつぎ込んで貴女を造った……でも、貴女はアリシアにはなれなかった。もういいわ、何処へでも好きな場所へ行きなさい』

フェイトちゃんとの戦いの最中に放たれた雷撃は、私たちを吹き飛ばし蒼真君を襲った。そして、その首謀者であるこの人、プレシア「テストロッサさんは……いとも簡単にフェイトちゃんを捨てた。

その時のフェイトちゃんの反応は酷な物だった。

全て終わった。そんな表情で泣いていた。とても悲しい涙を流していた。

今は、アルフさんと一緒にアースラの一室で休んでるみたいなの。

でも、蒼真君が拉致されてしまったの。

『私は、レミリア＝スカレット。吸血鬼、ヴァンパイア、スカレットデビル、永遠に幼き紅い月、色々と呼ばれているがそれは今はどうでもいい。縁授蒼真の身柄は預かった。返しはしない、こいつは私の物だ。忠告しておく、もし取り返しに来るならばそれ相応の対応はさせてもらう』

小柄な女の子がプレシアさんの次に現れそう言ったきり通信は途絶えたの。

アースラの人たちも必死で場所を特定し部下を送り込んだってクロノ君が言ってたけど……私はどうすればいいのかな？

このまま、待つだけじゃ何も変わらない気がするの。

フェイトちゃんの事も蒼真君の事も……私は、両方助けたい。

「うん、ユーノ君。私行くよ、フェイトちゃんは……どうか分からないけど一応聞いてみる！」

「ちょっとなのは!?!もっ……言い出したら聞かないんだから」

第二十五話 幻想と正義（前書き）

上海二一ト

「淒く遅れてすみません。」

更新しようと思っていたのに色々とやる事が多かったので放置状態……頑張ろう」

蒼真

「何て奴だ。全くしつかりしてくれ！」

紫

「それは兎も角、始めましょう。展開が気になっている方も少なくはないのだから」

上海二一ト・蒼真・紫

「『幻想と転生の使者』limited world crisis
is 始動！！！！」

第二十五話 幻想と正義

〔蒼真 side〕

縄で拘束されながらも器用に歩いたりできる俺だがこの状況には、茫然となっちまったぜ。

「……………」

フェイトに瓜二つなこの少女。一体どういう事だ？それにテストロツサ、という事はフェイトが言っていたお母さんとはこの人の事になるが……娘がアリシア、ならフェイトは一体？姉、妹？

「貴方が悩んでいる理由が手に取る様に分かるわ。フェイトの事ね、アリシアと瓜二つ。そう思ってるんでしょね。実際の所は、外見だけよ」

「外見だけがそっくりなのは血縁とかそんな感じなのか？性が同じだし」

「そうね、血はね。あれは、アリシアから造られたクローンよ」

一瞬、息が詰まった。クローン、聞いた事がある。細胞一つ一つまでが同じモノが作れると言う現代医学の最先端だとかどうか。人型と同じ様な代物かと思っていたがこれほどまでも同じモノが作りだせるとは驚いた。

しかし同時に命を造ると言う事は、禁忌に等しい。

「アンタ、これがどんな行為なのか分かっているのか？正気が、オリジナルが死んだからクローンを造るなんてこと」

「分かっているわよ。だから、こうしてフェイトはアリシアを元に造られた。でも、あれは出来そこない。全てを費やして造った割には失敗したのよ、失敗作……」

「撤回しろ！フェイトを失敗作といったことを……！」

身体の奥から感じられる黒い衝動。思い浮かべるは、金色の可愛らしいあの子。よく言っていたフェイトは、母の為だと一生懸命に頑張っていた。それをこの母親は、娘のクローンだから、アリシアというオリジナルにならなかったからという自分勝手な理由で否定した。

ゆるさねえ、殺してやるとは言わない。だが、一変その面を殴らせろ！

手足の拘束具が軋む、怒りの感情と共に噴き出す霊圧によって拘束にほころびが生じ始めた。

「くっ、魔力を完全に断つ筈の拘束具を破壊しようとしている？ だけどその枷はどれだけ強い魔力でも分解して無力化するのよ。腕力でも使って破壊しようとも思っているのかしら？」

「霊力ならどうだ？ 魔力と対をなす、力ならば分からないだろうが！」

頭に血が上る。ただ、娘を蘇らせたいと願うだけの母親ならば少しは考えた。反魂の術で仮初の時を与えてやる事も出来た……例えそれが少ない時間であってもだ。

なのに彼女は、狂信した様にクローンをフェイトを造り、実の娘と違うと分かればゴミの様に捨て去る。そんな事が許されてたまるか！！

命を造ったのなら、最後の最後まで面倒みてやれよ！

「あの子は、アンタの事を母と呼んだ！母親の為の苦しんで傷付いた！なのにアンタは何故、何故！！彼女の事を思ってくれないんだよ！！！」

「確かにフェイトは、私を思ってくれているみたいね。でも、違うのよ……フェイトはアリシアになれないのよ！！」

俺とプレシアは激昂する。同時に拘束具が吹き飛び、自由を取り戻す。目を覚ませとは言わない、アンタのやったことが間違いだとは言わない。でも、これだけは言わせて貰う。

「命は、誰にでもあるんだ！その子にも、俺にも、アンタにも……フェイトにもなあ！！！！それを無下にするのはゆるさん！！」

手元に青々と輝く剣が出現する。幻想を忘却へと追いやる自慢の一振り。柄を握り感触を確かめ、悲しみを地の果てへと吹き飛ばす！

「貴方に何が分かる！私は、アリシアを取り戻せばいい……ごほっ！ふふ、もう残り少ない命これでアリシアを……」

「それは、ジュエルシードか！？まさかあの時に回収されていたの

か！」

「幾らかは足りないけど、行って見せるわ！貴方が使えないらな、賭けに出て勝って見せる！！」

くっ、紫さんが幾つか気になるからという理由で所持してなければ、この人に全てが渡る所だったのか。危ない所だったぜ。

「私は行くわ！必ず、アルハザードへ！！」

プレシアの意思に反応したようにジュエルシールドが輝き始める。

「これは、次元が裂けている！？」

研究施設の個所が少しずつガラスのかけらのようにひび割れて落ちて行く。

「蒼真君！？」

悲鳴の様な叫び。聞き覚えのある少女の声。

「なのはか！それにフェイト、アルフ姉さん！！後、クロノ」

「ちょっと待て！？僕だけ扱いがぞんざいだ！」

「知らん」

空気が似合う男、スパイダーじゃなかったクロノをスルーして現状を把握する。

何か強い光を得た瞳を輝かせるフェイトとなのは。それに何時も通りに元気なアルフ姉さん。

それぞれ所々、負傷しているが……レミリアと咲夜さんか。

しかし、このメンツでレミリアと咲夜さんを倒せるとは思えないんだが……やっぱりあの人が関与しているよな。

「どうして此処に？」

テンプレだろうと何だろうと関係ない、一応お決まりの台詞を一言。

「紫さんたちがレミリアさんと咲夜さんを止めてくれるの」

「ああ、藍と妖夢という二人組が此処の動力炉を破壊しに行ってくれた。だから、直ぐに逃げる用意を！」

成程、重役二人のお世話係はこの場所を撃墜しにいったのか。てか、動力炉というほどだから戦艦か何かの中なのか此処わ。

「母さん、私は確かにアリシアのクローンかもしれない。望まれていない存在かもしれない。だけど、私は貴女の事を世界で一人しかいない母さんだと思ってるよ」

フェイトは胸の奥にしまいこんでいた感情を吐き出すように自分の気持ちを伝えようと一生懸命に言葉を紡ぎだす。

「フェイト……」

「フェイトちゃん」

アルフ姉さんもなのはもその状況を見守っている。ちなみに空気を読めなそうなクロノは俺が引きとめている。何でも任務がとか時間がないとか五月蠅いのでな。

「そう……フェイト。貴女は……いえ、今更遅いわ。例え、私が貴女を娘と認めようと時間は待ってくれないのよ。この身体は、病で蝕まれて死へと向かうだけ……母親らしいことなんてできないもの。ふう、疲れたわ行きましょ、アリシア」

なんでだよ、何でそこだけ母親の様に笑うんだよ。アンタは、まだ死んじゃいけない。アンタが傷つけた子を癒してやれよ。

「母さん!？」

巨大な裂け目が現れ、プレシアとアリシアは落ちて行く。それをフェイトと俺たちは見ているだけしかできなかった。

プレシアは、心のどこかではフェイトの事を娘だと認めていたのかもしれない。

ただ、状況が悪かったただけのかもしれない。もし、プレシアを蝕む病がなかったら……もしかしたら、何て想像だけで終わる俺じゃないかな。

今までそれが出来なかったなら、未来から始めればいいじゃないか！
いま

「やれやれ……トンデモナイ母親だな。自分勝手に行動した挙句、勝手に消える。ほんと我がままで自滅しだすしかなりひねくれている。あー、人々がなのはみたいに一直線で素直ならいいのに」

「ふえ！？何でそこで私を引き合いにだすの！」

「そりゃそうだ。君の素直さは、人類が見習うべきだと思うよ。まあ、主にアリサとかな。」

「それじゃあ、単刀直入に聞く。汝、フェイトⅡテストロッサは母であるアリシアⅡテストロッサを救いたいのか？」

「えっ、は、はい！」

急に真面目になった所為か緊張するフェイトは大きくうなづいた。

「なら任せなさい。直ぐに助けだして見せるさ、そして償わせてやるんだ……母親として生きて傷つけた者に謝罪させる」

「馬鹿な！？あれは、次元断層と言ってどんな魔法を無効化するモノだぞ！死ぬ気か！」

「知らん」

さつきからクロノが五月蠅いが華麗に回避すれば問題は無い。さてと……魔法を無効かね、まるで俺の愛刀の様だな。

「蒼真君、大丈夫なの？」

「蒼真……」

心配なのか二人がこちらを不安げに見詰めてくる。なら、返す言葉は一つしかございません。

「おいおい、心配するなよ。俺は、天才だぜ？どんな困難だってへっちゃらさ！大人しく待ってるんだぞ、直ぐに帰って来るからな」

そうやって俺は、目の前の断層へと飛び立った。

第二十六話 幻想と異界（前書き）

上海ニート

「色々と開放されたから更新できるね」

紫

「でも、もうすぐ採用でしょ？」

上海ニート

「鬱だ死のう」

蒼真

「駄目な作者だな。さて、それは兎も角」

蒼真・紫・上海ニート

「幻想と転生の使者」limited world crisis
「始まるよ！」

第二十六話 幻想と異界

変な感じがする。浮遊感と掴みどころのない感覚、俺が死んだ時と同じような状況だ。

目の前が真っ暗になり全てが闇に吞まれ見えなくなる…考える事も無心になる事さえできない死の空間。だが、現状では把握できないが俺は死んだわけじゃなさそうだ。

もし死んでいるのなら、禁忌を使った反動として魂は壊れ輪廻に戻ることなく崩壊する。

故にこうやって考えることすらできないのだから。

「あー、声の反響は無し。それに微妙だな、無重力とかいうのに似てると言うか。まあ体感した事は無いんだがな」

周りは黒色の壁に囲われているようだ。まるで墨で眼球を黒く塗りつぶしたように全くと言うほどに何も見えない。しかも距離感も取れないというお手上げ状態。

「天才といったものの、結構骨が折れそうだ。その方が面白そうだとは思うがな」

未だ手の中におさまっている愛刀を振るう。これが幻想の存在であれば消し去ることも可能だろう。

案の定、黒い壁に亀裂が入った。やはり、魔法関連のモノだったか、しかしプレシアとアリシアは何処へ行ったのか？

その答えは、直ぐに見つかった。

黒い空間から抜けだした先には、大きな建物の一つ。だが、それ以外のモノはない。周りを見回しても永遠に広がる次元のはざまを思わす色とりどりの色彩で表わされている空間。

「これは、一体何の建物だ？」

「ごほう、はあはあ。此処がアルハザードなのかしら？私は、賭けに勝ったの？」

直ぐ横にプレシアとアリシアを保管しているカプセルが転がっていた。プレシアの容体はおもしろくない、今にも死んでしまいそうな病人の顔つきで目の前の建物を凝視している。

そのおかげで俺と言う存在に気付いていない。

「よお、一応着いたみたいだな」

「何故！？貴方が此処にいるのかしら！」

「凄い権幕でこっちを見てくれるな。アンタの娘さんからの要望でお母様を救出に着たまでだ。それにアンタは言ってただろ。アリシアを復活させるってさ、自分の家族を大事に思うのはいいことだからな……正直、あのやり方は俺は賛同しないが、蘇らせる方法ぐらいなら一緒に探してやるよ」

「貴方……馬鹿な子なのね」

あきれ顔でプレシアがため息をつく。失敬な！これでも天才で通っている、更に霊力や魔力も使える素晴らしく天才的俺様だぞ！何がいけないって言うんだよ。

「さて、どうでもいいが……入ってみようぜ。此処が本当にアルハザードとか言う場所なのか。はたまた別の空間なのか。そんなもつてアリシアという娘を復活させる方法をさ」

「そうね、アリシアを蘇らせるなら私は、藁にでもすがる思いよ。例え、此処がアルハザードでなくとも探し出して見せる」

「ほいじゃ行くか。重そうだが、そのカプセル持とうか？」

「……………情けないわね、自分の娘すら抱きかかえる力も残っていないなんて」

「いや、物理的にその大きさじゃ無理だろ」

人一人分あるカプセルを持ち運ぼうとした勇氣は認めるけど明らかに病人にこれは不可能だろう。俺が背負う事にしたがかなり重いなこれ。

- - - - -

『フェイトside』

蒼真が母さんとアリシア姉さんと次元断層に落ちてから一週間が経とうとしていた。私は、この事件の加害者としてアースラ及び時空管理局に拘束され裁判にかけられることになった。

普通なら100年単位は牢獄で過ごすことになるだろうとクロノは言っていたけどリンディさんとクロノの弁護でどうにか実刑にかけられることは無くなりそう。

それに私は時空管理局の嘱託魔導師資格を取ることにした。

色んな人に迷惑をかけたしそれでも私は、この件で強くなり

たいと思ったから。

なのはが教えてくれた、真っ直ぐな心。

友達という存在。

私を支えてくれたアルフにも感謝しないとね。

……蒼真にも感謝してる。だから、速く帰ってこないかな？

- - - - -

『蒼真side』

中に入っても不思議な空間は続いていた。謎の建物の中は本という本で埋め尽くされていた。パチユリーの図書館にも匹敵するだろうその収納されている本の量、本棚にしまわれているモノが主だがよく見れば入りきらなかったのか下に積み重ねられているモノもある。

どでかい図書館が時空のはざまにある……怪しすぎるな。

「よく分らない本が多いわ。これは、ミッドチルダの魔法構成について……よく分らない文献や私たちの世界とはかけ離れた魔法の使い方が載っている本もあるみたいね。これだけの本があるなら死者を蘇らせることのできる知識も手に入るかもしれないわ」

「そうだな。探してみるか、ついでに面白そうな本は回収する」

という訳でアルハザードという場所なのかどうかは知らないがとりあえず、貴重な書物があるかもしれないという理由をつけてがさ入れを開始した。

それから一時間（体感時間）ぐらい経っただろうか？量が量だけあってまだ一割も読み切っていない俺は、本一つ一つの厚さにノックダウンされそうだった。天才だと言っても連続で本を見続ければ疲れる。前の身体なら問題なく五時間は見れていただろうが今は、違う。更に付け加えるなら大魔導師様の攻撃が抜けきっていないせいか身体がだるい。

「にしても……熱心だな」

ちらりとプレシアの方を盗み見る。魔導師というだけあって本をすらすらと読んでいく。読めないモノは、別の場所に保留しておき読めるものから解読して言っているらしい。俺は、題名から内容を想定して探しているだけなんで読んだ量は劣るが探す時間がかなりかかる。

逆にプレシアは、区画で区切り内容を飛ばし飛ばしで読んでいるみたいだ。熱心に内容を全て見ていた俺がアホみたいである。

「ん？何だ、此処だけ微妙に嚴重な結界と鍵が施されているが……禁書とかそれ相応の魔書の類か？」

休憩がてらに散歩をしていると本棚と本棚の間に重厚な扉を見つけた。文字通り、金属製でかなり古い様で押しても引いてもびくともしない……結界や嚴重な鍵が付いているだけにな。

「楽しそうだな。破壊してやろうか、それとも普通に解読して開けてやろうか。どちらにしても魔法は結界に遮られ、物理的には鍵と扉がふさいでいる。中々、面白そうだ」

手っ取り早く解析にかかる。ふむ、見た事もない結界だな。幻想郷では色々と結界について色々教えてもらったがこのタイプは初めてだな。外壁に魔力を吸い取るタイプの術式、それであって内壁は魔力反射を考えて造られている……更に浸食や侵入に対しての抵抗出来るタイプの術式も見かける。

とんでもなく難しいな。凡人なら解けるどころかさじ投げるぜ。だが、生憎俺は天才なんだな。このぐらい解けずに天才を語れるか！

調査開始し初めて五分後

「疲れた、だるい、メンドクサイ」

即、五分で諦めかけていた。五分前に戻るなら俺を殴って目を覚まさせてやりたい。術式に侵入しようとするれば弾かれるし魔力でル

ーンを削ろうとすれば消されるし何これ！超だるい。

あつ、対極の存在である霊力で介入すればいいんじゃないのか、これ。

パチン

電球が切れる様な音がした後、外壁の結界が崩落した。

わあ、俺ったら最強ね。訂正、天才だけど抜ける所は抜けてるっばいな俺。

「さて、お次は……反射か。侵入のルーンはまだ顕在してるし……
…霊力でねじ伏せてもいいんだが反射は色々とメンドクサイ性能誇
ってやがるな。魔力何処るか物理以外なら反射しやがる」

術式が埋め込んである魔法陣を調べていると小休憩を取っていたプレシアがやってきた。

「何をしているの？それは、反射魔法陣ね。このタイプの構成は反射以上の力を加えてやると破壊できるわ。所でこれは何なの？嚴重な造りの扉みたいね……まるで何かを封印している様な」

「何となくだが、この先には秘術に関わるモノがありそうなんだよな」

殆ど勘なのだがこの先には、面白いモノがあると俺の第六感が躍っている。叫んでいるのではなくサンババりのダンシングを見せてくれている。

「いいわ。私が一定量の魔力で攻撃するから、蒼真。貴方がそれゴト跳ね返すことが出来るのなら開くわ。でも、チャンスは一回きりよ……私の身体はもう持ちそうもないの」

「そうか、分かった。俺も成長符の限界が近いみたいだから……笑っても泣いても一回きりだな」

「じゃあ、行くわよ！」

プレシアが等身大の杖を掲げる。すると小規模だが魔力の濃い紫雷が発生する。

それが魔法陣に直撃すると紫電はあっさりと反転して持ち主の方へと向かって走る。だが、そこに俺が割り込む。

「爆雷方天戟・集！！！」

体内に残る残留魔力を吐き出すように前へと解き放つ。収縮して極細の光線が紫電をかき消し魔法陣ごと扉を貫くのが眼前で見えた。

次の瞬間、重厚な扉は壊れたおもちゃのように崩れ去る。

「よし！しかし、魔力を使いすぎた所為か子供に戻っちまった」

「ごふっ、はあはあ。私の事は心配しないで中にあるものを見て来なさい。これで何もなかったら恨んで死んでやるわよ」

「恐ろしい女だな。ま、ちょっくら見てくる」

壊れた扉を抜けた先は、薄暗い小部屋だった。

周りには、歪な程のラインの様なモノが多数張り巡らされておりその中心にあるモノを見つけた。

ただ一振りの剣。

ただの剣じゃない。柄の部分に宝玉の様なものがセットされており刀身は、機械的なギミックが付属されておりまるで人間の動脈のよ

うに一定の速度で脈を打っていた。

第二十七話 幻想と魔装（前書き）

上海ニート

「すみません、CODとプリキュアみていたら更新が遅れました」

蒼真

「なんじゃそりゃ……」

上海ニート

「社会人になったものの……夜勤が連続であつたりで死にかけたりしてたよ！もう夜勤やりたくないね！というか職場から離脱したい！引きこもりたい！」

紫

「真性の引きこもりニートね」

蒼真

「紫さんも大して変わらないのでは？滅多に外にでないみたいです」

紫

「私はいいのよ。幻想郷の結界を見守っているのだから」

蒼真

「へえ、昼寝しながら？」

紫

「さて、こんな茶番は終わらせて本編行くわよ！」

蒼真・上海ニート

「逃げたな」

紫

「それよりも！幻想と転生の使者！limited world
crisis！始まるわよ！」

第二十七話 幻想と魔装

「これは、剣みたいだが……なんだかメカちつくな形状をしてるな。珍しい、何よりもなんで此处に厳重に隠されているかが知的好奇心を揺さぶる」

「これはデバイスね。しかも見た事もないような術式が使われているわ、ミッド式でもないベルカ式でもない……複合している様な複雑な方式ね」

プレシアさんがそう言いながら祭壇の様な場所に突き刺さっているデバイスらしきものを調べている。この世界の武器については全くと言うほど知らないからな。天才だからといっても知らない事を知ることができない。

逆に知ってたらすげえよ。天才じゃなくて大賢者だろそれ……身近にはいるけどさ。

「そついえば、デバイスって何なんだ？」

「そうね、簡単に説明するなら魔法を使う為の記憶媒体。あの白い子やフェイトが使っているのがインテリジェンスデバイス、魔法の記憶媒体を持っていて尚且つ人工知能を持っているわ。補助をしてくれる代わりに術者が弱いと話にならない。で、一般に使われるのがストレージデバイス、まあ所謂道具ね。術式展開が速く誰にも使える様にはなってるけど多様性があまりに少ないの」

「ふーん、俺らでいう符に近い存在だな。陰陽師は基本的に使い捨てだがね、西洋の魔法使いみたいな杖は持っていない訳さ。……何となく興味がわいたな、帰ったらクロノにせがんでみるのも悪くない」

「他にも融合型デバイスというのもあるのだけど……これは特殊だから知らなくてもいいんじゃないかしら？」

「それは追々として……まずはこいつの解析が先か」

てか、目の前にあるのもデバイスなんだよな？ だったらこれ貰っても良くない？ 形状からして戦闘用なのは確かだろうし剣型てのが俺と愛称が良さげだ。

「プレシアさん、このデバイスはインテリジェンスなのか？ それと

もストレージなのか？」

「よく分らないわね、そういうのは専門職の奴らにでも聞いてみないと分からないわよ。ま、起動してみれば分かると思うけど」

「じゃ、早速」

デバイスの柄に手を伸ばす。すると中央にあった宝玉が光る、それと同時に小型の布陣が幾つか展開される。つまりだ、導き出される可能性は万に一つ……攻撃だ。

直後、小型の布陣から直線状に熱源が放たれる。だが、俺は天才だ……式神を盾にして防ぐぐらいの外道っぷりは発揮できるさ！

「あ、メモ帳切れてた」

俺ったらバカス。誰かさんの雷魔法の所為で式神用にストックしていた符が焼けたんだった。つまりだ、現在魔力切れに伴い霊力も少ない……導き出される行動はただ一つ。

「ふんぬばら!」

訳分からん言語共に背を逸らせ地面に手を着くポーズをとる。所謂、ブリッジという体位だ。子供の身体が柔軟と言う性質を生かせば腰を痛めずに使えると言う緊急回避技である。少し年をとると非常に腰を痛めるのであまりお勧めしない。

「あぶねえ、今のは素でヤバかった」

「防衛プログラム? 違う、これはデバイスからの意図的な攻撃」

『そうだ、儂に触る愚かものなど燃えてしまえばいい』

突如、女性の声が響く。俺の予想が正しければ十中八九、この剣だよな。

「まさか、管理人格! だとしたらこのデバイスは融合型!」

「希少価値万歳！早速頂きますだな」

気にいった。俺、こんな面白そうなモノ久しぶりに見たぜ。よしよし、強引だが宝物を目の前に食い下がるような奴は漢じゃねえ！

『戯け、主様以外のモノに儂をやすやすと触らせると思うところのか
！』

「だったら無理やりにも認めさせてやらあ！！」

膝を折り、身体をかがめる。そして血に蓄積されている魔力と霊力の素を体内に循環させる。この行為によって失われている表面上の力を一時的に復活させる。この身体だと特異エネルギーのキャパシティが低い為にやり過ぎるとオーバーして暴走につながりかねない。故に一定時間のみ魔力や霊力を開放し戦えるのである。

同時に子供体型から成長体型へと変貌。連続して打ち出される魔法と思わしき攻撃を圧縮した魔力を展開した盾で弾く。

『霊力が上がった。更に風体が代わるとは……面妖な奴じゃな』

「あんたにや言われたくないな」

攻撃を弾きつつどうすれば認めさせる事が出来るか考える。そしてこの剣の人格が言っている主に関しても興味があるこの図書館の主であれば、アリシアを復活させる方法を知っているかもしれない。それ以前に滅びた世界だけあって生きているかどうかは知らないがこいつに聞けば多少裏が取れるだろう。

「撃ち払え！弾幕は健在、されば迎え撃つ！」

両腕の甲に描かれている五芒星により弾幕を振りまく。相手は納められた剣、弾幕でかく乱させて一撃のもとに屈服させてやる。そこまで広くない部屋に色とりどりの弾幕が展開される。

『むっ、やるの。じゃが、この程度では僕の防御壁を通る事はないの』

「結界？違う、あれはなのは達が使っていた防御魔法か」

俺より放たれた弾幕は、剣に当たる瞬間何かに弾かれたように消失。ふむ、ちよつとやそつとじや壊れない防御陣な、少々建物に損傷ができるが……奴の名言を借りようじゃないか。

幻想郷屈指の直行型弾幕使い様の格言をさ。

「やれやれだぜ、さてと……弾幕は、パワーだぜ!!!爆雷方方天戟・集!!!!」

即座に魔法陣を三つ展開して直線状に強大な熱源を発す。すぐに見えない壁に直撃し黄色い火花を散らす。

『ぬうう、馬鹿な。此処までの威力を誇り貴重な図書館すら考慮しない鬼畜技を使うとわ!お主、さては外道だな!!!』

「ふははは、外道じゃない。ただの通りすがりのどSだぜええええ!!!!!!」

更に出力をあげ、威力を圧倒的なほどに引き上げる。あまりの衝撃

に剣が収まる祭壇がほころび始める。剣の周りは既に俺の弾幕より亀裂が入るつつある。無論、一度ぶっ壊すつもりだが剣自体には損傷を与えない様にマージングしてるから大丈夫だ。その他は知った事じゃないがな。

「下手な外道より一層清々しいわね」

プレシアさんが何か言ってるらしいんですが全然耳に入りません。入ったとしても通り過ぎます。

『馬鹿な、主様以外でこれ程の術師が………口惜しい!!』

「とつとと壊れちまいな！でやあああああ！！！！！！！！」

どこの少年漫画みたいにフルパワーで熱線に力を付与する。これによりデバイスの障壁が崩壊した。そして黄色の閃光は全てを飲み干し………

図書館を崩壊させてしまった。

「蒼真、言い残したい事は？」

「正直すまなかったと思っている。まさか、アレだけの威力で崩壊するとは予想だになかった」

「死になさい！！今すぐ、アリシアの蘇生に必要な資料は今や、瓦礫の下よ！！」

激昂するプレシアさん。おいおい、怒ると美人な顔が鬼神のようだぜ……とかキザったらしい台詞を言い放つ暇もなくただ弁解に走る俺だった。

「まあまあ、別に蘇生法ぐらいはどうかなる後は媒体だけだ。生命を器に戻すつてのは輪廻の法へと違反する。つまり神を冒瀆する所業……俺みたいに記憶を持ったまま転生するのは稀にある事だが、それとは別なんだな（正しくは、外道法を使ってるから神を冒瀆しまくりだな）」

「ぜえぜえ、ごほ……御託はいいわ。戻す方法は」

荒い息を整えようとしてせき込む。そうだった、この人は病人だった。ちなみに剣のデバイスは、持ってきた。図書館崩壊と同時にちやっかり祭壇が壊れたので頂いた。現在、中の人は気絶したのかうんともすんとも言わない。

「命の対価にはそれ同様のモノが必要。人の命に代わるようなエネルギー又は……他の魂」

「いいわよ、私の魂とやらを使いなさい。アリシアをこの手で抱けるのなら」

決心は固いようだ。病人とは思えないほどの意思が瞳から読み取れる。何処の世界でも変わらない、母は偉大なのだろうか。狂っても外道と言われようとも子供の幸せを願うか、じゃあ俺の母さんもあの時……いいや、今はどうでもいい前世の話だ。

「決心は固いようだな。だが、仮にアリシアが蘇ったとしてもその後はどうする。アンタは死ぬ、輪廻におぼれ全ての記憶を失い転生する機会をうかがい命の一つに還るのみ……残された彼女はどんなる」

「そうね、蒼真。貴方に任せましょう、アリシアの事……それとフェイトの事も」

「おお、親公認ですか。これは有り難いな」

「アリシア達を泣かせたら化けてでてやるから覚悟しなさい」

「おお怖い怖い」

アリシア……達ね。何が何だでフェイトの事を認め始めているのだろうか。それとも……最初から……いやどうでもいいな。それよりも彼女たちの幸せを願う美しき母親を天にあげるのが俺の使命だな。

『む、此処は外か。……なんじゃ！図書館以外の建物がない！俺が眠っている内に何が起こったのじゃ！！』

「あ？気付いたか、というかこの場所が崩壊した事を気付いてなかったのか」

『で、では……主様は』

「死んでるな確実に……」

狼狽する彼女に止めを刺すようで悪いが真実を突きつける。知らないほうがいいことも多いが知っていなければいけない事もある。

『ならば、儼は……どうすれば』

「俺について来い。その主様がどうだか知らんが俺はこの崩壊した世界から元の世界に戻りたい……故に此処に詳しいお前が欲しい」

『ぬ、感傷に浸る暇もないのか。それ以前にでりかし〜という言葉が無縁の様じゃな』

「喧しい。図書館は、崩壊したが……重要な本は他の場所にあるんだろ？ 大方、地下とかな」

『鋭いの、主が壊した部屋の何層か下に禁書目録倉庫がある。そこは心して訪れるのだな、読むだけで魂を焦がされる程の禁書が複数

あるからの』

良い事思いついた。それだけ強力な物があるなら……輪廻の輪を無視した転生法があるかもしれん。

「プレシアさん、もうひとつの可能性に賭けよう。おい、えーと名前は」

『この剣は、【イクシオン】……儂の名は、妖妃^{ようひ}』

「よっしゃ、妖妃。禁書目録倉庫まで案内しろ！」

『やれやれじゃ、全く主様は死んどるし世界は滅んどるし……泣きたいわい』

便利なデバイス（案内人）を手に入れた事だしさっさと帰る方法も考えるか。

第二十八話 幻想と禁書（前書き）

蒼真

「おす！俺、蒼真！！奇妙なデバイスを見つけて地下に向かう事になったんだ！」

上海ニート

「はい、アーモンドチョコを丸のみして喉に詰まらせたニートです。この頃、更新がとんでもなく止まっているんですよ」

蒼真

「現実逃避と言う名の失踪だろ？」

上海ニート

「違うねん！？時間が足りないんやねん！！！！3DS発売されてからテイルズオブジァビス出たし時オカも出てるんやで！！！！やるしかないだろ、一か月の給料を全て捧げたとしても！！！！」

紫

「この子はとんでもなくお馬鹿のようね。気分転換に100キロマラソンでもして来なさい」

上海ニート

「それは私に死ねと？」

蒼真・紫

「それ以外に何が？」

上海ニート

「社会も冷たいけどこいつらも冷たいんだけど……暖かいのは読者様ぐらいだよ。寧ろ、生温かい目で見守られていそう」

蒼真

「そんな事よりそろそろ無印終わらせようぜ。いい加減グダグダもいい所だ」

上海ニート

「いやだね、なのは達にフラグを立てるまでにはいい意味でも悪い意味でも終わらせること出来ない……」

蒼真

「いや、もうフラグ立ってから！これ以上は、ヤンデレを奮起させてしまう！そんな事になったら俺の命が」

上海ニート

「貴様の命など一度尽きている！故に二度目も同じ事だろうが！と言っ訳で幻想と転生の使者〈limited world crisis〉始まるよ……」

蒼真

「畜生おおお……」

紫

「やれやれね、あきれ果ててツッコミを放棄する事にしましたわ」

第二十八話 幻想と禁書

「イヤホオオオツオオオオオオ！！！！！！！！！」

発狂する俺。理由は簡単、貴重な禁書を拝借もとい閲覧できると言う喜びと新しい玩具を見つけた事にある。ブロードソードの様な無骨な『イクシオン』もとい妖妃。

景気良く地面を掘り進んでいる訳ですよ。

「いけ、イクシオン！」

『ぬう、仕方ない』

目の前に展開される布陣から集束された魔法が放たれる。硬い地面を次々に削り徐々に禁書目録庫への道が完成しつつある。なのはたちが使っていたデバイスと呼ばれる機械は、細かな魔力誘導や計算などをやってくれるおかげで幾らか力の発動を抑えてくれる。

所謂、リミッターの役目を果たしてくれるから有り難い。天才的な

術師の俺であつても未発達な子供の身体＋定着していない魂で力を完全に引き出すことは無理だ。

「底知れぬ才能……本当に貴方は何者なの？」

「ただの天才さ。気にする事は無い、魔法や術の扱いは人間が息をすると同じぐらい自然に出来るからな」

「本当に規格外な人物ね、貴方と言う人わ」

「本当じゃの。主様以外には使えぬようにプロテクトが掛けられていた筈なのにも関わらず、それに即座に対応しプログラムを書き換えるなど到底真似できぬ所業じゃ」

「何せ天才ですから」

「お主、天才の一言で何もかもがまかり通ると思つてなかつたかな？」

呆れ気味の妖妃の声が聞こえるがこの際気にしない。後ろの方でプレシアさんがため息をついている気がするが全くと言つほどに関係がない。

「ん？ふふ、当たりの様だ」

とある手ごたえを感じた。俺が放った魔法が結界又は魔法障壁に衝突したらしく淡い火花が散る。

「強固なプロテクションね、書庫を護る様に展開されているのにも関わらずその全ての防御力が異常な程に高い」

「万能型のシールド見たいなモノか、良いだろう！穴を掘り進めている間に考えた必殺技を披露してやるだけさ、この障壁には実験台になってもらおう、イクシオン！！！！」

『何をやるきじゃ？無茶をして儂に傷をつけてくれるな』

一旦、後ろに下がる。イクシオンを中段構えで槍のように持ちかえその刃に魔力を乗せていく。すると僅かに肉眼視できる膜が妖妃を包み込む、よし……イケる。

「行くぜ！名付けて『スティングーバスター』だ」

地面を踏み抜くと同時に全力で前進。膜が前方を覆う様に広がっていく、これでOKだ。低空飛行を実現とした突進魔法『スティングーバスター』は、高速で敵に体当たりを食らわせる超突撃なのである。魔理沙の魔符【スターダストレヴァリエ】から頂くもというラーニングさせていただきました。

『このシールド、あの障壁と同じ魔力値……まさかお主！？』

「ははっ！そうさ、ダイヤモンドを分断するには、針を通すような技術を持ってして割らなければいけないとあるが同じ硬度同士の物質をぶつけあえば欠ける……それに突進力が合わさればなおのことだ！……」

『馬鹿な！こんな安直な方法で最高峰と呼ばれた禁書目録庫の結界を破壊できる訳が』

「だったら、お前の記憶メモリに改善が必要だな……数百年前に滅びた世界の常識など俺に通用する訳がない！！！」

どん！という衝撃の後、イクシオンの切っ先が結界にぶち当たる。
俺の目論見通り、砕け散るステンドグラスのようにそれは崩壊し光
の粒子に還ったのであった。

「ふはは、これで邪魔な防御システムは破壊完了！さくつと侵入だ
……！」

『何とデタラメな……』

妖妃が呆れ半分驚き半分の感想を述べているがこの際、無視する。
手際良く地下書庫に潜入もとい突撃したのはいいのだが色々と問題
が起こった。

まず一つ、現在魔力値が最低レベルまで弱体化……この世界で表わ
すならB＋ぐらいのランク付けになる普通からしたら以外に高い方
だと言うが……集束魔法や巨大な術式を使えない時点で低いと断定
した。

二つ目、周りを囲う障壁を破壊したのは言いが、どうやら防衛シス
テムが作動したらしい。書庫内には大量の魔道人形が出現しやがっ

た。

三つ目、満身創痍な仲間達……プレシアさん、ただ今絶賛吐血中。
妖妃、俺の魔力がないとただのお飾り残念剣……俺、魔力値低下中
+ 血の開放もとい魔力供給の枯渇。

「絶体絶命とは、言ったもんだな。だが、俺には切り札が残っている」

「ごほっ！？この状況で、まだ何か隠し持っているのね、アリシアの為よ……何が何でもこの雑兵たちを駆逐しなさい……！」

「血を噴き出しながら言う台詞じゃないよ、それ。ああ、知り合いの引きこもり魔法使いを思い出した」

脳内に浮かべた全体的に紫色で統一された体力最下位の引きこもり病弱もやしっ娘萌え系魔法使いを思い出した。うん、可憐で弱弱しく物理攻撃されたら即死級のHPの持ち主だったよな、あれが普通の女の子だったら母親にたまには外に出てこいつて追い出されるんだろうな。

と、物思いと妄想に耽るのはこのぐらいにしてそろそろ、切り札もといジョーカー的存在のあの人物がやってくるだろう。俺の予想が正しければもう数秒後には……

「はい、呼ばれて飛び出てゆかりん よ……！」

「ワア、セカイイチカワイイユカリンキタコレ……！」

何か唐突もない出現の仕方をしやがりましたので全力でフォローに回ろうと頑張ったがどうやらこの人の行動一つ一つが天才であるこの俺にも把握できそうもない、てかしたくない、強いて言うなら脳が理解するのを拒否している。

「は？」

『なんじゃこの面妖な輩わ』

意味が分からないよ！とばかりに二名が困惑する。まあ無理もないだろうな、このノリについていける人物は恐らく上級者だろう、なんのだって？言わせんな馬鹿鹿野郎……！

「さて、この人形たちをどう料理しようかしら？隙間に送りこむだ

けで済む話だけどそれじゃあ芸がないわね。幻巢【飛光虫ネスト】」

紫さんのスペルカードが発動し小さな隙間が無数に現れる、その一つ一つから羽虫に似通った弾幕が飛来する。数が数だけに複数存在した魔道人形もたちまちガラクタへとなり果てる。

その様子を啞然として見守る、一本の剣と一人の母親。このぐらいは言うまでもなく見なれている俺に隙はなかった。

「さて紫さん。此処に来るまでに結構時間がかかってますね」

「ええ、此処は一応は【崩壊した世界】先ず、形を保っていられる方が奇跡としか言えませんわ。故に来るために色々複雑な規制を回避しながら来たと言う訳よ」

「図書館が得意そうなパチュリーとか小悪魔辺りが増援なら良かったんですけどね」

「あら？私じゃ不満？一応、こんな低落だけど大賢者とまで呼称される程よ？」

「そうですね、じゃあ此処の場所を探しますか」

その後は、放心状態だったプレシアさんを現実に引き戻し禁書の事をデータに取りこんでいた妖妃のナビゲートのもと禁書の中でも蘇生に特化した本棚を見つけることに成功した。

それは、そびえ立つお城の如く居座っており木製の外装は年月を経て風格を生みだしている。全長20メートルはあるだろうか巨大な本棚だ。

「うえ、何冊有るんだよ？これを探してたら軽く一週間は此处で暮らしそうだぜ」

「そうね、蘇生方法を限定して探しましょう」

「急がなくてはいけないの。私には時間がないから、アリシアを生き返らせるためにはそんなに待ってられないのよ！」

すぐさまプレシアさんは、手近の魔道書を開き朗読し始める。

「妖妃、デメリット無しで蘇生させる事が出来る術式が乗っている本は無いのか？」

『それは難しいの。犠牲なき事からに成功なし……よく儂の主様が言っておった、多少の犠牲を払う覚悟を持たぬ者が何かを手に入れることなどできないとな』

生意気にも正論でかえして来やがる。そうさ、世界は何時もその選択を提示する……大いなる犠牲が気付かれる事のない犠牲。つまり一人を犠牲にするか千人を犠牲にするかという天秤をかけてくる。

「遺体がある時点でそこその条件で蘇生可能だろ？後は、方法だけだ。それに彼女らはあまりにも大きな犠牲を払いすぎた」

『確かにの……無意識かそれとも何らかのしがらみか。まあよい、百参十段の九十九番から百拾式までを探せば良いと思うぞ』

「悪いな、紫さん」

「ええ、スキマね」

目配せすると直ぐに意図を理解した紫さんが俺の真下にスキマを開き次の瞬間、嫌な感覚と共に百参十段の九十九番に辿り着く。壊れかけの足場に着地して本棚を物色する。

「ん？なんだこの禍々しい雰囲気は……………この本か。これは……………！？」

棚から一冊の本を取り出そうとしたが瞬時に嫌な感覚を覚え本を手放す。軽い音と共に本は板の上に落ちるが……………その本はこつちを見ている。そう文字通りこちらを凝視するように憎らしげに切なげに睨んでいるようでもある。その本には、まるでそこに人の顔があるような錯覚さえ覚える形の表紙が造形されていた。

「聞いた事がある。作成時に『人間の皮膚』を使って作りだされた魔道書……………冥王の鍵、またの名をネクロノミコン」

『これは初版みたいじゃな、しかしこの本は死霊を操る本だった筈じゃ。何故こんな所に？』

「そんな事どうでもいい。見てるだけで呪われそうだ」

意を決してネクロノミコンを拾い上げ本棚にリリースする。あー気持ち悪かった。

「ねえ、蒼真。こんなのはどうかしら？」

「紫さん、それは？」

スキマが開いたと思ったなら紫さんが顔を出した。どうやら本当に手伝ってくれるようだ。

「人の肉体が健在なら魂すら呼び出す……えーと必要なモノはユニコーンの角ね」

「待つてください。それ以上はいけない、どうせレイズ。ツトだ」

「あら？知ってたのね」

「一応予備知識として記憶してました。あれは、その血筋と精神力とかその他もろもろが必要でしょう？俺には無理です」

「そう残念ね」

そういうとスキマを閉じて詮索に戻ったらしく既に他の棚にいる。皆、ちりぢりになった方が効率がいいのかもしれないな。

「それにしてもあれ……どうするかな」

下の方でせつせと本を漁るプレシアさんの背後を見ながら俺は呟く。

『なんじゃ、やはり気付いておったか。あの女のそばには小さな娘つ子の霊が控えておる……じゃが、どんなに一生懸命に叫んでも母には姿どころか声すら届かんとは悲しいの。気付いておったら何故教えてやろうとせんのじゃ?』

「独り言に反応するなよ。それにあの親にどれだけ言おうと聞かないさ……狂った人間には何も意味をなさない……か。嫌な世の中だな、でも近いうちに気付くかもな」

『どうしてそう思うのじゃ?』

「男の勘かな?」

『なんじゃそれは……』

何だか自分の武器に蔑まれた気がするが俺は大きな心の持ち主なので気にしない。ま、どうにかなりそうだな、あの二人は………後は、フェイトだな。

そんな事を思いながらも俺も魔道書を探すために行動を速めるのであった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0434n/>

幻想と転生の使者～limited world crisis～

2011年12月13日00時54分発行